九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語会話における「からかい」の様相 : 「遊び」としての「からかい」の相互行為分析

呉, 青青

https://hdl.handle.net/2324/4110419

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

日本語会話における「からかい」の様相

―「遊び」としての「からかい」の相互行為分析―

九州大学大学院
地球社会統合科学府
呉　青青
2020 年 5 月

目　次

第 1 章　序論 1
1.1 はじめに 1
1.2「からかい」とは 2
1.3 日本語会話データに基づいた「からかい」の研究の現状 3
1.3.1 相互行為の社会言語学・談話分析のアプローチにおける「からかい」の研究 4
1.3.2 会話分析のアプローチにおける「からかい」の研究 5
1.3.3「からかい」行為の流れ及び先行研究との対応関係 6
1.4 なぜ相互行為分析で「からかい」に取り組むのか 8
1.4.1 相互行為分析とは 8
1.4.2 相互行為分析で「からかい」に取り組む利点 10
1.5 本論文の目的と構成 12
第 2 章　方法論とデータ 13
2.1 会話分析の概念 13
2.1.1 行為の構成と理解 13
2.1.2 連鎖組織 15
2.1.3 優先組織 18
2.1.4 順番交替組織 19
2.1.5 修復 22
2.1.6 遡及的連鎖 24
2.2 マルチモダリティ 25
2.2.1 視線 25
2.2.2 ジェスチャー 27
2.3 会話における参与枠組み 28
2.4 データの概要 29
2.5 データの示し方 30
第 3 章「誰かと共に笑うこと」か「誰かを笑うこと」か 33
― 笑いながらの他者発話の繰り返しに着目して ― 33
3.1 はじめに 33
3.2 笑いに関する先行研究 33
3.3 分析 37
3.3.1「誰かと共に笑うこと」 38

3.3.2「誰かを笑うこと」 48
3.3.3 小括 62
3.4 考察 66
3.5 おわりに 67
第 4 章「からかい」を行う前の「準備」段階 68
―「え? 」「ん? 」「なに?」などの無限定の質問に着目して― 68
4.1 はじめに 68
4.2 他者修復連鎖 69
4.2.1 他者開始修復が対処するトラブルのタイプ 69
4.2.2 無限定の質問で開始した修復におけるトラブル源の産出者の対応 70
4.2.3 無限定の質問の産出者が直面しているトラブルのタイプ 72
4.2.4 先行研究のまとめ 73
4.3 分析 74
4.3.1 無限定の質問が同時に産出される事例 74
4.3.2 無限定の質問が順次に産出される事例 84
4.4 考察 90
4.5 おわりに 91
第 5 章 「からかい」の協同構築 92
―「観衆」の振る舞いに着目して― 92
5.1 はじめに 92
5.2「観衆」の参与役割と反応 93
5.3 分析 95
5.3.1 からかう側のスタンスに寄り添いつつ「からかい」を協同構築している事例 96
5.3.1.1「からかい」が産出されるまでの経緯と「観衆」の絶妙なスタンス 99
5.3.1.2 「からかい」の協同構築と「観衆」の貢献 107
5.3.1.3「観衆」による「からかい」のエスカレーション 111
5.3.2 からかう側のスタンスに寄り添わずに「からかい」を協同的構築している事例 113
5.3.2.1「からかい」の産出及び「からかいのチーム」を組むという提案 114
5.3.2.2「からかいのチーム」を組むという提案に対する「観衆」による“拒絶” 117
5.3.2.3 からかう側のさらなる「からかい」への「観衆」による代弁 118
5.4 考察 120
5.5 おわりに 121
第 6 章 総合考察 122

6.1 はじめに 122
6.2 「遊び」としての「からかい」の特徴 122
6.3 おわりに 130
第 7 章　結論 131
7.1 本論文の概要 131
7.2 研究の意義 132
7.3 今後の課題 133
参考文献 134
辞書 142
謝辞 143
付録 145

第 1 章　序論

1.1 はじめに

親しい間柄において、わざと相手のおかしさを取り上げ、憎まれ口を叩いて相手を困らせたり怒らせたりして楽しむことは、日常生活でしばしば行われることである。このような行為は、本気ではなく（non-serious）、遊び心（playfulness）　のある言語行為、つまり、「遊び（play）」として認識されている。本論文では、こうした「遊び」として行われる様々な行為のうち、特に「からかい（teasing）」に焦点を当てるものである。

「からかい」は、一見すると、人と人とのやりとりにおいて重要ではないように思われるかもしれない。しかし、我々のコミュニケーション活動において、「からかい」及び「遊び」一般は重要な機能を果たしている。例えば、試合の前に監督はしばしば真面目な話をするが、緊張を緩和するために選手をからかったり冗談を交わしたりする[1]ことも少なくないだろう（Glenn and Knapp 1987）。相手が逸脱行動をした場合、真剣に指摘するよりも、相手をからかう形で指摘する方が、相手の面目を保つことができる（Geyer 2010）こともある。さらに、「からかい」は、親しい関係同士で親密さを示すために用いられることはもちろん、知り合いになろうとしている者や親しくなりたいと思っている者の間で、親密さを生み出すためにも用いられる（Haugh and Pillet-Shore 2018）。「からかい」及び「遊び」一般は、主要な活動を中断して行われ（Huizinga 1955: 9）、主要な活動の達成とは無関係に見えるが、「我々の元気を回復させ、自分自身の気持ちを一新して回復するのに役立ち」（Glenn and Knapp 1987: 50）、私たちの日々の生活の平衡を保っている（Glenn and Knapp 1987）。これらの機能について、Haugh（2017）では、情動機能、道具機能、対人機能などに分類、記述されている。

「からかい」が持つ機能が明らかになりつつある一方で、人々がどのような方法や手続きを用いて「からかい」を成し遂げているのか、日本語会話における「からかい」がどのような特徴を持っているのか、という点については未だ十分に解明されていない。この 2 つの疑問を解決するために、本論文では、コミュニケーション研究の一環として、会話分析（Conversation Analysis）[2]という手法を用いて、成人[3]の日本語会話における「からかい」について考察を行う。

---

[1]「からかい」か「冗談」か、明確に線引きできない行為が存在する。我々の日常経験から言えば、誰かをからかった後、「冗談だよ」と追加することもある。Haugh（2016）は、「からかい」の後における「Just kidding」という発話に注目している。本論文では、「からかい」を「遊び」の一種として捉えているが、「冗談」の一種と言っても構わないと考えている。

[2] 本論文においては「会話分析」の代わりに「相互行為分析」を用いているが、この 2 つの用語を使い分けるつもりはない。具体的には、1.3 節で詳述する。

[3] 概ね 18 歳以上の人を指す。幼児の遊びにおける「からかい」と区別するために用いる言葉である（牧・湯澤 2011 を参照されたい）。

序論では、以下の 4 点について述べる。第一に、「からかい」の定義を述べる（1.2 節）。第二に、日本語会話に基づいた「からかい」の研究の現状を確認し、本論文の位置付けを示す（1.3 節）。第三に、本論文がなぜ相互行為分析で「からかい」について取り組むのかを述べる（1.4 節）。最後に、本論文の目的と構成を示す（1.5 節）。

1.2「からかい」とは

「からかい」とはどのような行為であろうか。

まず、辞書で語彙的意味を確認する。広辞苑第 6 版によれば、「からかう」とは、「冗談を言ったり困らせたりして、人をなぶる。相手のいやがる言動をして面白がる。揶揄（やゆ）する」ことを意味する

次に、「からかい」に関する研究における「からかい」の定義を見てみる。「からかい」に関する研究は、心理学を始め人類学、社会学、社会言語学など様々な分野、文脈において行われており、その定義も一様ではない[4]。しかし、それらの定義は互いにまったく異なっているわけではなく、「からかい」は多層的であり、常に意図的に他者からの情動的な反応（たとえば、怒りなど）を引き出そうとする「挑発性（provocativeness）」[5]と、言語的または非言語的に示唆される「遊戯性（playfulness）」[6]という 2 つの要素を含むとする点において共通している（Palwuk 1989, Keltner et al. 2001, 牧 2008, Haugh 2014 ,2016, 2017 等）。挑発性は、怒りのような相手に対するネガティブな評価要素を含んだ、攻撃的な形態をとることが多い（牧 2008）。遊戯性は、参与者同士の関係性や話題等、その発話が産出される文脈によって理解されることもあれば、相手のまね、ウィンク、笑い声、語調やトーンの変化、独特の表情などを伴ったやり方によって示される場合もある（初鹿野・岩田 2017, 牧 2008）。しかし、「からかい」は、曖昧性（ambiguity）（Shapiro, Baumeister, and Kessler 1991, 遠藤 2007）を持つために、常に遊戯的に解釈されるとは限らない。さらに、単純に挑発性と遊戯性とを組み合わせる発話が「からかい」になるわけではなく、様々なプラクティス（practice）（やり方）[7]を通して遂行される（Haugh 2017）。

---

[4] 先行研究における「からかい」の代表的な定義としては、以下のようなものがある。

- Drew (1987: 219) “the kind of playful humorous jibes which are called *tease* in English”;
- Shapiro, Baumeister, and Kessler (1990: 460) “teasing is a personal communication, directed by an agent toward a target, that includes three components: aggression, humor, and ambiguity”;
- Albert (1992: 152) “a tease may be profitably viewed as an aggressive verbalization couched in some situational qualifiers indicating playfulness”;
- Eder (1993: 17) “Here teasing will be defined as any playful remark aimed at another person, which can include mock challenges, commands, and threats as well as imitating and exaggerating someone’s behavior in a playful way. While the content of teasing would often be negative or hostile if taken literally, the playful meaning is determined in part by cues from the teaser indicating that the remark should be taken in a playful manner”.

[5] 攻撃性や挑戦性などの言葉で表される場合もある。

[6] 非真剣的（non-serious）という言葉が使われた研究もある。

[7] 本論文では、何らかの行為を成し遂げるために、参与者によって繰り返し用いられる、ある言語的・非言語的・身体的ふるまいの型を指す。プラクティスと行為の関係は、一対一である場合も、一対多である場合も、多対一である

上記のように、「からかい」には複数の要因が関わっており、「からかい」は複雑な行為であると言える。本論文でも、「からかい」は「遊戯性」と「挑発性」の両方を持つ行為であるという先行研究の定義に従う。しかしながら、「遊戯性」と「挑発性」をもつ行為がどのような状況で「からかい」として認識されるのか、また、それがどのようなプラクティスを通して実現されているのかということを分析するには、「からかい」をからかう側からからかわれる側に向けられた行為というような一方向的行為ではなく、相互行為の中で参与者たちが協同[8]で成し遂げるものであるという観点から分析することが不可欠である。そこで、本論文では、「からかい」を以下のように定義し、相互行為的側面に焦点をあてて分析、考察を行う。

「からかい」とは、参与者たちが協同で行なう行為において、様々なプラクティスを通して成し遂げられる「遊戯性」と「挑発性」の両方を兼ね備えた行為である。

1.3 日本語会話データに基づいた「からかい」の研究の現状

前節で述べように、「からかい」の研究は様々な分野や文脈において行われている。本節では、様々な研究のうち日本語会話データに基づいた「からかい」の研究の現状を概観する。次に、「からかい」行為の流れ及び先行研究との対応関係を図式で明示した上で、本論文の位置付けを示す。

「からかい」をテーマにした研究には、水島（2006、2008）、Geyer（2010）、Machi（2014）、初鹿野・岩田（2014、2016、2017）、團（2013）、千々岩（2013）、安井（2019）等が挙げられる。加えて、「からかい」を「遊びのフレーム」の中で捉えた研究に、ポジティブポライトネスに関する論考（大津 2004）や間主観的個性の形成に関する考察（高梨 2016）がある。さらに、コミュニケーションにおける他の現象を議論する中で、「からかい」現象を 1 つの例として取り上げた研究には、西阪（2001）、初鹿野・岩田（2008）、Kushida（2011）高梨（2016）、遠藤・横森・林（2017）、安井（2017）、難波（2017）などが挙げられる。

以下では、諸研究が取り扱った方法論（研究の立場）により、相互行為の社会言語学（Interactional Sociolinguistics）・談話分析（Discourse Analysis）のアプローチにおける「からかい」の研究（1.3.1 節）と、会話分析のアプローチにおける「からかい」の研究（1.3.2 節）に分け、明らかにされた知見と残された課題を確認する。

場合もある。より具体的な記述は、Schegloff（1996）［西阪 2018］を参照されたい。

[8] 『広辞苑』第六版によれば、「協同」とは「ともに心と力を合わせ、助けあって仕事をすること」である。本論文における「からかい」の協同構築は、必ずしも相互に意図して「力をあわせ」「からかい」を構築しているわけではない。むしろ、参与者の互いの行為を理解することで、結果的に「力をあわせ」ているように見えるという状態である（坂井田・諏訪 2015: 112）。また、複数の人間が相互行為を構築するために、「それぞれの参加者が自らの行為を常に相手の行為と調整しつつ産出しなければならない」（林 2008: 16）という状況で参与している。この 2 点から、「協同」という言葉が適切であると判断し、以下、「協同」という言葉を用いる。

1.3.1 相互行為の社会言語学・談話分析のアプローチにおける「からかい」の研究

まず、「遊びのフレーム」の中で検討されている「からかい」の研究（大津 2004、水島 2006、高梨 2016、難波 2017 など）を概観する。これらは、人類学者である Gregory Bateson が提唱し、社会学者である Erving Goffman が発展させた「フレーム」という概念に基づき発展的に議論されてきた（Bateson 1972、Goffman 1974、1981）ものである。

「遊びのフレーム」を用いて「からかい」に取り組んだ研究の共通点は、「これは遊びだ」というメタ・コミュニケーション的メッセージの交換により「遊び」の「フレーム」や「コンテクスト化」が形成されることを指摘した点にある。会話の参与者が、「これは遊びだ（This is play）」（Bateson 1972［佐藤 2000: 259］）というメタ・コミュニケーション的メッセージ[9]の伝達を通じて、「自分達のやりとりをからかい表現の談話であると認識、すなわちフレーム化することにより、本来は攻撃であるはずの発話が、話者相互的な友好性を確認する手段となり得る」（水島 2006: 57）、ということである。

これらの研究は、「遊びのフレーム」を認識する手がかりとして、発話の繰り返し、韻律の操作、感動詞の使用などによる大げさな感情表現、スタイルス・イッチング、笑いながどの様々な言語・非言語的なもの[10]を挙げている（大津 2004、高梨 2016 参照）点で、非常に示唆に富んでいる。

加えて、水島（2006: 58）では、「からかい表現の談話は、フレームの構築を先導する人物により「からかい手（teaser）主導型」と「受け手（teasee）主導型」に分けることができる」と述べている。そのほかに、Machi（2014）は、三人会話における発話の繰り返しに着目し、会話参与者が「からかいのチーム」を組む事例を分析している。

---

[9] Bateson（1972）では、人間のコミュニケーションが単なるメッセージのやりとりであるにとどまらず、少なくとも 2 つの異なるレベルでメッセージのやりとりがなされているのではないかと考えられている。1 つは、単純に事実を表す「指示的 denotative」レベルのメッセージである。もう 1 つは、身振りや表情・動作、口調や声の高さといったメタ・メッセージ（「メタ言語的 meta-linguistic」「メタ・コミュニケーション的 meta-communicative」レベルのメッセージ）である。「これは遊びだ」というメタコミュニケーション的メッセージを展開すれば、「今やっているこれらの行為は、それが表わす行為が表すところのものを表わしはしない」（Bateson 1972［佐藤 2000: 261］）ということになる。Bateson はこの発見が動物園に行った時の観察から得られたものとして以下のように述べている。

私が動物園で目にしたこと、それは、誰にも見慣れた光景だった。子ザルが二匹じゃれて遊んでいた―二匹の間で交わされる個々の行為やシグナルが、闘いの中で交わされるものに似て非なる、そういう相互作用を行なっていた―のである。このシークエンスが全体として闘いではないということは、人間の観察者にも確実に知れたし、当のサルにとってそれが「闘いならざる」なにかだということも、人間観察者に確実に知れた。この「遊び」という現象は、ある程度のメタ・コミュニケーションをこなすことができる動物に限って現れる、つまり「これは遊びだ」というメッセージを交換できない動物には起こりえない、現象である（Bateson 1972: 179［佐藤 2000: 261］）。

要するに、動物の「遊び」において、「私たちが今行なっているこの行為（＝「噛みつき」）は、この行為が本来意味しているもの（＝攻撃）を示しているのではない（今遊んでいるよ）」というメッセージが交換されていると言える。人間のコミュニケーション行動も、それと似ている。

[10] Gumperz はこれらを「コンテクスト化の合図（contextualization cues）と呼んでいる（Gumperz 1982、1992）。

1.3.2 会話分析のアプローチにおける「からかい」の研究

会話分析の手法を用い、「からかい」を分析した研究には、初鹿野・岩田（2014、2016、2017）、團（2013）、千々岩（2013）、安井（2019）などが挙げられる。以下では、上記の研究に加え、西阪（2001）、初鹿野・岩田（2008）、高梨（2016）、遠藤・横森・林（2017）、安井（2017）で分析した「からかい」事例の知見も紹介する。

これらの研究の多くは、会話分析の手法を用いた「からかい」の先駆的な研究として知られている Drew（1987）の指摘を踏まえて展開されている。そのために、日本語会話データに基づいた研究ではないが、まず Drew（1987）の議論を取り上げる。

Drew は、からかわれる側がからかう側に同調する（going along with）反応は稀であるということを発見している。Drew によれば、からかわれる側は、笑いなどで「からかい」のユーモアの側面に反応する場合であっても、ほとんどの場合、真剣な反応をする、または予備的な（preliminary）反応をするという。このような現象は、「からかい」の「無表情な受け取り（po-faced receipts of teases）」と呼ばれている。なぜからかわれる側は真剣な反応をするのかを説明するために、Drew は「からかい」が生じている会話の連鎖特徴と発話のデザインを分析した上で、以下のことを明らかにしている。

まず、先行話者が愚痴や自慢、褒めなどの行為を「やりすぎ（overdone）」「大げさ（exaggerated）」と感じられるやり方で行ったその次のターンで、からかう側はその先行ターンの中の「からかい」の材料（「やりすぎ」「大げさ」など）を利用し、先行話者の主張や報告、評価などに対して懐疑的な態度を表す方法で先行話者をからかう。また、先行話者は目立たないあるいは通常の行為を産出しているが、からかう側は先行ターンに現れているアイデンティティーやカテゴリーを一種の逸脱したものに帰するやり方で、先行話者をからかう。

初鹿野・岩田（2008）は、ある参与者に向けて、目の前にいる参与者について言及することによって、言及対象となる参与者への「からかい」や「ほめ」が達成されることを指摘している。西阪（2001）と安井（2017、2019）は、このような現象にも言及している。初鹿野・岩田（2008）では、「からかい」行為が、言及対象となる参与者のターンの完結後に産出されるケースが取り扱われるのに対し、安井（2017）で検討するのは、「からかい」行為が、言及対象となる参与者のターンの完結前に、それに割り込んで産出されるケースである。安井（2019）は、このような「からかい」が産出される時に用いられているからかう側の指さしの役割について議論している。

初鹿野・岩田（2014）は、Drew（1987）の議論を元に、「からかい」のターゲットとなるのは、会話に現れる何らかの規範からの逸脱であると考えられると述べている。加えて、その逸脱が存在する位置により、①先行発話で語られたことにあるもの、②先行発話から想起された情報にあるもの、③先行する話の展開のやり方自体にあるもの、という 3 種類に分けられるとしている。

初鹿野・岩田（2014）では、③の事例が分析されているのに対し、初鹿野・岩田（2017）では、

①と②の事例が分析されている。具体的には、「からかい」の連鎖環境の特徴と「からかい」が生起する連鎖環境という 2 つの観点による分析である。前者は、「からかい」の先行発話のどの部分が逸脱として「からかい」のターゲットになっているのか、そして「からかい」に対して、からかわれた者ともう 1 人の参加者がどのような反応しているかについて、後者は、やりとりの中で「からかい」がどのような位置・環境で現れているのかについて分析したものである。初鹿野・岩田（2017）は、「緊張への対処や抵抗の手段として解釈しうる位置に『からかい』が起こっていると言えるのではないだろうか」[11]と指摘している。

加えて、千々岩（2013）と初鹿野・岩田（2016）では、からかう側は相手が好ましくない（嫌い、苦手）と思っていることを提案などの行為の形で産出することによって、相手をからかうというような事例を分析している。

さらに、「からかい」を 1 つの事例として紹介している遠藤・横森・林（2017）は、極性疑問文の中で感動詞的に使われる用法の「なに」に着目し、「『なに＋極性疑問文（Yes/No Question）』というフォーマットは、相手の発話において明らかに意図されていないことを（十分な根拠はないが）推論できる内容として提示して確認を求めるという戦略的利用によって、からかい行為を行う際に用いられることがある」（p.111）と述べている。Kushida（2011）では、相手に理解の候補を提示して理解を求めることで、相手をからかう事例も見られる。また、高梨（2016）では、冗談の口調で相手に対するネガティブな評価を産出することで相手への「からかい」を行うという事例が挙げられている。

最後に、團（2013）では、生徒の休み時間や授業中になされる笑いを伴う活動の中には、一見「からかい」に見えるが、指導すべきかどうかの判断が難しい「いじり」行為もあることが報告されている。このような行為は、Drew が取り扱った先行する行為に寄生的な方法で（parasitically）産出された「からかい」と異なり、先行する行為がなくても、特定の参加者を笑うことが可能になる現象である。

1.3.3「からかい」行為の流れ及び先行研究との対応関係

本節では、先行研究を踏まえて、「からかい」行為の流れ及び先行研究との対応関係を図式化して明示した上で、本論文の位置付けを述べる。

「からかい」は、先行する相手の行為に見られる過剰さや何らかの規範からの逸脱をターゲットにして行われるという指摘に基づき、「からかい」行為の流れを図 1-1 に示す[12]。図の右側に挙

[11] 初鹿野・岩田（2017: 39）は、「からかい」が社会構造的対立や緊張に対処する手段であることは先行研究でも指摘されており（Radcliffe-Brown 1952、Drew1987、Eder 1993）、「からかい」は相手の逸脱の顕在化であり、同時に、それをお互いに笑い合うことで、その場に生じた緊張と対立を緩和するものである（Drew 1987）としている。
[12] 本論文で扱う「からかい」は、先行する行為に見られた逸脱をターゲットにするものである。先行する行為に逸脱が見られなくても特定の参加者を笑うことが可能になる現象（團 2013）と「からかい手主導型」（水島 2008）は、

げているのは、これまでの日本語会話に基づいた「からかい」の研究で明らかになった知見である。

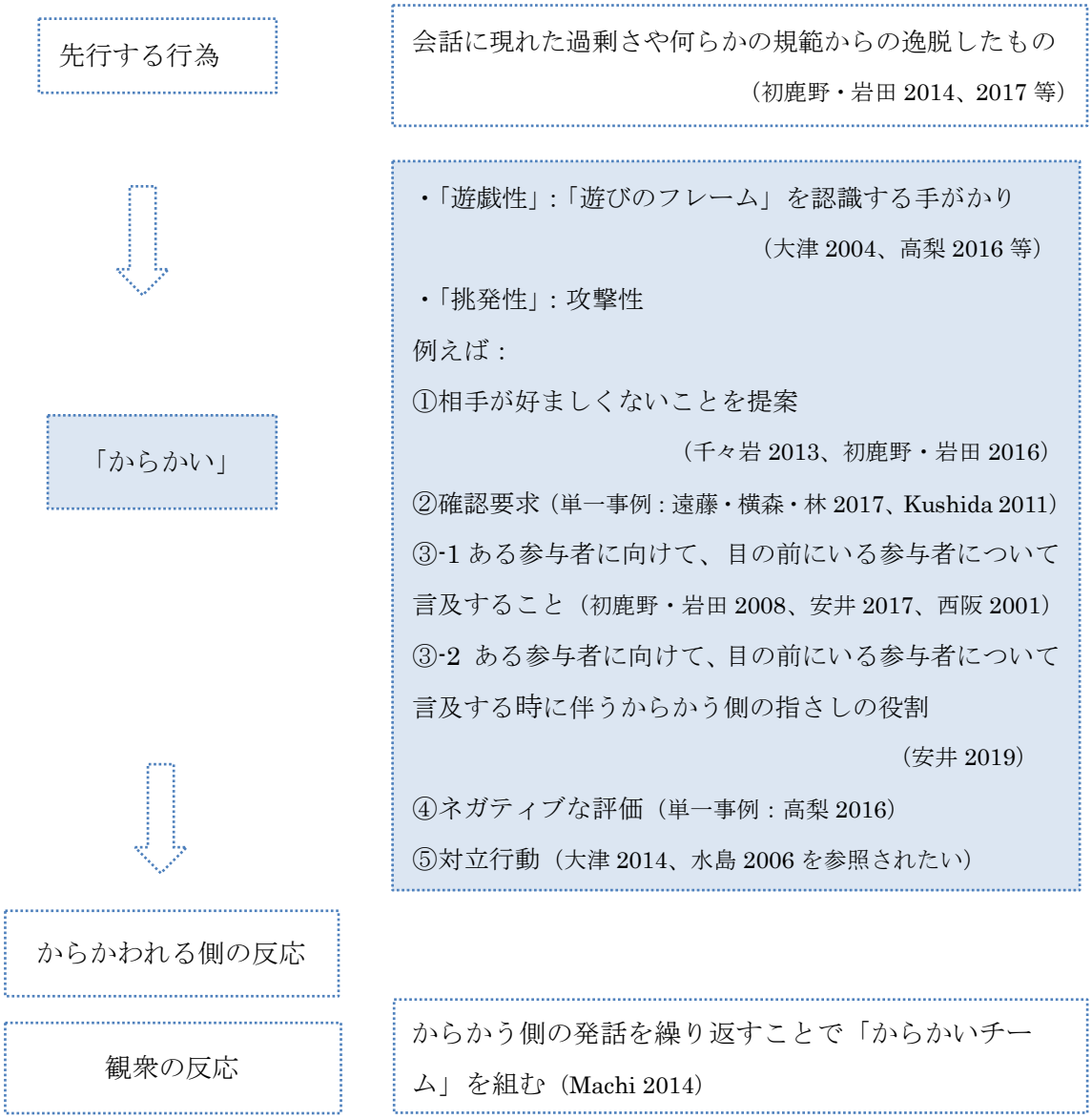

図 1-1「からかい」行為の流れ及び先行研究との対応関係

上の図から分かるとおり、日本語会話における「からかい」についての研究は蓄積されてきているものの、「からかい」を行う方法や手続きが明らかになったとは言い難い。例えば、発話の繰

本論文の考察対象外とする。

り返しという形式が多くの先行研究で言及されているが、それがなぜ、または、どのようにして「からかい」を生み出すことを可能にしているのか、ということは十分に検討されていない。第2 章の方法論で詳しく述べるが、行為の構成を記述する際、「位置（position）」と「組み立て（composition）」の両方について考えなければならない。同じ発話の繰り返しという組み立ての発話であっても、異なった位置で産出することにより異なった行為を構成しうる。そのため、単なる発話の形式的特徴により、「からかい」を行う方法や手続きが明らかになったとは言い難い。

「からかい」は、相互行為の中で参与者たちが協同で成し遂げるものである以上、からかう側とからかわれる側以外の観衆も重要な役割を果たしているだろう。観衆の反応（からかう側の発話を繰り返す）に注目している先行研究があるが、観衆はからかう側の発話を繰り返すこと以外の振る舞いもするだろう。それは、どのような振る舞いなのだろうか。その振る舞いは「からかい」の生起と発展にどのような影響を与えているのだろうか。こうした観衆の振る舞いが「からかい」に及ぼす影響については、管見の限りまだ明らかにされていない。

そこで、本論文は、日本語会話における「からかい」に関するさらなる議論の展開に貢献することを目指し、会話分析の手法を用いて「からかい」を詳細に分析する。

1.4 なぜ相互行為分析で「からかい」に取り組むのか

本節では、相互行為分析について概観した（1.3.1 節）上で、相互行為分析の手法を用いて「からかい」を分析、考察する利点を述べる（1.3.2 節）。

1.4.1 相互行為分析とは

社会生活は、対人関係における相互行為をなくして成立しない。「多様な相互行為[13]に参加しその中で適切にふるまう能力は、人間が社会生活を送るうえで、非常に重要なものである。」（串田・平本・林 2017: 1）。相互行為分析の研究対象は、この「社会生活を送る上で用いている方法」（Sacks 1984: 21）である。

本論文では、「会話分析」と呼ばれる分析技法を用いて分析を行うが、単に会話の分析をするだけではなく、相互行為という側面を重視する立場から、「相互行為分析」という語を用いる。相互行為分析は「会話分析とどのくらい離れているか、あるいは離れていくかはわからないが、相互行為分析の中心に会話分析があることは確か」（西阪 2008b: 44）であると考えるからである。

[13] 串田・平本・林（2017: 1）では「人は身近な人々との相互行為を通じて、言葉を覚え、文化を習得し、さまざまな社会的立場の違いや、自分が他者からどのように見られているかも知るようになる。親しい人と楽しい時間を過ごしたり、自分の欲求を誰かに満たしてもらったり、ものごとを決めたり、トラブルを専門家に相談したり、同じ経験を持つ仲間を見つけたりすることは、いずれも相互行為を通じて行われる。また、電車の中で見知らぬ乗客と目が合ってすぐ逸らしたり、道で人とすれ違うために少しだけ進路を変えたりすることも、つかのまの相互行為である」と述べられている。

相互行為は、言語により構成される発話を用いて遂行されることが多いが、発話が用いられずに遂行される場合もあるだろう。つまり、相互行為の参与者が行為を成し遂げるために利用可能な資源は、言語により構成される発話だけではなく、ジェスチャーや視線、顔の表情、姿勢及び周辺の物理的環境などの要素も考えられる。したがって、相互行為分析で取り扱う対象とは、言語、ジェスチャー、視線などを含むマルチモーダルな情報の複合体で構成される行為のやりとりとなる。そのため、相互行為分析における分析の単位は、発話ではなく行為（action）である。

相互行為分析を始めるに当たっては、事前に何の仮説も立てずに、「Why that now?（なぜいまそれを?)」[14]という考え方で、会話データのすべての箇所を「特定の問題意識に動機付けられずに（unmotivated)」（Sacks 1984: 27）[15]観察する。

具体的な相互行為分析のプロセス[16]は、以下の通りである。

（1） IC レコーダーやビデオカメラにより自然に生起した会話を収録する[17]。
（2） 収録された会話を詳細に書き起こし、トランスクリプトを作成する。
（3） ターゲット候補現象のコレクションを作成し、それを観察する。
（4） 行為を記述する。
（5） 参与者の理解度を調べる。
（6） 例外の事例を検討する。
（7） 構築した記述を見直す。

相互行為分析プロセスについて、簡単な説明を加える。相互行為分析では、実際の録音・録画

---

[14] データを観察する際、参与者が「なぜいまの時点でそれをするのか」ということを念頭におき、会話連鎖のどの「位置」でどのような「組み立て」で産出されるかを見る（詳細の記述は第 2 章で行う)。実際、「わたしたちが行為をするときには、もしも「なぜいまそれをするのか」と問われたなら説明できるようにふるまっている。相手の行為を理解するときも、なぜ相手はいまそれをしたのかを参照して理解する。」（串田・平本・林 2017: 33)。

[15] 日本語訳は、串田・平本・林（2017: 59）を援用した。

[16] 相互行為分析のプロセス（分析の手順）の詳細は、高木・細田・森田（2016: 24-41）と串田・平本・林（2017: 51-75）を参照した。

[17] ビデオカメラや IC レコーダーの存在で、自然会話と言えるのかという指摘に対しては、Brigitte and Austin（1995: 55-56）や串田・平本・林（2017：54）の以下のような論考を参照した。

多くのフィールドワークが抱える問題がカメラの効果である。参与者はカメラを意識し、頻繁に視線を向けるといった行動が観察される場合がある。しかし、時間が経過するにつれ、カメラの存在になれることもある。カメラが参与者にとってインテリアの一部となってしまえば、それほど特別に意識されることはないだろう（1995: 55-56)。

分析においては、もしもカメラを意識していることが被調査者のふるまいに表れないなら、相互行為の相手には当人がカメラを意識しているとはわからないので、その人は当人がカメラを意識していない場合と同じように反応するはずです。したがってこの場合、カメラを意識していることは、行為と行為の連鎖的結びつきのあり方を左右するものではありません。一方、もしもカメラを意識していることがふるまいに表れているなら（たとえば収録されていることが話題の糸口になる)、そのこと自体を相互行為の分析に組み込む（たとえば、話題を開始するときにその場の環境がどのように使われるかを分析する）ことができます（串田・平本・林 2017：54)。

データに基づいて作成されたトランスクリプトを、分析の資料として提示する。しかし、分析者が繰り返し吟味するのはトランスクリプトだけでなく、実際の録音・録画も同様である。分析者自身が社会の成員として身につけた常識から出発し、相互行為の参与者が「なぜいまそれをするか」を考えて記述する。記述したものを再度データの中で見直し、他の参与者の理解（反応）にも十分な注意を払って、それが妥当であるかを確かめる。

以上を踏まえて、相互行為分析の目的は、決してある行為をパターン化したり、カテゴライズしたりすることではなく、人々が他人にとって理解可能な行為を行うために利用できるプラクティスを見つけることである。

1.4.2 相互行為分析で「からかい」に取り組む利点

相互行為分析で「からかい」に取り組む利点として、次の 3 点が考えられる。

第一に、データの「自然性」が挙げられる。「からかい」は、分析者の想像以上に複雑な行為である。このような複雑な行為を分析者が作例するのは、そもそも不可能である。会話分析が用いるデータは、自然発生的な会話であるために、分析対象となる「からかい」も自然なものである。

第二に、データの「ありのまま性」がある。録音・録画された会話データのトランスクリプトは、可能な限りそのままの形で書き起こす。トランスクリプトに作成する際に重要なのは、「発話内容の意味論的な整合性を書き起こす側が考えて、発語の一部分を削いだり補ったりすることなく、ピッチやイントネーション、わずかな間などの音声的特徴、参与者間の発語の重なりもできるだけそのままの形で書き起こす」（城 2013: 10）ということである。

このトランスクリプトによるデータの「ありのまま性」が分析に大きな役割を果たすことを簡単な例を挙げて説明しよう。以下の断片は、居酒屋で収録された師匠と奥村と新田の会話である。分析対象となる「からかい」は 15 行目で生じている。ここで注目したい点は 3 つある。1 つ目は、01 行目から 04 行目までの間と咳払いである。2 つ目は、06 行目から 09 行目までの笑いと間である。3 つ目は、10 行目と 11 行目で師匠と新田が同時に「ん↑:」または「え↑:」と発話することである[18]。

【事例 1-3: 事例 4-3 より抜粋】

01　　(0.7)
02　師匠:　((咳払い))
03　　(1.0)
04　師匠:　((咳払い))(.)えっ休みの日とか何やってるん?

[18] データの記号については 2.5 節を参照されたい。

05　　(0.4)
06　奥村:　.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh
07　　(0.3)
08　奥村:　He.h
09　　(.)
10　師匠:　[ん↑:]
11　新田:　[え↑:]
12　　(0.2)
13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ]か¥　ごめん hh　あ: そう°だったね.°
14　新田:　　[He　]
→15　新田:　あ [そ] び行っ[(0.2)　] たり[してんすか:_]
16　奥村:　　[.hh]　　[h(吐く息)]　　[す : :　　]ぐらい=

一見すると意味がないように思われるこれらの 3 つの箇所は、15 行目で生じる「からかい」に大きな影響を与えている（詳細な分析は第 4 章を参照)。1 つ目の 01 行目から 04 行目までの間と咳払いにより、話題が切れたことがより目立っている。2 つ目の 06 行目から 09 行目までの笑いと間合いから、奥村が自分の発話を笑っても良いこととしてデザインし、師匠と新田の笑いを誘っているが、その誘いに対する反応が不在である、ということがわかる。3 つ目の 10 行目と 11 行目で師匠と新田が同時に「ん↑:」または「え↑:」と発話することから、先行発話（奥村の発話）に対して何らかの問題があったと示していることがわかる。加えて、10 行目と 11 行目が同時に産出されていることから、発話に対する「疑問性」が一層目立っている。

第三に、「からかい」が相互行為の参与者の視点から捉えられることが挙げられる。本論文では、「事前に何の仮説も立てずに会話データを観察し、会話参加者自身が一つ一つのふるまいにおいてどのようなことに志向[19]しどのような行為を成し遂げようとしているのか」（高木・細田・森田

[19] 本論文では、「志向」という言葉を用いる際に、「ヲ」格ではなく「ニ」格を用いる。「志向」と言っているのは、概ね次のようなことである。

私たちは自らの振舞い（発話であれ身振りであれ）をとおして、世界の一部分を選択的に切りとりつつ、そこに向かっている。(中略)。笑いは、世界の特定の部分の「笑うべき」、すなわち「可笑しな」もしくは「楽しい」側面を切り出すかもしれない。視線の向きや指差しも、世界の特定部分を選択的に切り取り、それに対して特定の関わりを持つ。このような私たちの世界への関わり方を、ここでは「志向」と呼んでいる。重要な点は、私たちの志向は、たいてい、発話や身振りのうえに明らかにされること、つまり、相互行為参加者たちは、互いに相手が何にどう志向しているかを知ることができるということ、これである（もちろん、誰にも気づかれないように何かを見やるとか、ひとりの頭の中で何かを思うというように、他人の近づけない志向もありうる)。相互行為に参加するためには、かれらは互いの志向を確認し、調整していかなければならない。そのためのやりかた（プラクティス）を、私たちはやはり持っている。それは、組織的に相互行為を協同で組み上げていくため、すなわち組織立った形で相互行為に参加するためのやり方である（西阪 2008: 75)。

2016: 6）という観点から、「からかい」の相互行為的特徴を会話データの中に見出していくことを試みる。

1.5 本論文の目的と構成

本論文では、相互行為分析の観点から、日本語会話における「からかい」の様相、特に「からかい」を行う方法や手続きを明らかにすることを目的にする。

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章では、本論文の全体の序論として、まず、本論文の出発点と、「からかい」の定義及び日本語会話データに基づいた「からかい」の研究の現状を述べた。次に、なぜ相互行為分析で「からかい」に取り組むのかを述べた。最後に、本論文の目的と構成を示した。

続く第 2 章では、本論文が扱う分析の方法についてより詳細に説明する。まず、相互行為分析の中心にある会話分析の基本的な考え方と分析概念を述べる。次に、発話と共起する非言語行動を中心に扱うマルチモダリティについて取り上げるとともに、会話の参与枠組みについて述べる。最後に、データの概要とデータの示し方について説明する。

第 3 章から第 5 章は、本論である。第 3 章では、「遊び」の研究でよく注目されている笑いながら他者の発話を繰り返すという形式の発話に注目する。具体的には、現在の話題が真剣に進められているという文脈で、話者 A に「遊戯要素」が含まれている発話が産出され、話者 B は笑いながらその「遊戯要素」を繰り返すことで何を成し遂げているのか、を分析する。それは、「誰かと共に笑うこと」であるか、「誰かを笑うこと」であるか、を検討するものである。

第 4 章では、「からかい」が行われる前の段階で産出されている「ん?」「え?」「なに?」などの発話に着目する。参与者が「ん?」「え?」「なに?」などの発話を産出することで、何を成し遂げているのか、そして、次の段階で参与者がいかに相手をからかっているのか、を分析する。

第 5 章では、からかう側からかわれる側以外の参与者を「観衆」と呼び、その者たちの振る舞いに焦点を当て、こうした参与者の振る舞いがいかに「からかい」の協同構築に影響を与えているのかを分析する。

第 6 章では、3 章から 5 章まで分析した結果を踏まえ、「遊び」としての「からかい」がどのような特徴を有するのかについて考察する。

最後の 7 章では、本論文の議論によって得られた知見をまとめ、その意義と今後の課題について述べる。

第 2 章　方法論とデータ

本章では、本論文が基盤とする方法論を説明する。まず、相互行為分析の中心にある会話分析の基本的な考え方と中心となる概念について述べる（2.1 節）。次に、発話と共起する非言語行動を中心に扱うマルチモダリティについて取り上げる（2.2 節）。また、多人数会話における参与枠組みに関する理論を確認する（2.3 節）。最後に、データの概要（2.4 節）とデータの示し方について説明する（2.5 節）。

2.1 会話分析の概念

会話分析は、Erving Goffman の「自然主義的な相互行為研究」と Harold Garfinkel の「エスノメソドロジー（ethnomethodology）」の発想を受け継いで、Harvey Sacks と Emanuel Schegloff によって創始され、その後、Gail Jefferson により相互行為の詳細を表記する方法が開発され、発展した分析手法である。この会話分析という方法によって、ふだんは自明とされている相互行為を成し遂げるために人々が用いている方法や手続きを明らかにする。この 2.1 節では、会話分析の基本的考え方と、これまでの会話分析の成果の中で重要とされる主要な概念を確認したい。

2.1.1 行為の構成と理解

人々は、互いの反応をリアルタイムで感知できる（同じ空間にいたり、電話などの通信機器でつながっていたりする）状況において、言葉や身体動作や道具などを用いて、誰かに対して理解可能な行為（たとえば、呼びかける、挨拶する、質問する、依頼する、評価する、からかう、冗談を言う、等々）を行ったり、そうした行為に応じたりする（串田・平本・林 2017: 29）。ある行為が、社会の成員に「からかい」だと理解されるとき、そのやり方には「からかいでありうるもの（possible teasing）」もしくは「認識可能なからかい（recognizable teasing）」が含まれている。「ありうる」「認識可能な」などの回りくどい表現を用いるのは、ある振る舞いがなされただけではそれはまだ特定の行為として発効したとは言えないからである（串田・平本・林 2017: 29）。こうした「からかいでありうるもの」もしくは「認識可能なからかい」が、本論文の考察対象である。ただし、便宜上、本論文では、特に必要がない場合は、「からかい」と呼ぶことにする。

ここで、1 つの行為がどのように構成されるかという疑問が出てくるだろう。この疑問にアプローチする時、次に引用するような見方をとる。すなわち、「会話分析の基本的視点は、行為が刻一刻と変化する状況によって形づくられ、同時に、それ自身もまた情報を新たに形づくっていく、という見方である」（串田・平本・林 2017: 30）。

会話分析の中心的な考え方で行為を記述すると、行為は「位置」と「組み立て」によって構成

される。手を振るというジェスチャーと「Hey」という言葉（「組み立て」）は、人と出会う時に用いる（「位置」）ならば、それは「挨拶」という行為として理解可能である。他方、同じ手を振るというジェスチャーと「Hey」という言葉の組み合わせは、教師が授業中ぼうっとしている学生に対し使う（「位置」）ならば、それは「注意する」という行為として理解可能である。授業中、教師がなぜ手を振るというジェスチャーと「Hey」という言葉を産出するのか、それは、ぼうっとしている学生を注意するためである、という分析が可能であろう。要するに、どの「位置」でどの「組み立て」の振る舞いがなされるかということが非常に重要である。この考え方は、「なぜいまそれを? 」という会話分析の基本となる疑問につながっていく。

相互行為は参与者たちが相互的に達成するものである以上、行為に対する相手の反応も見なければならない。たとえば、デートの誘いのつもりで「コンサートのチケット二枚あるんだけど」と言って、相手に「わー、二枚ともくれる? 」と返されれば、「誘い」という行為として正しく理解されなかったということがわかるだろう。ここで、「ぼくといっしょに行ってくれない? 」というような発話を追加しなければ、「誘い」という行為は実現されない可能性がある。また、行為に対する相手の反応を見ることは、研究者がその行為に対する記述が妥当であるかを判断するための証拠でもある。

会話分析の、もう 1 つの重要な分析の視点として、「会話参加者の視点」がある。分析する際に重要なのは、会話の参加者自身が何に志向しているかを捉えることである。この視点について、高木・細田・森田（2016: 6）では、以下のように述べている。

> 会話参加者が相互行為の中で生じているある特定の事象を、相互行為の上で有意味なこととして捉えて、それに敏感に反応する仕方でふるまっている時、その参加者はそのことに志向していると言える。

たとえば、先の「コンサートのチケット二枚あるんだけど」という発話に対して、「あ、ごめん、土曜日に予定が入っている」という返事が来るとする。このときは、相手がすでにその発話を「誘いの前置き」として認識し、前もって「誘い」の本体をブロック（blocking）しているのだろう。そのあと、「コンサートのチケット二枚あるんだけど」という発話を産出した人が「あ、そうか、それは残念だね」と返事をした場合、その発話者は誘いを遂行しようとしていたと記述することができる。一方、「あ、違う違う、僕行けないから、だれかにあげようかと思っているんだよね」という返事をした場合は、その発話に「誘い」という行為のラベルをつけることはできない。

会話分析では、前もって何らかの行為に名前やカテゴリーをつけない（Schegloff 2007: 8）。そもそも人間行為の種類は、単純なカテゴリーに収まりきらない可能性がある（平本 2015: 240）。本論文において「からかい」という行為の名前を用いるのは、あくまでも記述の便宜のためであ

る。

さらに、実際の行為の構成は、多様な仕方で複雑化しうる。串田・平本・林（2017: 48-49）は、以下のようにパターンを整理している。

> 第 1 に、ある発話が遂行している行為は 1 つとは限らない。1 人の相手に対してある行為を行うことを通じて、別の相手にも派生的行為を行なっていることがある。また、ある行為が同じ相手に対するもう 1 つの行為の媒体になっていることもある。
> 第 2 に、行為が参与者自身にとって多義的なものとして生み出されることもある。
> 第 3 に、行為は必ずしも定型化したやり方で構成されるとは限らない。ときには、ある状況に固有の事情を利用して、行為が構成されることもある。
> 第 4 に、行為は必ずしも、当該社会成員が持つ語彙で名指すことのできるものとして構成されるとは限らない。形式的に記述可能なやり方で構成されつつも、名前のない行為というものが存在する。

本論文の対象となる「からかい」は、まさに複雑な行為の代表的なものの 1 つであると言える。「からかい」には、串田・平本・林（2017）が述べる第 2 の点が観察される。第 1 章で述べたように、参与者はよく「評価」「提案」「確認要求」の形で「からかい」をしようとする（高梨 2016, 千々岩 2013, 初鹿野・岩田 2016, 遠藤・横森・林 2017）。加えて、串田・平本・林（2017）の第 1 の点についても、「からかい」で見られることが指摘されている。「からかい」発話（主にからかわれる側に対するネガテイブな評価）は、直接からかわれる側にではなく、別の参与者に向けて産出することで、言及対象となる参与者（からかわれる側）への「からかい」となりうる（西阪 2001, 初鹿野・岩田 2008, 安井 2017, 2019）。相互行為の中でどのような「位置」でどのような「組み立て」の振る舞いをすることで、「からかい」として理解可能となるのだろうか。この問いを解くにあたっては、連鎖組織、順番交替組織という概念が非常に重要である。以下で、順に、それらの概念について見ていく。

2.1.2 連鎖組織[20]

会話分析の分析対象は、会話そのものではなく、会話で交わされる行為の秩序を明らかにすることである。そのために、会話分析では行為を分析単位とする。2 つ以上の行為が何らかの形状または軌跡でつながっている仕組みのことを「連鎖組織（sequence organization）」と呼ぶ

[20] 本節における会話連鎖についての解説は、基本的には Schegloff（2007）の議論及び用語の用い方に従ったものである。また、日本語の訳と説明は高木・細田・森田（2016）と串田・平本・林（2017）を参照している。

（Schegloff 2007: 2）。連鎖組織は、人が〈挨拶–挨拶〉という連なりを通じて他者との相互行為を開始したり、〈質問–応答〉という連なりを通じて情報を得たりするなど、様々な活動を成し遂げるための手段となる（串田・平本・林 2017: 78）。連鎖組織の最も基本的なものは、隣接する 2 つの発話[21]が行う行為からなる「隣接ペア（adjacency pair）」（Schegloff and Sacks 1973；Schegloff 2007: 13-21）である。隣接ペアは、もっとも典型的で単純な形をとる場合、次のような基本的性質を持つ。

（1）　2 つの発話からなる。
（2）　2 つの発話は別々の話者により発される。
（3）　2 つの発話は隣接する。
（4）　2 つの発話は順序づけられている。
1 つ目の発話を「第一成分（First Pair Part: 以下 FPP と略す）」、2 つ目の発話を「第二成分（Second Pair Part: 以下 SPP と略す）」という。
（5）　ペアの型は関連づけられている。
質問に対しては応答、依頼に対しては承諾または拒否というように FPP はそれに適合する SPP を要請する。

隣接ペアの基本的性質について、次の会話断片（串田・平本・林 2017: 82）を用いて説明する。

【事例 2-1: 串田・平本・林 2017: 82】FPP・SPP 記号は引用者による

```
FPP  01  ミサト: あれが, あの（0.2）お鍋にゴキブリが入ってた人がハシモトくん?　=
     02  ユウカ: =え(h)え(h)汚な（h）
     03  ミサト: .hh[hh
SPP  04  トモカ:       [え, ちゃ(h)う hu((「ちゃう」は関西方言で「違う」の意))
```

まず、(1) 隣接ペアは 2 つの発話からなり、(2) それぞれの発話が別々の話者により発される。この断片では、FPP は 01 行目のミサトの「お鍋にゴキブリが入ってた人がハシモトくん?　」という質問であり、SPP は 04 行目のトモカの「え, ちゃ(h)う hu」という応答である。もしミサトが自分の質問に自答するなら、「あ、ちがうか、タナカくんだ」のように、答えを「思い出した」ことが（つまり質問がキャンセルになったことが）示されるはずである。次に、(3) 2 つの発話が隣接する。この点については、よく「誤解」されて間違いやすいことの 1 つである（串田・平本・

[21] 厳密にいうと隣接ペアを構成するのは 2 つの発話の順番（ターン（turn））である。

林 2017: 82)。この断片では、01 行目の質問と隣接するのは、02 行目ユウカの「え(h)え(h)汚な(h)」という冗談まじりで産出される評価の発話である。しかも、02 行目の発話が 01 行目の発話への反応になっている。しかし、02 行目の評価は、01 行目の質問への応答には見えない。つまり、02 行目の評価は、01 行目の発話の次に発せられているという意味で 01 行目と隣接する関係にはあるが、隣接ペアの SPP ではない（串田・平本・林 2017: 82)。理由は 2 つある。1 つは、性質の (5) ペアの型は関連づけられているという点である。01 行目は質問、02 行目は評価であり、ペアの型ではない。もう 1 つは、隣接ペアの「条件的関連性（conditional relevance)」(Schegloff 1968）という性質にある。「ある位置で何らかの行為がなされるはずだという期待が生み出されていることを、その位置はその行為の生起に『関連性がある』と表現することができる」(串田・平本・林 2017: 80)。この事例で言うと、01 行目の質問の次の位置は、応答という行為の生起に関連性がある。繰り返し述べるように、「会話分析が記述する対象は事実ではなく、事実をそのようなものとして理解可能にするための規範的な規則である。隣接ペアの『隣接』は、2 つの発話が隣接するという事実を述べたものであるというより、2 つの発話が隣接されるべきものとして参与者に理解されているという志向性を表している」(城 2013: 22）ということである。最後に述べる隣接ペアの特徴は、(4）2 つの発話は順序づけられているという点である。2 つの発話は相互行為上の位置として互換可能ではなく、最初に置かれるものが FPP、その次に置かれるものが SPP という序列が存在する（城 2013: 22)。たとえば、応答は質問のあとに、謝罪は不平のあとに来るべきである（串田・平本・林 2017: 78)。

この隣接ペアを土台として、隣接ペアと関連する別の発話や連鎖を伴うことがある。これを隣接ペアの「拡張（expansion)」と呼ぶ（Schegloff 2007)。隣接ペアが拡張される場合、その拡張が生じうる位置は、下図のような 3 箇所である。

← 前方拡張（Pre-expansion）

FPP

← 挿入拡張（insert expansion）

SPP

← 後方拡張　(post-expansion）

(Schegloff 2007: 26)

上記の隣接ペアの拡張によって、参与者は様々な行為や活動を成し遂げられる。たとえば、我々は「勧誘」という行為（FPP）を行う前に、しばしば相手の都合を尋ねる（前方拡張)。そして、「勧誘」という行為を受諾するまたは拒絶するという行為（SPP）の前にも、その「勧誘」に関する質問などもできる（挿入拡張)。最後に、受諾するまたは拒絶するという行為（SPP）を行っ

た後、感謝などの行為を行うこともありうる（後方拡張）。

前節で繰り返し述べたように、ある発話が何の行為として達成されるかは、発話の組み立てだけではなく、その発話が生起する位置に常に依存している。本節で示したこの連鎖組織の概念は、主に位置に関わっている。

加えて、発話が生じる位置は、1 つ 1 つの発話ごとに、いつ、だれが、次の話し手になるのかを決める「順番交替組織（turn-taking organization）」（Sacks, Schegloff, and Jefferson 1974）にも関わっている。これを見る前に、次の節でまずは、本論文の議論と深く関わりがあり、かつ、隣接ペアの SPP に着目した、「優先組織（preference organization）」について概説したい。

2.1.3 優先組織

ある FPP に対する SPP として、多くの場合は、プラスかマイナスかという、相反する極性を持つ 2 種類の SPP が存在しうる[22]。そして、参与者にとっては、プラスとマイナスのどちらの極性を持つ反応がくるのか、あるいは、そのいずれを産出するのかが会話の参与者にとって重要な問題となる。この問題に対処するための様々な「仕掛け」が、相互行為を組織する資源として用意されている（高木・細田・森田 2016: 103）。

たとえば、友人に「一緒にご飯を食べに行く？」というような発話を産出すると、「誘い」という行為として認識される。それに対して、「行こう！」というような「受諾」が来るのか、または「あごめん、今日はちょっと」というような「拒否」が来るのか、誘う側にとっては（そして誘われた側にとっても）大変現実的な問題である。「誘い」という隣接ペアの FPP に対して、「受諾」と「拒絶」という 2 つの反応はいずれも適切な SPP である。しかし、この 2 つの SPP は、FPP に対する関係が対等ではなく、ここでは「受諾」が「優先的（preferred）」なものであり、「拒絶」が「非優先的（dispreferred）」なものである、というような偏りがある。つまり、この 2 つの SPP の間には「ある FPP に対して優先的であるかどうか」という点で非対称性が見られる。この FPP に対する SPP の産出における非対称性を「優先組織」と呼ぶ（Pomerantz 1984a, Schegloff 2007: 58-96）。また、「優先的」「非優先的」という概念は、単に誘いに対しては受諾のほうが拒否よりもいいという心理的な欲求や動因から考えているからではない（Schegloff 2007: 61）。両者は連鎖の構造から確認できるものである。

一般的な観察として、優先的反応と非優先的反応にはいくつかの違いが見られる。優先的反応は、即座に簡潔に示される。それに対し、非優先的な反応には、反応の遅延やためらいなどの前置き、非優先的な応答をせざるを得ない理由説明や言い訳といった特徴を伴う（串田・平本・林

[22] SPP が一種類しかないものと 3 種類以上あるものもある。「出会いの挨拶–出会いの挨拶」「別れの挨拶–別れの挨拶」というような隣接ペアは SPP が一種類しかないものの代表である。また、「不平–謝罪/釈明/反論/等」というような隣接ペアは SPP が 3 種類以上あるものとして挙げられる（串田・平本・林 2017: 84）。

2017: 85-88, 高梨 2016: 32 参照)。「言語学的概念を用いれば、優先的な反応が無標で、非優先的な反応が有標であるという言い方も可能だろう」(高木・細田・森田 2016: 152)。

優先組織に関する議論は、「社会的同調性(social affiliation)」と「構造的整合性(structural alignment)」[23]が密接に絡み合っていることが指摘されてきた(Lee and Tanaka 2016: 2)。たとえば、Heritage(1984a: 268)は、リクエスト、申し出、勧誘、評価などの様々な行為に対する優先的な応答を、「社会の連帯を支える協調行動(affiliative actions which are supportive of social solidarity)」としている。それに対して、非優先的な応答を「社会の連帯に破壊をもたらす行動(disaffiliative actions which are destructive of social solidarity)」と述べている。このように、優先的と非優先的な反応の特定の特徴は、それぞれ「(非)同調性」の特性に関連するものとして説明されている(Heritage 1984a)。その後、Schegloff(2007)は、連鎖と連鎖との間の構造的関係に注意を向け、行為との構造的整合を示す応答(その時必ずしも先行話者に同調を示しているとは限らない)を優先応答であるとし、行為との構造的整合性を示していない応答を非優先的反応であると述べている。

2.1.4 順番交替組織[24]

2.1.2 節のおわりに、発話の生起する位置は「順番交替組織」にも関わっていることを述べた。本節では、この組織について詳しく解説する

会話における順番(発話の順番;ターン)とは、会話の参与者が話し始めてから話し終えるまでの発話全体を指す。発話を発する機会・権利が会話の参与者間で引き継がれ、何らかの「規則」で交替していくことを順番交替と呼ぶ。順番交替組織は、2 つの構成要素と 1 つの規則群からなっている。それぞれについて以下に示す。

【第 1 の構成要素】: 順番の組み立て　―いつ交替が可能になるか―

話し手は順番の「移行適切場(transition relevance place : 以下 TRP と略す)について「投射可能性(projectability)」[25]を保証する統語的・韻律的特徴を持った「順番構成単位(Turn

[23]「同調性 affiliation」と「整合性 alignment」という 2 つの概念はしばしば相互に関連して議論されてきた。Stivers(2008)では、初めてこの 2 つの概念が「物語を語る(storytelling)」活動の中で区別して提示されている。同調性は、受け手が語り手の伝えたスタンスを支持し承認していることを示すことである。整合性は、進行中の語る活動に対し、中断することなく語り手が優先的保持するターンの維持を支える姿勢を示すことである。つまり、同調性は、態度に関わるものであるが、整合性は構造に関わるものである。Stivers et al. (2011)では、「物語を語る」活動に限らずより一般的に捉えるために、「同調性」を「感情的レベルでの協力(the affective level of cooperation)」、「整合性」を「構造的レベルでの協力(the structural level of cooperation)」と概念化している。上述は、山本(2014: 73-75)、陳(2018: 103)も参照している。

[24] 本節で概説を行う内容は、「会話のための順番交替の組織―もっとも単純な体系的記述」(Sacks, Schegloff, and Jefferson 1974[西阪訳 2010])という論文で書かれていることの一部分であり、高木・細田・森田(2016: 49--92)と串田・平本・林(2017: 118-114)でまとめたものを参照している。

[25] 言葉のレベルから、「投射」とは「進行中の言葉がその発話の統語的形状・種類・完了可能点を予示・予告すること」

Constructional Unit, 以下 TCU と略す)」を用い、順番を構成する。

（高梨 2016: 7）

話し手は 1 つの発話の順番を組み立てるとき、様々な言語的単位を用いることができる。この順番を構成しうる言語単位のことを TCU と呼ぶ。TCU は、文（たとえば、「不良グループだったんですよ」）だけではなく、少なくとも、節（たとえば、「みんな不良だから」）、句や語（たとえば、「何飲む? 」という質問に対する「お茶。」）、という文法的単位で構成されうる。順番交替が秩序立って行われるには、TCU が終わりそうな時点―「完了可能点（possible completion point）」― が聞き手にわかる必要がある。

TCU がいつ完了するかを示す資源として、上述の文法的な資源の他にもある。韻律的な資源（たとえば、発話末尾における上昇のイントネーション）、その TCU が遂行している行為（たとえば、事例 4-3 における 06 行目の奥村の「女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり」という発話が先行の質問に対する応答として産出される）、非音声的な資源（たとえば、特定の時点で聞き手を見ること）などが挙げられる。この最初の TCU の完了可能点が、順番の移行に適切な、最初の場所、つまり TRP となる。ここで注意したいのは、TRP は順番交替が生じる可能性のある場所だが、そこで必ず順番交替が生じるわけではない、ということである。

順番の組み立てに関する事項のうち重要な点は、「あらゆる TCU は、誰が話し手となり聞き手となるかとかかわりなく、その完了可能点を予示する性質（投射可能性）を持つ」（串田・平本・林 2017: 123-124）ということである。聞き手は話し手が話し終わってからこれが終了したことに事後的に気づくのではない。むしろ、現在進行中の話し手の発話を聞きながら、これがいつ頃終わりそうかを予測しているのではないかということである（高梨 2016: 8）。

【第 2 の構成要素】: 順番の割り当てに関わる要素　―誰が次の順番を取得するか―

次の順番の割り当てには、次の 2 つのいずれかの技法が用いられる。

(a)　現在の話し手が次の話し手を選択すること。

(b)　次の話し手が自分で自分を選択して話し始めること。

（Sacks, Schegloff, and Jefferson 1974: 703［西阪訳 2010: 25-26］）

（串田 2006: 64）である。「投射可能性」とは、「言葉に備わった投射を可能にする性質のこと」（串田 2006: 53）である。行為のレベル「投射」とは、「進行中の行為は常に「次に何が起こるか」を予示・予告する性質する性質」（林 2008: 16）である。「投射可能性」とは「ある行為が完全に産出されてしまう前に、それがどのような行為なのか、そしてその次に適切（relevant）になる行為は何かを予測することを可能にする」（林 2008: 16）ことである。

【規則群】― どのように行われるか ―

順番交代組織の規則群は、次のようにまとめられる。

【規則 1】あらゆる順番において、最初の TCU が TRP にいたったとき、

（1-a）：現在の順番が「現在の話し手が次の話し手を選択する」技法を含む形で組み立てられているならば、その選択された者が、次の順番を取得する権利と義務が与えられる。そして、ここで順番が交替する。

（1-b）：現在の順番が「現在の話し手が次の話し手を選択する」技法を含まない形で組み立てられているならば、現在の話し手以外の者が自分自身を次の話し手と選択してよい（しければならないわけではない）、そのうち最初に話し始めた者が次の順番を取得する権利が与えられる。ここで、順番が交替する。

（1-c）：もし（1-a）も（1-b）も適用されなければ（つまり、現在の話し手が次の話し手を選択することもなく、現在の話し手以外の者が自分を次の話し手として選択することもなければ）、現在の話し手が話し続けてもよい（そうしなければならないわけではない）。

【規則 2】

もし最初の TCU が TRP にいたったとき、（1-c）が適用されて、現在の話し手が話し続けたなら、次の TRP において再び（1-a）～（1-c）が再適用される。そして最終的に順番が移行するまで次の TRP で同じことが繰り返される。

（Sacks, Schegloff, and Jefferson 1974: 704 [西阪訳 2010: 28-29]
日本語訳は串田・平本・林 2017: 124-125 も参照）

上記における「現在の話し手が次の話し手を選択する」技法として、特定の聞き手に宛てた隣接ペアの FPP の産出がある。このほか、呼びかけなどの宛先表現や視線を特定の聞き手に向けることなどの手段を用いることが挙げられる。

このような順番交替組織が作動するため、日常会話では 1 度に 1 人ずつ話すことが守られる。もちろん、2 人以上の人が同時に話すということ（重なり；オーバーラップ（overlap））や、誰も話さないでいること（間合い（silence））も起こる。いずれの場合もその時間は短い。実際、オーバーラップや間合いでも、無秩序に生じるのではなく、なぜその時点でオーバーラップや間合いが生じるのかが、その場の参与者に理解できる形で生じることが明らかにされている。

2.1.5 修復[26]

日常のやりとりでは、自分の発話がうまく出てこなかったり、言い違えたりすることがよくある。相手の発話がうまく聞き取れなかったり、発話の意味がわからなかったりすることも稀ではない。相互行為を先に進めるためには、こうした発話の産出・聞き取り・理解にかかわるトラブル（問題）[27]が生じた場合、まずそれに対処する必要がある[28]。そういった対処の方法を「修復（repair）」と呼ぶ（Schegloff, Jefferson, and Sacks 1977［西阪訳 2010］）。

修復の対象となるものをトラブル源（trouble source）もしくは修復されるべきもの（repairable）[29]と呼ぶ（Schegloff, Jefferson, and Sacks 1977: 363［西阪訳 2010: 163］）。修復は、決して一気に解決できるわけではなく、一定の過程を経ることになる。一般に、①トラブル源が生じ、②「修復の開始」の段階でトラブルの存在をマークし、そして、③「修復の実行」の段階でトラブルを解決するというような過程を踏む。誰が修復を開始するか、誰が修復を実行するかによって、修復のタイプが異なる。トラブル源を含む発話をした人によって修復が開始された場合、それを修復の「自己開始」と呼ぶ。それに対し、トラブル源を含む発話をした者以外の人によって修復が開始された場合、それは修復の「他者開始」と呼ぶ。同様に、トラブル源を含む発話をした人自身によって修復が実行された場合、それを「自己修復」と呼ぶ。トラブル源を含む発話をした者以外の人が修復を実行した場合を「他者修復」と呼ぶ。よって理論的には、①自己開始・自己修復、②自己開始・他者修復、③他者開始・自己修復、④他者開始・他者修復、という 4 つの組み合わせが存在する。

まず、自己開始の修復について説明する。事例 2-4 を見てみよう。

【事例 2-4: 事例 3-8 から抜粋】 [30]

01　E:　まっくす-マスク要るよね.（(B に向けて）

上記の断片では、発話を産出するうえでのトラブル（言い間違い）に発話者自身が対処してい

---

[26] 修復の理論的枠組みについては、「会話における修復の組織―自己訂正の優先性」（Schegloff, Jefferson,and Sacks 1977 ［西阪訳 2010］）及び高木・細田・森田（2016: 183-224）、串田・平本・林（2017: 191-216）を参照した。

[27] 修復が対処するトラブルは、相互行為を成り立たせるための前提となる発話の産出、聞き取り、理解にかかわるトラブルであり、広義の「トラブル」、たとえば意見の相違による言い争いや人間関係のこじれ、苦情、非難などといった問題は含まない（串田・平本・林 2017: 194）。

[28] 発話の産出・聞き取り・理解にかかわるトラブルが生じた場合、なぜまずそれに対処する必要があるか、という疑問に対し、筆者の答えは以下（城 2013: 25 と高木・細田・森田 2016: 183 参照）である。発話の産出・聞き取り・理解にかかわるトラブルが生じた場合、参与者が互いに理解を共有できないという意味である。もし参与者同士が互いの行為を理解することがなければ、つまり、互いの理解を共有できなければ、相互行為を先に進められないだろう。修復は、この共通理解（間主観性 intersubjectivity として理解されてもよい）を打ち立てるためのやり方である。

[29] Repairable と第 3 章における laughable というような X-able は、分析の概念である。「X-able を発した話し手の「意図」や「計画」によって開始されるのではなく、話し手の発話に特徴 X-able（修復すべき点、笑うべき点）を発見した応答者によって開始されるものであると言える。しかし、これはひとたび開始されると、X-able を発した元の話し手をその連鎖に巻き込んでいくものとなる」（高梨 2016: 37）。

[30] 会話の詳細は第三章における事例 3-8 を参照されたい。

るケースである。E はマスクと言おうとしており、間違えて「まっくす」と発している。その直後に「マスク」と訂正している。この訂正によって発話産出上のトラブルが解決した。ここで「間違い」の「訂正」という行為が行われているが、「修復が対処するトラブルは、必ずしも何らかの客観的な間違いや失敗とは限らない」（串田・平本・林 2017: 194）。

> このことは、次の両面から明らかである。一方で話し手が発音、文法、言葉の意味などの点で明らかな間違いを含んだ発話をした場合でも、必ずしも修復が行われるわけではない。他方では、一見何の問題もないように思われる発話に対して修復が行われることもある。つまり、修復は「間違い」の「訂正」という行為に限定されない、より広範囲の現象を指す概念であるということを押さえておきたい。
>
> （串田・平本・林 2017: 194）

次に、他者開始の修復について見てみる。他者開始修復は第 4 章での分析において重要な概念であるため、より詳細な解説は、第 4 章を参照されたい。

他者開始の修復おいては、他者は修復の開始段階で、様々な技法[31]を用いて何らかのトラブル（問題）[32]に直面したことをマークし、修復の実行をトラブル源の話し手に委ねる。例として、以下のような連鎖構造で確認される。

01 話者 A :　　トラブル源を含む発話
02 話者 B :　　たとえば、「え? 」、「ん? 」などの質問語
03 話者 A :　　修復の実行

話者 B は「え? 」、「ん? 」などの質問語を産出することにより、01 行目の話者 A の発話に対して何らかのトラブルがあったことを示している。つまり、話者 B は修復を開始しているのである。そこで、会話の中でそれまでに起こっていた行為や連鎖（たとえば、報告、依頼など）は一旦止められ、01 行目の話者 A の発話を修復すべきものとして顕在化させている。話者 A はその次のステップで修復を行っている。事例 2-5 を見てみよう。

---

[31] 修復開始技法（repair initiator）（修復開始装置と呼ぶこともある）については、①「え? 」、「ん? 」、「なに? 」など、②「だれ? 」、「どこ? 」、「いつ? 」のような質問語でできているもの、③トラブル源を含む順番の一部を繰り返し、かつそこに質問語を付加するもの、④トラブル源を含む順番の部分的繰り返し、⑤トラブル源に対する理解候補の提示、などが挙げられる（Schegloff, Jefferson, and Sacks 1977）。

[32] 本論文では、「トラブル trouble」と「問題 problem」という言葉を両方とも使っているが、その使い分けは特にない。

【事例 2-5: Sakura04 00:10:16】

((ヒゲを切られた猫が痛みを感じられるかどうかが話題になっている。))

→01	F:	じゃあ, あれ毛と一緒?	**トラブル源を含む発話**
02	C:	なんだ[よ:]((E が自分を叩く行為への反応))	
⇒03	E:	[ん?]	**修復開始**
★04	F:	毛と一緒なの ?	**修復の実行**
05		(0.2)	
06	E:	(あんな) 分かんないね	

01 行目の F の質問は、次に応答が来ることを適切にするものである。しかしながら、03 行目で E は応答するのではなく、「ん? 」と聞き返している。つまり、<質問-応答>という連鎖の流れを一旦中断し、聞き取りのトラブルに対処することを相互行為の当面の課題として前面に出している。E が修復を開始したことにより、F が 04 行目で「毛と一緒なの? 」と 01 行目の先行発話をより明確な発音で繰り返すことで、トラブルに対処しようとしている。そして、E は 06 行目で「(あんな) 分かんないね」と発話し、01 行目の F の質問に答える。

2.1.6 遡及的連鎖

遡及的連鎖 (retro-sequence) (Schegloff 2007: 217-219 参照) とは、「連鎖をなす 2 つの発話が、通常の隣接ペアのように「予測的 (prospective)」な関係ではなく、ある種の「応答」が出現することによって、その「引き金」の存在が顕在化するような関係 (遡及的=retrospective) にあるもの」(鈴木他 2014: 109) を指す。

遡及的連鎖の典型例としては、前節で紹介した他者開始修復が挙げられる。以下の例を見てみよう。

【事例 2-6 串田・平本・林 2017 : 208 ; 遡及的関係・予測的な関係などは筆者による】

01	ヨウコ :	ほらほら. (0.2) おたくの (0.6) チエちゃんとこの	
02		ほら (0.7) >チヨコさ:ん<元気でいる?	*遡及的関係*
03		(0.8)	
→04	カヨ :	だれ?	
05	ヨウコ :	<u>チ</u>ヨコさん.	*予測的関係*

前節で確認した修復の知見に基づき、この事例では、トラブル源が 02 行目の「チヨコさん」(人の指示に問題があった) である。このトラブルの修復開始装置が 04 行目の「だれ? 」であ

り、修復実行が 05 行目の「チョコさん.」である。しかしながら、「原則としてトラブル源から除外できないものはないようである」（Schegloff, Jefferson, and Sacks 1977: 363）。つまり、01-02 行目の発話におけるあらゆるものがトラブル源になりうるが、なぜトラブル源が「チョコさん」であると言えるのだろうか。この疑問を解くヒントは、04 行目のカヨの質問にある。カヨが 04 行目で「だれ? 」と発話することにより、トラブル源を特定できるからである。もし、04 行目の「だれ? 」が発話されなかったら、この発話においてトラブル源が存在することはだれもわからない。つまり、この事例では、「引き金」が「チョコさん」であり、「だれ? 」という発話により、その「引き金」は連鎖上顕在化している。このようなときに、04 行目「だれ? 」は、01-02 行目の発話と遡及的関係であり、05 行目の発話と予測的関係であるという。

他者開始修復以外に、「笑い」と「気づき（noticing）」も遡及的連鎖を開始するマークとして挙げられる（Schegloff 2007）。他者修復開始と笑いは、ある意味で特殊タイプの「気づき」として理解できる（Schegloff 2007: 219）また、高梨（2016）は、ある種の「評価」も遡及的連鎖を構成するとしている[33]。

2.2 マルチモダリティ

会話分析を基本とした相互行為の分析では、「マルチモダリティ（multimodality）」という言葉が使用される（安井・杉浦 2019: 14）。マルチモダリティとは、行為を形成するために参与者が用いるジェスチャー、視線、顔の表情、姿勢、人工物の取り扱い、発話の韻律、発話形式（文法や語彙）などの様々な資源が、別々に働くのではなく、包括的に行為を形成することを表す。会話分析におけるマルチモダリティの研究を牽引した Lorenza Mondada によれば、「『マルチ』モダリティという名称で感覚様式の複合性を強調する意義の 1 つは、研究者の先入観によって言語（聴覚）に優先的な分析上の地位が与えられることを避けることにあるという」（城 2018: 97）という。

「からかい」は複雑な行為の代表として、言語的資源による言葉だけで成り立たせることが難しく、人々はしばしば視線の向きそしてジェスチャーや顔の表情などを用いて達成している可能性がある。そのために、「からかい」を分析するにあたって、発話に伴う視線、顔の表情、ジェスチャーなどの複合性を重視しなければならない。本節では主に視線（2.2.1 節）、ジェスチャー（2.2.2 節）を例にして検討する。

2.2.1 視線

人間のコミュニケーション活動の中の視線（gaze）の重要性については、は古くから認識され

[33] 全部の笑い、気づき、評価が遡及的連鎖を開始するわけではない。具体的には、鈴木他（2014）を参照されたい。

ており、数多くの知見が蓄積されている。本節では、まず社会相互作用（social interaction）における視線の機能を確認する。その上で、主要な先行研究の知見をまとめて視線という資源を分析の道具立てとする重要性を述べる。

社会的相互作用における視線の機能について、Kendon（1967）は、視線に「モニタリング機能」、「調整機能」、「表出機能」[34]があると述べている。その後、会話分析の発展に伴い、会話分析における視線の研究も増えている[35]。Rossano（2013）では、会話分析の観点からの社会的相互作用における視線に関する研究は、主に以下の 3 つの異なる側面に焦点を当てていると述べている。①「会話への参与と視線の関係を扱うもの（relationship to participation）」、②「視線が有する調整機能（例：順番交替における視線の役割）を扱うもの（regulatory functions）」、③「行為の構成における視線の役割を扱うもの（action formation）」である[36]。

本論文が視線を分析の道具立てとする理由の 1 つは、順番交替における視線の役割である。2.1.4 節で述べたように、日常会話では、その時々の発言機会において、いつ誰が話すかは、順番交替組織によって局所的に管理されて進行していく。より具体的には、順番交替組織の中の順番の割り当てに関わる部分（2.1.4 節参照）である。順番の割り当ては、「言語的な手段によってなされる以外に、視線・身体などの非言語的手段を用いてもなされる」（榎本・伝 2011: 98）ということが知られている。視線は次の話し手を選択するための有効な手段である。Kendon（1967）は、現在の話し手が次の話し手を注視することで交替を合図し、次の話し手が相互注視によってそれを受け入れることで順番交替が成立すると主張している。また、Goodwin（1981）では、話し手がもし聞き手からの視線を得ていなければ、話し手は発話にポーズを入れたり、言葉を途切れさせたりすることで、聞き手の視線を獲得しようとすることが観察されている。さらに、次の話し手にならない聞き手は、話し手の視線を見て自身が次の話し手として選択されていないことを知っている（Lerner 2003）。そのため、発話の途中では現在の話し手を見ているが、発話末（TRP）が近づくと次の話し手になる者への視線移動をいち早く開始することがある（榎本・伝 2004）、という知見もある。要するに、「次話者選択が達成されるためには、話し手が次話者に視線を向けるだけでなく、それぞれの聞き手が次話者や非次話者となることを相互に了承する必要がある」（榎本・伝 2011: 98）。

他方、榎本・伝（2011: 97）では、次の話し手が自己選択するケースについて分析し、以下のように結論付けている。

---

[34] 日本語訳は、佐藤・竹内（2013）を参照した。佐藤・竹内（2013: 221）によれば、3 つの機能はそれぞれモニタリング機能：発話の継続・終了を聞き手の凝視の有無に基づき確かめる機能、調整機能：聞き手の会話に対する好感度を聞き手の視線行動を共に察知し、発話内容を調整する機能、表出機能：会話がもたらす効果の良し悪しを話し手に伝える機能、とされている。

[35] 管見の限りでは、多くの研究は Kendon（1967）の知見を踏まえたものである。

[36] 日本語訳は、城（2018: 103）を参照した。

隣接ペアが用いられない場合でも、現在の話し手に視線を向けられていた聞き手が次の話し手として自己選択しやすいという一般的傾向があることがわかった。さらに、この傾向に反して視線の向け先以外の聞き手が次の話し手になるのは、a)視線を向けられていた聞き手が次発話を回避したり、期待された反応や連鎖上適切な発話を行わなかったりするとか、b)話題に関する知識や同意/不同意といったスタンスの共有の点から話し手と同じカテゴリーに属しているといった条件が必要であることがわかった。

また、視線をそらすことや誰にも向けないことも、相互行為上重要なことである。たとえば、話し手の言葉探しは話し手が視線をどこに向けているかによって変わる。Goodwin（1987）では、話し手の「言葉探し（word search）」は、思案顔と視線を逸らすによって内部探索として行われるのに対して、特定の相手に向けた視線によって外部探索として行われるという（串田 1999 も参照）。

2.2.2 ジェスチャー

ジェスチャー（gesture）とは、「何かを伝えようという意図のもとにおこる行為の一環として、ある身体の動きが発現し、それが伝えるべき内容に関連のある情報を表しているとき、その身体の動きである」（喜多 2002: 1）。一方、以下の身体動作は、ジェスチャーとは見なせない。

> 会話を開始するために、相手に近づいたり、相手と向き合ったりすることもジェスチャーとみなされない。食べたり、喫煙したり、洋服を縫い上げたりなど、会話中になされる活動も通常はジェスチャーとしてみなされない。さらに、ジェスチャーは寒さによる身震い、痛みによる反応、言いにくい時にうつむくなどコミュニケーションにおける意図とは直接的に関係がなく生じる「症状的ノンバーバル行動」（symptomatic non-verbal behavior）などとも区別される。
>
> （安井・杉浦 2019: 5）

ジェスチャーは、大きく 3 種類に分類することができる。1 つ目は、形と意味に慣習的な関係が存在するエンブレム（emblem）と呼ばれるものである。たとえば、人差し指と親指の先を付けて丸をつくる、OK サインである。2 つ目は、形と意味の間に慣習的な関係は存在するが、その具体的な意味は文脈・状況によって異なる直示的ジェスチャー（deictic gesture）がある。たとえば、指差しがこれにあたる。3 つ目は、形と意味の間に慣習的な関係が存在せず、その指示対象がジェスチャーの形と指示対象の間に存在する指標的関係、およびその使用の文脈に依存する、

描写的ジェスチャー（depicting gesture）である[37]。

ジェスチャーが有するコミュニケーション機能については、「ジェスチャーによる伝達内容の表現」、「ジェスチャーによるコミュニケーションのメタ調節」、「ジェスチャーによる情動的『きずな』づくり」が挙げられる（喜多 2002: 3-7）。

2.3 会話における参与枠組み

本論文では、3 人以上の参与者による会話（多人数会話（multi-party conversation）[38]）のデータを分析する。これは、特に第 5 章における分析と関連している。

3 人以上の参与者による会話では、聞き手が複数（2 人以上）存在するが、それぞれの「参与地位（participation status）」（Goffman1981）は一様ではない。Goffman（1981）では、図 2-1 に示すように、様々な参与役割を含む相互行為の構造を「参与枠組み（participation framework）」を形成する（図 2-1）と論じられている。

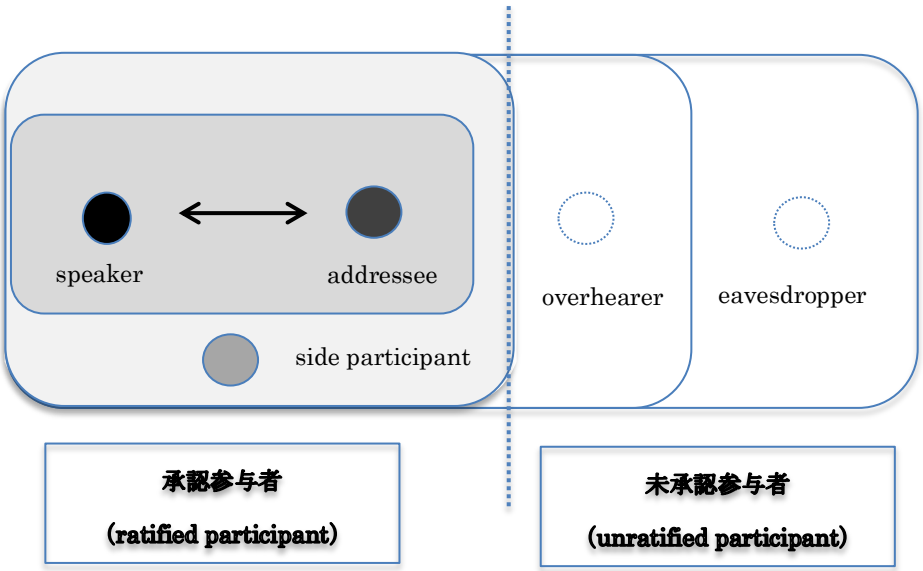

図 2-1 参与枠組み（Goffman,1981:131-132、片岡・池田・秦 2017: 7）

まず、聞き手は、「承認参与者（ratified participant）」と「未承認参与者（unratified participant）」に分けられる。前者の「承認参与者」には、話し手の発話の直接の宛先である「受け手（addressee）」と、話し手から発話を直接に宛てられていない「傍参与者（side participant）」が含まれる。後者の「未承認参与者」には、話が聞こえ、他の参与者に気付かれているものの、会話の参与者として認められていない「漏聞者（overhearer）」と、その場に存在していること自体も参与者たち

[37] 古山（2002）、喜田（2002）、安井・杉浦（2018）を参照している。
[38] 多人数インタラクション（multi-party interaction）と呼ばれることもある。

に気付かれていない「盗み聞き者（eavesdropper）」がいる。

2.4 データの概要

本論文では、公開されている会話コーパスの一部（約 8 時間）の自然会話のデータを用いる。さらに、分析の参考のため、いくつかの先行研究（主に会話分析の手法を取り入れたもの）で提示された会話事例もデータベースに加える。

本論文で使用したコーパスのうち 1 つは、Sakura という会話コーパス[39]（MacWhinney 2007）である。この会話コーパスは、インターネット上の TalkBank というサイト（http://talkbank.org/）に動画ファイルが公開されている。もう 1 つは、国立国語研究所による『日本語日常会話コーパス』[40]（Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC）[41]（小磯他 2017）である。筆者が使用したのは、このコーパスの内部公開版[42]である。

本論文で提示する会話断片のデータのさらに詳細な内訳を表 2-1 に示す。

表 2-1 会話データの詳細な内訳

データ ID	長さ(分)	人数	会話場面の特徴
Sakura04	26	4	大学生；犬派か猫派かをテーマとして展開した雑談
Sakura06	26	4	大学生；アルバイトをテーマとして展開した雑談
CEJC-C001_001	31	5	友人同士；カフェバーでの誕生日会；雑談
CEJC-C001_004	17	2	同僚；居酒屋での雑談
CEJC-K001_003b	28	3	喫茶店で食後のお茶をしながら友人との雑談
CEJC-T001_014	45	3	友人同士；居酒屋での飲み会
CEJC-T009_014a	7	4	恋人・友人；うどん屋での雑談

本論文で提示する会話断片は、公開されている文字化のデータに基づき、さらに緻密化作業を行い、会話分析の記号をつけている。それらは、これらの断片の引用元である会話データのデータ ID を冒頭位置に付して示す。加えて、本論文中で示すデータには先行研究から引用している

[39] Sakura コーパスの 01,02,03,04,05,06,07 を用いる。
[40] 日本語日常会話コーパスの T001_011, T001_009, T001_014, T001_019, C001_001 , C001_002, C001_004, C001_012, K001_003a, K001_003b,T009_014a を用いる。
[41] 国立国語研究所では、2018 年 12 月に、『日本語日常会話コーパス』のモニター公開（小磯ら 2019）が開始された。必要な利用手続きがされれば、本論文で提示する事例の動画及び音声データにアクセス可能である。
[42] 横森大輔先生のご厚意により、国立国語研究所の共同プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」の研究成果の 1 つである『日本語日常会話コーパス』の内部公開版の使用が可能となった。使用を了承してくださった横森先生に心より感謝を申し上げる。

ものもある。これについては、データと併せて出典を明記している。会話の状況のより詳しい説明は、個々の事例提示の際に、必要に応じて行う。

2.5 データの示し方

本論文のデータの書き起こしには、以下の記号を用いる。これらの記号は、Gail Jefferson が考案した会話分析の基準的な記号法（Jefferson 2004）をベースに日本語の表記記号（たとえば、高木・細田・森田 2016, 串田・平本・林 2017）に基づき、本論文のために記したものである。以下は、記号の意味の説明である。

[	重複発話の開始点
]	重複発話の終了点
＝	前後の発話が切れ目なく続いている。または、行末にこの記号がある行から行頭にこの記号がある行へと間髪を入れずに続いている。
(数字)	沈黙の秒数
(.)	ごく短い沈黙、およそ 0.1 秒程度
文字::	直前の音が延びている。「:」の数が多いほど長く延びている。
文字-	直前の語や発話が中断された場合
文字.	尻下がりの抑揚
文字?	尻上がりの抑揚
文字¿	やや尻上がりの抑揚
文字,	まだ発話が続くように聞こえる[43]抑揚
文字_	平坦な抑揚
文字!	声が弾んでいる
↑文字	直後の音が高くなっている場合

[43] 本論文の分析において、よく「聞こえる」や「見える」という表現を用いる。誰にそう聞こえるのかまたは見えるのかという疑問に関しては、西阪（2008: 49）によるこの 2 つの用語についての説明を参照されたい。

このような知覚表現は、あくまでも私自身が音声・録画データをどう経験・知覚したか、正直に表明するものである。とりあえず、私にはそう聞こえ、私にそう見える、と。一方、この表現は、単に、そのような私自身の経験・知覚を表現するだけではない。そこには、もう少し強い主張がこめられている。つまり、私にそう聞こえ・見えるように、そのデータに耳を傾け・目を凝らす人には、誰にでも、そのように聞こえ・見えるはずだ、という主張である。その意味では、この知覚表現は、私自身の（分析者としての）記述の躊躇（私にはそう聞こえ、そう見えるけど、実際には違うかもしれないという躊躇）を表しているわけでは、決してはない。それは、会話者たちもしくは相互行為参加者たち自身、あるいは同じ文化に属する人びと、同じ自然言語に習熟する者たちであるならば誰であれ、一つの可能性としてそのように聞き、そのように見るはずだという主張である。それは、実際にそうであるかどうかにかかわらず、特定の手続きに従ってそうでありうるものとして産出されているという、いわば「客観的な」事実を捉えようとしている（西阪 2008: 49）。

↓文字　　直後の音が低くなっている場合
<u>文字</u>　　強く発話されている場合
°文字°　　弱く発話されている場合
hh　　息を吐く音。h の数が多いほど長く。笑いの場合もある。
.hh　　息を吸う音。h の数が多いほど長く。笑いの場合もある。
文(h)字　　笑いながら発話している場合
￥文字￥　　笑っているような声の調子で発話している場合
<文字>　　ゆっくりと発話されている場合
>文字<　　速く発話されている
(文字)　　はっきりと聞き取れない部分
(　　)　　まったく聞き取れない部分
(X/Y)　　X か Y かいずれかに聞こえる場合
((文字))　　データについてのさまざまな説明
→文字　　分析において注目する行
文字　　分析においいて注目する繰り返された発話部分
文字　　分析において注目する遊戯的な発話部分。必ずしも「からかい」発話ではない。

視線や身体動作などのマルチモーダルデータの書き起こしには、安井ら（2019）で使われている Lorenza Mondada（Mondada 2007）による方法を参考に以下の通りの独自の記号を用いている。

** 、@@など、同一記号で囲まれている部分は特定の身体動作が続いている部分（参与者ごとに別の記号で示される）を表しており、その長さは発話や間隙の長さと対応している。

話者名_視線　　視線についての転記
視線_(頭文字)：　視線の対象を表す
（たとえば新田が視線の対象なら“(新)”と表記）
（誰にも向いていないなら“〰”と表記）
話者名_手　　ジェスチャーの転記
話者名_表情　　表情の転記
話者名_nod　　頷きの転記
話者名_活動　　活動の転記
*----->　　*で示された身体動作がその先の行まで続くことを示す
------>*　　*で示された身体動作が---->*までもって終結することを示す

*-----> *で示された身体動作が断片の後も続いていることを示す

>>--- 身体動作が断片の前から続いていることを示す

fig 静止画（図）を示す

発話順番内で静止画が撮られた時点を示す

第 3 章「誰かと共に笑うこと」か「誰かを笑うこと」か
― 笑いながらの他者発話の繰り返しに着目して ―

3.1 はじめに

繰り返して述べるが、同じ「組み立て」の発話であっても、異なる連鎖の「位置」で産出することにより、異なった行為を構成しうる。本章では、「遊び」の研究でよく注目されている笑いながら他者の発話を繰り返す（以下「笑いながらの繰り返し」と略す）という「組み立て」の発話に着目し、参与者がこの「組み立て」の発話を用いて具体的にどのような行為を成し遂げているのかを分析する。「誰かと共に笑うこと」であるか「誰かを笑うこと」であるか。特に、本論文が焦点を当てる「からかい」という行為が成し遂げられている時に、参与者が何に志向しているのか、を明らかにする。

分析に入る前に、まず会話分析の分野で明らかにされた笑い及び笑いながら産出されている繰り返しに関する知見を紹介する（3.2 節）。次に、先行研究の知見を踏まえて、本章の分析対象を絞り具体的な分析を行う（3.3 節）。最後に議論をまとめる（3.4 節）。

3.2 笑いに関する先行研究

「なぜ笑うのか」という問いに対する答えとしては、「面白いから」「おかしいから」というようなものが一般的であろう。それらの答えに表れているのは、笑い手の情動的な面である。従来の笑い研究でも、笑いを冗談やユーモアの副産物として扱い分析するものが多い（水川 1992, 1993 を参照されたい）。しかしながら、「面白い話」のネタがあっても、必ずしも笑いが起こるわけではない。同じ「面白い話」のネタであっても、産出の仕方（絶妙なタイミング、声での表現力、表情など）によって、聞く側の笑い（反応）も異なる。もちろん、日常会話ではプロのコメディアンのように、「面白い話」の産出方法をすべて計算してデザインするわけではない。しかし、各々の経験を振り返れば、日常会話の中でも、誰かの笑いを取ろうとするために、何らかのデザインをする経験もあるだろう。例として、以下の会話断片を見てみよう。

【事例 3-1: Jefferson1979: 80】

Joyce : Cuz she wz off in the bushes with some
buddy, tch!
(0.7)
Joyce : ehh [hhhhhhh!
Sidney : [Oh(hh)h hah huh!

この断片では、Joyce は発話を完了し、0.7 秒後、笑い始める。その後、Sidney も笑い始める。Sidney の笑いは Joyce の発話の直後ではなく、Joyce の笑いの直後に産出されている。さらに詳しく見ると、Sidney の笑いは Joyce の発話と離れている（0.7 秒以上の間がある）。Jefferson の議論によると、この Sidney の笑いは Joyce の発話ではなく笑いに「誘われて」産出されたものである。ここで Joyce 自身が発話を産出し 0.7 秒後に笑い始めることは、聞き手の笑いを取ろうとするための何らかのデザインであると考えられる。

このような、話し手自身が笑いを産出することで笑いが適切であることを示した後、受け手も笑うというような連鎖を「笑いの誘いと受け入れ」と呼ぶ（Jefferson 1979 : 80）。笑いを誘う技法として、Jefferson（1979）では 3 つ挙げられている。

（1）　話し手が発話完了の後の位置で笑いを産出する。
（2）　話し手が発話すると同時に笑いを産出する。
（3）　話し手が明確な笑いを産出せずに、息（呼気または吸気）、咳払い、咳の出だしの音などのように最小の異なる解釈可能性がある音声的な（minimal-equivocal）もの[44]を産出する。もし受け手が受け入れるなら、このような最小の異なる解釈可能性がある音声的なものは遡及的に笑いの誘いとして聞こえる。

笑いの誘いに対し、受け手が拒絶を示すこともある。このとき、沈黙、また、通常通りに話題を進めることでその誘いを拒絶することも記述されている（Jefferson 1979: 83-87）。沈黙の場合、話し手は、自分自身が産出した「笑っても良いもの」について受け手が理解できていないということに志向する。この場合は、笑いを誘う技法を用いて受け手の笑いを追求する可能性もある（Jefferson 1979: 83）。すなわち、相互行為を分析する際に、話し手が笑いを誘う技法を使っているかどうかを見ることが重要である。

このほか、Jefferson（1979）は、誘いが産出される前に、受け手が自ら笑うこともありうると言う。この受け手が自ら笑うこと自体も、他の参与者の笑いを誘っている可能性がある（Glenn 2003: 56）。

ここで、話し手が最初に笑うのか、受け手が最初に笑うのか、という相互行為上の問題が出てくる。たとえば、話し手が最初の笑う者である場合、自分自身が産出した発話を「笑っても良いもの」としてデザインし、受け手の笑いを誘っている。一方、もし受け手が自ら笑いを産出するならば、受け手が最初に笑う者である。受け手の自らの笑いは、遡及的に先行する発話に「笑うべきもの」が存在することを示している。同時に、他の参与者の笑いも誘っている。

[44] 最小の異なる解釈可能性がある音声的なものは、笑いとも捉えられるし、笑いではないものとも捉えられる。

この誰が最初に笑う者であるかという問題は、Glenn（2003）が挙げた「誰かを笑うこと」を「誰かと共に笑うこと」[45]と区別するのに役立つ 4 つのキーの 1 つである。そのほかに、「laughable（笑っても良いもの/笑うべきもの）」と「第二の笑い」及び「笑いに続く活動」がある。Glenn は、上記の 4 つのキーがそれぞれどのようなものであるかを説明した上で、この 4 つのキーの「配置（configuration）」がいかに「誰かを笑うこと」を表すか、ということも述べている。具体的には、以下のとおりである。

Laughable : Of the broad class of conversational laughables (including any object that serves as a referent for laughter), certain types appear likely to make *laughing at* relevant. Specifically, in *laughing at* environments, *the laughable appoints/nominates some co-present as a butt*. Participants may act as perpetrators of such laughables by ridiculing, teasing, or making fun of co-present others.

（「笑っても良いもの/笑うべきもの[46]」：（「笑い」の対象となるあらゆるものを含む）広い意味での会話の「笑っても良いもの」のうち、あるタイプのものは「誰かを笑うこと」と関連する傾向があるように見える。特に、「誰かを笑うこと」環境では、「笑っても良いもの」はその場に居合わせたものを「からかい」の標的として指定する/指名する。参与者は、居合わせた他の人を冷やかしたり、からかったり、馬鹿にすることによって、そのような「誰かを標的として笑うこと」の加害者として行動するかもしれない。）

First laugh: *First laugh by someone other than the butt (especially by perpetrator) likely indicates laughing at.*

（最初の笑い:（からかい、嘲笑などの）標的以外の誰か（特に加害者）による最初の笑いは「誰かを笑うこと」を示す傾向にある。）

(Possible) second laugh: *In multi-party interactions, (possible) second laugh by someone other than butt reinforces laughing at. In two-party situation, laughing at is not shared.*

（起こるかもしれない第二の笑い: 三者以上の相互会話行為にあっては、（からかいなどの）標的以外の誰かによって起こされるかもしれない第二の笑いは「誰かを笑うこと」を増長さ

---

[45] 参与者が「誰かを笑うこと」と「誰かと共に笑うこと」を区別して志向していることは、Jefferson（1972: 300-301）で最初に言及されている。Glenn（2003）は Jefferson の議論を踏まえて、「誰かを笑うこと」と「誰かと共に笑うこと」の区別に注意を払う必要があるとし、その理由を笑いが持つ曖昧性によって説明している。笑いは曖昧性を持つため、ローカルな連鎖環境の特徴を見なければ、笑い手のスタンスが「相手に寄り添うこと」であるか「相手に寄り添わないこと」であるかも曖昧になるからである（Glenn 2003: 112-114）。

[46] 本章では、Glenn（2003）の用語に従い、laughable を分析用語として使う。分析上の議論を分かりやすく示すために、「笑っても良いもの」と訳す場合もあるが、「笑うべきもの」と訳す場合もある。基本的には、話し手が自分自身の発話を laughbale としてデザインしているというようなことを述べる場合は、「笑っても良いもの」と訳す。一方、聞き手が遡及的に話し手の発話を laughable としてマークしているというようなことを述べる場合は、「笑うべきもの」と訳す。視点が異なっているが、用語は同じである。

せる。二者会話の状況では、「誰かを笑うこと」は共有されない。）

Subsequent activities: *Subsequent talk on topic displays laughter as at.* Whether laughter is *at* or *with* may depend on retroactive definition through subsequent activities.

（（笑いに）続く活動: トピックに関して後続するトークは「笑い」を「誰かを笑うこと」として提示する。「笑い」が「誰かを笑うこと」なのか「誰かともに笑うこと」なのは後続する行為を通して遡及的に定義されるかもしれない。）

（Glenn 2003: 113, 筆者訳）

簡単な説明を加える。まず、「笑っても良いもの」は分析のための用語であり、この用語が指す発話や行動には、必ずしもユーモアの要素が含まれているわけではない。実際、あらゆる状況でどのような発話や行動であっても笑いをもたらす可能性がある（Glenn 2003: 49）。加えて、Glennは「笑いを引き起こすあらゆる指示対象を遡及的に描写する、または笑いを引き起こすためのデザインを合理的に述べるために、『笑っても良いもの』という用語を用いる」（Glenn 2003: 49）とも述べている。ここで重要なのは、「笑っても良いもの」はどのような性質を持っているかということである。例えば、相手の言い間違いやおかしさを「笑っても良いもの」としてデザインすれば、「相手を笑うこと」になる。

「笑っても良いもの」についての本章の関心は、なぜそれが笑いをもたらしたかということではなく、誰に産出されたのか、いかに産出されたのか、いかに連鎖上の焦点となったのか、ということである。

次に、笑いに続く活動の 1 つに、笑いながら単語やフレーズを繰り返すことにより話題が拡大されるということがある（Jefferson 1972）。笑いながらの繰り返しは、繰り返された発話に対する「理解・鑑賞（appreciation）[47]」や「楽しむこと（enjoyment）」を示す方法である（Jefferson 1972: 299）。

上述した先行研究の知見から、以下の 4 つの分析ポイントを取り入れる。

（1）繰り返された発話には笑いを誘う技法が使われているのか。

（2）繰り返された発話はどのような性質を持っているのか。

（3）誰が最初に笑っているのか。

（4）笑いながらの繰り返しの後には何が起こっているのか。

以下では、会話事例を「誰かを笑うこと」であるか「誰かと共に笑うこと」であるか、という

[47] ここでの「理解・鑑賞（appreciation）」とは、繰り返された発話に含まれているユーモアに対して認識し且つ理解することである。ユーモアを理解したからこそ、笑いながら産出できると考えられる。

ようなモデルに当てはめるようなことはしないが、相互行為の特徴をより明確に記述するために上記の 4 点に注目しながら分析を進めていく。

3.3 分析

本節では、前節で提示した 4 つの分析ポイントを取り入れ、以下のような会話連鎖構造において、参与者が笑いながらの繰り返しを用いて何を成し遂げているかを検討する。分析対象とする笑いながらの繰り返しは、02 行目の話者 B の発話にあたる。繰り返し述べるが、笑いながらの繰り返しは、笑いながらまたは笑いを含む口調で他者の発話を繰り返すことを指している。

00　話題が真剣に進められている
01　話者 A : 発話に「遊戯要素」が含まれている
　　A-①　笑いを誘う技法が用いられている
　　A-②　笑いを誘う技法を用いられていない
02　話者 B : 笑いながら A の発話における「遊戯要素」を繰り返す

上記の連鎖構造について説明を加える。まず、「話題が真剣に進められている」というのは、繰り返されることになる発話（01 行目の話者 A の発話）が産出されるまで、ジョークを語るというような連鎖ではないということである。

次に、話者 A の発話には「遊戯要素」が含まれているが、ここでいう「遊戯要素」は、必ずしもユーモア的な要素ではないが、やや“逸脱”していると感じられる点がある。たとえば、誇張表現やその場にふさわしくない言葉表現などを用いたり、通常と異なる口調で産出したりすることで、笑いをもたらしうる要素である。それゆえ、あくまでも、記述の便宜上の呼び方として「遊戯要素」という用語を用いる。

加えて、話者 A の発話の笑いを誘う技法（Jefferson 1979）の有無により、発話の性質が異なる。A-①の場合は、話者 A は笑いを誘う技法を用いることで、自分自身の発話における「遊戯要素」を「笑っても良いもの」としてデザインしている。それに対して、A-②の場合は、話者 A は笑いを誘う技法を用いていない。発話に「遊戯要素」が含まれているが、A 自身はそれを「笑っても良いもの」としてデザインしていないのである。

以下、話者 B が笑いながら A-①における「遊戯要素」を繰り返す場合(3.3.1 節)と、話者 B が笑いながら A-②における「遊戯要素」を繰り返す場合（3.3.2 節）のそれぞれを具体的に分析する。

3.3.1「誰かと共に笑うこと」

本節では分析の対象として、参与者が笑いながら先行する発話における「遊戯要素」を繰り返すことで、先行話者と共に笑うことを達成する会話事例を扱う。本節で取り上げている 2 つの事例では、繰り返された発話の話者（話者 A）は、笑いを誘う技法を用い、自分自身が産出した発話に含まれている「遊戯要素」を「笑っても良いもの」としてデザインし、他の参与者の笑いを誘っている。加えて、笑いを誘う技法以外にも、「有標」な口調やジェスチャーなども用いて自分自身を茶化している。

事例 3-2 は、居酒屋で収録した師匠、奥村、新田（全員男性）の会話から抜粋したものである。三人はそれぞれ異なる会社に勤めているが、同じ英会話教室に通うことで知り合いになったようである。「師匠」というあだ名は、奥村と新田によって使われている。

事例 3-2 では 3 人がピラミッドに関する話題を、以下のような流れで話している。01 行目は、新しい話題（エジプト関係の話題）の始まりである。奥村の 01 行目の質問に対し、師匠は「あ:.（0.6）イっすね.」（02 行目）と発話する。そして、ツタンカーメンの奥に隠し部屋があるらしいというニュースを提示している（省略部分）。これに関するやりとりが 1 分程度行われ（省略部分）、6.9 秒（46 行目）の間の後、師匠は、「(……)ね, なんか,（0.2）オモ–おもろいじゃないですか.」（47 行目）と評価を下す。続けて、ピラミッドを建てるときの詳細についても語っている（52・54・56・58・60 行目）。師匠の語りの完了付近で、新田は「な:ん年かかったんすか, あれ.」（61・62 行目）と質問する。64 行目から 66 行目までの修復連鎖が終わった後、師匠は「知らな〜い」（68 行目）と答える。

この断片で分析したいのは、73 行目で新田が笑い口調で繰り返した「¥知らな〜い¥」という発話である。

【事例 3-2: CEJC-T001_014 04:04】

01　奥村:　エジプトのあれには行かないっすか?　((師匠に向けて))
02　　(1.2)
03　師匠:　あ:.（0.6）イっすね.
04　　(1.2)
　((42 行(約 1 分間の語り)省略：
　奥村の質問に対し、師匠がツタンカーメンの奥に隠し部屋があるらしいというニュースを提示した後、隠し部屋についてのやりとり))
46　　(6.9)
47　師匠:　(……)ね, なんか,（0.2）オモ–おもろいじゃないですか.
48　　(3.4)

49　師匠:　((咳払い))
50　　(0.7)
51　新田:　[な る ほ ど.]
52　師匠:　[あれでしょ,]あの頃のピラミッド建てるのも, (0.8)ちゃんとなんか,
53　奥村:　うん.
54　師匠:　出-(0.5) 勤表かなんかつけて,
55　奥村:　あ:((頷き))=
56　師匠:　=なんか,(0.7)今日は休みますとか[ゆ]う(0.3)シ-(0.2)あれが残って=
57　奥村:　[うん.]
58　師匠:　=るんでしょ. (.) なんか,
59　奥村:　記録が出たんす[よね.]
60　師匠:　[なん]かそうゆうのは残ってるみたい[っすよ:?]
61　新田:　[な: ん]年=
62　　=かかったんすか,あれ.
63　　(.)
64　師匠:　えっ?
65　　(1.2)
66　新田:　ピラミッドって作るのに何年かかったんすかね.
67　　(0.6)
68　師匠:　知らな〜い. =hh Heheh [(し(h)ら-)Heh hehe]he =
69　新田:　[huh Hehe]
70　師匠:　=heh .HHE Hehehe .hhe [.hHe
71 (新田):　[(.hhh) ((食べ物を噛む音に近い))
72　　(0.3)
→73　新田:　[¥知らな〜い.¥] ((師匠の口調を真似している))
74　師匠:　[.hh heh][heh hh .hh]((焼き鳥を食べながら))
75　奥村:　[hh hehe heh]
76　　(1.6)
77　師匠:　((咳払い))でもまあ自分もあんま詳しくないからあれでしょ? =
78　　=なんか, (0.4)公共事業でやってたとかゆう[説があるんでしょ?]
79　奥村:　[うん ふんふ]ん.
((師匠は公共事業でやっていた説について詳しく説明する))

最初に、なぜ新田は 73 行目で笑いながらの繰り返しを産出することで、師匠と共に笑うことを達成しているのかについて説明する。新田の質問に対し、師匠は通常ではない口調（やや「有標」の口調）で「知らな〜い」(68 行目)と産出する。さらに、発話が完了した後、即座に（“=”の記号）笑い始める。

【事例 3-2 断片 1 】

68　師匠:　知らな〜い. =hh Heheh

つまり、師匠は発話完了後、笑いで遡及的に自分の先行する発話 —「知らな〜い」— を「笑っても良いもの」としてマークしている。

ここでの話し手である師匠の笑いは、最初の笑いである。

【事例 3-2 断片 2】

68　師匠:　知らな〜い. =hh Heheh　[(し(h)ら-) Heh hehe]he =
69　新田:　[huh　　Hehe　]

師匠の笑いに“誘われ”、新田は笑いを産出する（69 行目)。この時点で、すでに「誰か共に笑うこと」の環境が作られている。

その後、師匠は続けて笑っている（70 行目)。0.3 秒の間の後で、新田は笑い口調（¥という記号で示す）で師匠の口調を真似し、「知らな〜い」(73 行目）と繰り返す。

【事例 3-2 断片 3】

70　師匠:　=heh .HHE Hehehe　.hhe [.hHe
71（新田):　[(.hhh) ((食べ物を噛む音に近い))
72　(0.3)
→73　新田:　[¥知らな〜い.¥]　((師匠の口調を真似している))
74　師匠:　[.hh　heh　]

ここで新田が繰り返したのは、師匠がデザインした「笑っても良いもの」である。では、「笑っても良いもの」が繰り返されることで何が達成されているのか、詳細に見てみよう。

【事例 3-2 断片 4】

70　師匠：　=heh　　*.HHE Hehehe　　* .hhe [.hHe

71（新田）：　　[(.hhh)（(食べ物を噛む音に近い)）

師_視線　（焼き鳥）*~~~~~~>>

師_活動　　｜焼き鳥を口に近づける；食べる準備

新_視線　（師）----------　*（下）-------->>

①

72　　(0.3)　②

→71　新田：　[¥知ら*な～い.¥]　((師匠の口調を真似している))

72　師匠：　[.hh h　　][heh hh　.hh　　]((焼き鳥を食べながら))

73　奥村：　　③　[hh hehe　*heh　]　④

新_視線　　*（奥）----------　*~~~　~~~

70 行目で師匠は笑いと同時に、焼き鳥に視線を落とし、食べる準備をしている（①を参照）。また、70 行目の後半の笑い声も吸気音に変化し、さらに 72 行目の 0.3 秒の間（②を参照）が生じることで、笑いは終息に向かっていると考えられる（Glenn 2003: 75）。その後、新田は視線を「傍参与者」（Goffman 1981）として参加している奥村[48]に移し（③を参照）、「知らな～い」と繰り返す。61 行目から 72 までの会話連鎖では、新田が笑いを含む口調で繰り返している「知らな～い」の後で、奥村も笑いを産出する（73 行目と④を参照）。このとき、笑いの終了に志向していた師匠も一緒に笑っている（72 行目と④を参照）。ここで 1 つ考えられるのは、新田は先行する「成功した『笑っても良いもの』」である「知らな～い」を繰り返すことで、「共有された笑いの拡張」（Glenn 2003: 73-80 参照）を達成している、ということである。

「共有された笑いの拡張」に続く活動を確認する。

【事例 3-2 断片 5】

73　新田：　[¥知らな～い.¥]　((師匠の口調を真似している))

74　師匠：　[.hh　heh　　][heh hh　.hh　](焼き鳥を食べながら))

75　奥村：　　[hh hehe　heh]

76　　(1.6)（(焼き鳥を食べる・ビールを飲む活動)）

77　師匠：　((咳払い))でもまあ自分もあんま詳しくないからあれでしょ？　=

[48] 61 行目から 72 行目まで、奥村は食べる活動に志向しており、会話には参加していない。

78　　=なんか, (0.4)公共事業でやってたとかゆう[説があるんでしょ？]
79　奥村:　　[うん　　ふんふ　]ん.
((師匠が公共事業でやっていた説について詳しく説明する))

1.6 秒の沈黙の中で、師匠は焼き鳥を食べており、新田はビールを飲んでいる。その後、師匠は咳払いをし、「でもまあ自分もあんま詳しくないからあれでしょ？　なんか, (0.4)公共事業でやってたとかゆう説があるんでしょ？」(77-78 行目）と発話する。それにより、前の話題（60 行目）に戻る。

次に、もう 1 つの事例を見てみる。事例 3-3 は、喫茶店で 5 人の女性（美沙・可奈・夏樹・玲子・愛香）が行った会話から抜粋したものである。座る位置は図 1 に示す通りである。

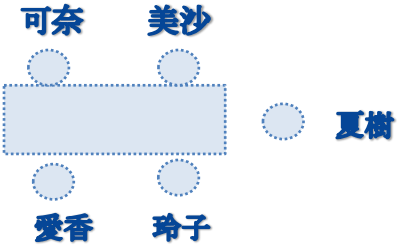

図 3-1　事例 3-3 における会話の参与者の座る位置

美沙はスケートボードをするが、現在は怪我でしばらく休んでいるようである。断片の最初で、可奈は美沙に「もうスケボーやんないの？　(0.6) やってる？」(01-03 行目）と質問する。美沙が答え始めているところで、玲子はスケボーの話題から美沙の怪我を思い出して、美沙に「怪我よくなったの」(05 行目）と質問する。美沙は「あ, うん, あのねえ:と(0.9)今もあの走ると:え:とね:ちょっとお尻がむずむずするんだよね.」(06・08 行目）と答える。その後、怪我のため整形外科に通ったことに関する語り（2 分程度, 省略）を経て、美沙は 111 行目で、「でなんであの:長くなりましたが, お尻は, .hhh 大丈夫です:.」と発話し、長い語りは終了に向かう。

注目したいのは、玲子が笑いながら美沙の発話を繰り返し産出した、114 行目の「長(H)く(H)な(H)りま(H)した he」という発話と 124 行目の「.HH 前(H)置(H)き(H)長くな(h)りま(h)したが.」という発話である。

【事例 3-3: CEJC-C001_001 00:00:39 】
01　可奈:　美沙ちゃんもうスケボーやんないの?
02　　(0.6)
03　可奈:　[やってる？]
04　美沙:　[あ,　あの][ね-]

05　玲子:　　[>あ]で<怪我は良くなったの.（(自分の臀部を叩きなら))
06　美沙:　あ,うん,あの[ねえ:]と(0.9)今もあの走ると:え:とね:ちょっとお尻=
07　玲子:　　[うん.]
08　美沙:　=がむずむずするんだよね.

((103 行（2 分間程度）省略))
代々木病院から笹塚にある整形外科まで通った経緯に関する内容（1 分程度）とその整形外科がテレビ番組で紹介されたという内容（1 分程度）

111　美沙:　でなんであの:長くなりましたが,お尻は,=
112　　= .hhh[大丈 夫 [で　す : .
113　愛香:　　[hehe heh [((笑っている表情,音が出ないようである))
→114　玲子:　　[長(H)く(H)_な(H)[りま(H)[した heh=
115　可奈:　　[Heheh　[hehe
116　夏樹:　　[° hu°
117　美沙:　=.hh Hehe hehe[he .hhh
118　愛香:　　[.hhh
119　玲子:　　[.hhuh　=
→120　　=［前(H)[置(H)]き(H)]長く[な(h)り] ま(h)]したが.］=
121　愛香:　[無[事(h) に?　　]　　[無(h) 事　] に?　] ((笑っている表情))
122　美沙:　　[大]　丈　夫　[で す:.]
123　美沙:　=お尻は大[丈夫]な ん[だけ[ど:なんか:]むずむずはする.
124　玲子:　　[.HHH]((笑っている表情))
125　愛香:　　[良 [かったね.]
126　玲子:　　[う:ん.]
127　可奈:　　[う:ん.　]

まず、111 行目から笑いが最初に生じた箇所までを確認する。

【事例 3-3 断片 1】

111　美沙:　でなんであの:長くなりましたが,お尻は,=
112　　= .hhh[大丈 夫 で　す : .
113　愛香:　　[hehe heh

トランスクリプトからは、美沙による笑いの誘いが産出されていない状況で、愛香は 113 行目で自ら最初に笑いを産出しているように見える。つまり、愛香の笑いは自ら笑うことであるように見える。しかし、実際はそうではない。

ここで注目したい点が 3 つある。第 1 に、「長くなりましたが」という表現は、フォーマルな場面で使用されるものである。カジュアルな友人同士間の雑談で、あえてフォーマルな表現を用いることには、何らかの理由があるだろう。第 2 に、美沙が愛香の笑いの直前でやや長い吸気音（①を参照, 112 行目の「.hhh」）を産出している。この吸気音は、Jefferson（1979）で挙げた笑いを誘う技法の 1 つである。第 3 に、愛香の笑いとほぼ同じタイミングで左手を上に挙げている動き（②を参照）をしている。その左手の動きに続いて「Good」と示すジェスチャーを産出している点（③を参照, 図 3-2）である。これらの 3 つの特徴から、111・112 行目で美沙自身が「面白いことをしている」というスタンスがわかるだろう。

【事例 3-3 断片 2】

111　美沙:　でなんであの:長くなりましたが, お尻は, =
112　　= .hhh　[大*丈　夫　*で#　す：　.
113　愛香:　　[he he heh　　③
美沙_左手　　*手を挙げ―*Good ジェスチャー
fig　　①　②　　#図 3-2

図 3-2　美沙の左手のジェスチャー

要するに、現在の話し手である美香は自分自身を茶化しているのである。そうすることで、自分の発話にある「遊戯要素」を「笑っても良いもの」としてデザインし、そして、「大丈夫」という発話と同時に「good」を表すジェスチャーを用いている。

愛香の自らの笑うように見える笑いは、美沙の笑いの誘いを受け入れて産出されたものである。愛香の笑いの直前に産出された美沙の吸気音は、遡及的な笑いの誘いに聞こえる（Jefferson

1979)。さらに、玲子は愛香の笑いが産出され始めた直後に、笑顔を見せている（④を参照)。つまり、玲子も早い位置で笑いの誘いを受け入れているのである（細馬 2007)。この時点で、すでに「誰かと共に笑うこと」の環境が作られていると言える。

【事例 3-3 断片 3】

111　美沙：　@でなんであの:長くなりましたが, お尻は, =
玲_視線　　@(美)----------->>
112　　= . hhh[大丈 @夫　[で　す：.
113　愛香：　　[hehe @heh　[((笑いの音が聞こえていないが笑っている表情))
→114　玲子：　　[長(H)く(H)_な(H)[りま(H)[した heh=
玲_表情　　④　@ ☺

玲子は、笑顔を見せた直後に笑いをこらえきれないようにしている(爆笑のようにも聞こえる)。ここで玲子は、111 行目の美沙の発話を部分的に繰り返す（114 行目)。玲子が繰り返しているのは、美沙に「笑っても良いもの」としてデザインされている発話の一部である。玲子の行為によって、この部分（「笑っても良いもの」）が連鎖上の焦点になっている。つまり、玲子は際立つ方法（大笑い＋繰り返し＋身体の動き）で美沙の発話にある笑いどころをピン・ポイントでマークしている。では、この玲子の笑いながらの繰り返しに続き、何が生じているだろうか。

【事例 3-3 断片 3】

111　美沙：　なんであの:長くなりましたが, お尻は, =
可奈_視線　-->>（下)----------->>
夏樹_視線　-->>(美)----------->>
夏樹_表情　(無表情)----------->>
112　　= . hhh[大丈　夫　[で　す：.
113　愛香：　　[hehe heh　[((笑いの音が聞こえていないが笑っている表情))
→114　玲子：　　[長(H)く(H)__%な(H)[りま(H)[+した heh=
115　可奈：　　[Heheh　[+hehe
116　夏樹：　　[+°　hu°
可奈_視線　　-->> +(玲)--->>
夏樹_視線　　-->> %(下)--------->>
117　美沙：　=. hh HeHe　hehe

トランスクリプトからわかるように、可奈と夏樹も笑っている（115・116 行目）。美沙が発話（111・112 行目）をしているとき、可奈の視線はずっと下を向いている。しかし、玲子の笑いながらの繰り返しの途中で加奈も笑い始め、視線を玲子に移している（可奈_視線を参照）。一方で、夏樹は美沙に視線を落としているが、無表情である。しかし、玲子の笑いながらの繰り返しの完了付近で、小さい声で笑い出す。さらに、夏樹の笑いは可奈が笑いを産出し始めた後の位置で産出されている。いずれにせよ、可奈と夏樹の笑いは、美沙自身が産出した「笑っても良いもの」と愛香の最初の笑いと離れた位置で産出されている。この点から、2 人が玲子の笑いの影響を受けていると考えられる[49]。

玲子の笑いながらの繰り返しは、2 人の笑いをも誘っている。結果的に、他の参与者も一緒に笑っており、会話が盛り上がっている。

では、玲子が 2 番目に産出した笑いながらの繰り返し（120 行目）は、連鎖上何を達成しているのだろうか。

【事例 3-3 断片 4】

117　美沙:　=.hh HeHe hehe（ . ）　[.hhh
118　愛香:　[.hhh
119　玲子:　[.HHH　=

((オーバーラップの位置は不確実であるが、三人ともこのタイミングで目立つ息を産出しているのは確かである。))

→120　=［ま[え(H)置(H)]き(H)長く[な(h)り] ま(h)]したが.
可奈_nod　｜nod 大 1 回
121　愛香:　[無[事(h) に?　]　[無(h) 事　] に?　] ((笑っている表情))
122　美沙:　[大# じょ：　]う 夫　[で す:　.]
fig　#図 3-3

[49] 玲子の大笑いでの繰り返しの途中で可奈と夏樹が笑いを産出することは、ジョークの理論とも関わっている。Sacks（1974）は、ジョークには「理解テスト」の側面があると論じている。つまり、玲子の繰り返しが産出される前に、その「笑っても良いもの」が美沙によって産出された時点で、可奈と夏樹はまだその「笑うべきもの」を理解できていない可能性がある。

図 3-3　美沙の左手のジェスチャー

120 行目にある笑いながらの繰り返しの産出位置は、事例 1 における新田の笑いながらの繰り返しの産出位置と似ている。いずれも、参与者の笑いが吸気音になった直後の位置で産出されている。そのため、ここでの笑いながらの繰り返しは、事例 1 と同じように、「成功した『笑っても良いもの』」を繰り返すことで「共有された笑いの拡張」（Glenn 2003: 73-80 参照）を達成しようとしていると考えられる。

加えて、120 行目の「まえ置き長くなりましたが」は、美沙が産出した「長くなりましたが」より、笑いどころをより詳細に示した形になっている。玲子の 2 回目の笑いながらの繰り返しと同時に、美沙も自分の先行ジェスチャー（「good」を示すジェスチャーと図 3-3 を参照）と発話（「大丈夫です」）を繰り返している。つまり、2 人とも会話を面白くするために、先行する「面白いもの」を繰り返しているのである。

その後、美沙は「お尻は大丈夫なんだけど:なんか:むずむずはする.」（123 行目）という先行発話（「むずむずはする」という部分は、05 行目の玲子の質問に対し、06・08 行目の応答発話で産出されている）を「再生」することで前の話題に戻る。

【事例 3-3 断片 5】

123　美沙:　=お尻は大[丈夫]な　ん[だけ[ど:なんか:　]むずむずはする.
124　玲子:　　[.HHH]((笑っている表情))
125　愛香:　　[良　[かったね.]
126　玲子:　　[う:ん.　]
127　可奈:　　[う:ん.　]

上記の事例 3-2 と 3-3 の分析を通して、以下のことが明らかになった。まず、笑いながらの繰り返しにより、「遊戯要素」が連鎖上の焦点となり、他の参与者の笑いを誘うことができる。この

ときの「遊戯要素」は、繰り返された発話に含まれている「笑っても良いもの」としてデザインされたものである。その結果として、笑いは続けられている（拡張されている）。次に、どちらの事例とも、繰り返された発話の発話者は、「共有された笑いの拡張」の後に何らかの方法で前の話題に戻る。それにより、繰り返された発話の部分から「共有された笑いの拡張」が終わるところまでの会話は、脇道シークエンス（side sequence）[50]（Jefferson 1972）のように組織されている。

3.3.2「誰かを笑うこと」

本節で扱う繰り返された発話は、前節で扱ったものと共通点と相違点をもつ。前節で分析した笑いながらの繰り返しとの共通点としては、他の参与者の笑いを誘うことができる点が挙げられる。一方、相違点としては、発話者による笑いを誘う技法の有無がある。本節で扱う事例では、繰り返された発話に「遊戯要素」、たとえばおかしい言葉、言い間違いなどが含まれているが、その発話者はそれらを「笑っても良いもの」としてデザインしていない。このような特徴を持っている発話を笑いながら繰り返すことで、先行話者を笑うことが達成されている。

以下、3.3.2.1 節で普通の「誰かを笑うこと」（繰り返された発話の話者を笑うことを達成する）の事例、3.3.2.2 節で「からかい」の対象として笑うことを達成する事例を分析する。

3.2.2.1 “普通”の「誰かを笑うこと」

事例 3-3 は、友人同士である玲子と辰嶋の居酒屋の個室での会話から抜粋したものである。この事例では、01 行目で店員が来ることで、辰嶋と玲子の会話が中断され、3 人で会話を進めている。注目したいのは、14 行目の辰嶋の「ちょっとあれしてもらえません？」という発話と、17 行目でそれを笑いながら繰り返した玲子の「ちょっと(h)あれ(h)して(h)もらえ(h)ま（せん）.」という発話である。

【事例 3-4: CEJC-C001_004 00:02:03　AI の話の途中、店員が来た。】

01　店員:　[(U お待たせし)ました:。
01　玲子:　[(hh)
03　　(.)
04　店員:　[(　　)]お薦め焼酎[です.]
05　玲子:　[.hh　]　　[うん]
06　辰嶋:　あすいません, あとカンパチの握りいただ[きたいのと:]
07　店員:　　[カンパチで.]

[50] 薄井（2007）が用いた訳語を援用した。サイドシークエンスと訳されることもある。

08　玲子:　うん
09　　(.)
10　店員:　はい.
11　辰嶋:　あとちょっと寒いんです
12　　(0.3)
13　店員:　かしこまりまし[た.　]
14　辰嶋:　　[ちょっ]とあれしてもらえません[:
15　店員:　　[はい
16　辰嶋:　[はい　]
→17　玲子:　[ちょっ]と(h)あれ(h)して(h)もら[え(h)ま(せん). Ha
18　辰嶋:　　[hehe　heh　heh
19　店員:　[ありがとうございます.]
20　玲子:　[Ha　haha haha　　] Hehe .hh hehe
21　辰嶋:　あ (0.3)° 彼ね.°　(0.4)彼[ね. ((指で引き戸のほうをさしている))
22　玲子:　　[うんうんうん.

事例 3-3 における 10 行目までは、料理の提供と注文の部分である。辰嶋は注文した後、「あとちょっと寒いんです」(11 行目) と発話する。11 行目の発話には、一旦天井のほうに頭をあげ、そしてまた店員の方に戻す辰嶋の身体の向きの変化と、人差し指で天井を指している辰嶋の左手のジェスチャーが伴う。その指差しのジェスチャーは、店員の「かしこまりました」(13 行目) という発話が終わるまで続けられている。11 行目の辰嶋の発話は、身体の変化および左手のジェスチャーで、エアコンの温度調整という「依頼」として認識される。実際、11 行目の発話が終わり、0.3 秒の間の後、店員は「かしこまりました.」と発話し、辰嶋の「依頼」を受け入れている。

【事例 3-4 断片 1】

11　辰嶋:　あと*ちょっと寒　　い　ん*で　　す　#.
辰_頭　　*頭を天井のほうにあげ　*頭を店員に向け ---->>
辰_左手　　*左手を挙げ、さし指で天井を指す ---------->>
fig
12　　(0.3)
13　店員:　かしこまりました.

13 行目の店員の受け入れにより、辰嶋によって開始された「依頼」活動が完了しうるが、こ

こで辰嶋は「ちょっとあれしてもらえません」（14 行目）と補足する。それに対して店員が「はい」（15 行目）と応じて立ち上がる時、玲子は笑いながら「ちょっと(h)あれ(h)して(h)もらえ(h)ま(せん).」（17 行目）と繰り返す。

【事例 3-4 断片 2】

13　店員:　かしこまりまし[た.　]
14　辰嶋:　[ちょっ]とあ#れしてもら#えません[:
15　店員:　[はい.
　玲_nod　|小 nod*3
16　辰嶋:　[はい　]
→17　玲子:　[ちょっ]と(h)*あれ(h)して(h)もら[え(h)ま(せん). *Ha
18　辰嶋:　[hehe　heh　heh
　玲_視線　>>（辰）---------*(斜め上)----------*(辰)
　店_活動　立ち上がる
19　店員:　[ありがとうございます.]
20　玲子:　[Ha　haha haha　] Hehe .hh hehe
　店_活動　引き戸を閉める
　辰_活動　注文用のタブレットを元のところに戻す
21　辰嶋:　あ（0.3)°彼ね.°（0.4)彼[ね.（(指で引き戸のほうをさしている))
22　玲子:　[うんうんうん.

14 行目の辰嶋の発話には笑いを誘う技法が含まれていないため、17 行目の玲子の発話に伴う笑いは、自らの笑いであると同時に最初の笑いである。ここで、玲子は笑いながらの繰り返しを用いることで、先行する発話に含まれた自分自身にとっての「笑うべきもの」のピックアップを達成している。つまり、ここでの辰嶋の「ちょっとあれしてもらえません」（14 行目）という発話は、辰嶋自身は「笑っても良いもの」としてデザインしていないが、玲子の笑いながらの繰り返しにより遡及的に連鎖上玲子自身にとって「笑うべきもの」であることを明確に示している[51]。

玲子が産出した笑いながらの繰り返し発話の途中で、辰嶋は笑い始める（18 行目)。ここから、17 行目の玲子の笑いながらの繰り返しは、辰嶋の笑いをも誘っていることがわかる。つまり、笑

51 「ちょっとあれしてもらえません」という発話には遊戯要素が含まれていないと思われるが、その発話が参与者である玲子の笑いをもたらしたことは重要である。ここでなぜ玲子が笑うのかということについては、本章の関心ではない。

いながらの繰り返しは、参与者の笑いを誘いうると言える[52]。2 人の「一緒に笑うこと」のあとには、辰嶋が右手で引き戸のほうを指し、「あ（0.3)°彼ね.°（0.4)彼ね.」(21 行目）と発することで、店員についてのやりとりが行われる。

次に、笑いながらの繰り返しの後、「一緒に笑うこと」が生じていない事例 3-5 と 3-6 を分析する。事例 3-5 は、2 組のカップル（秀太(M)-柚本(F),安藤(F)-俊明(M)）が飲食店で、料理が提供される前に収録した雑談からの抜粋である。会話断片の約 1 分 40 秒前では、秀太が親知らずを抜いたということに関するやりとりが行われている。事例 3-5 の直前で、秀太は歯医者から聞いたであろう親知らずに関する 2 つの話をする。ひとつは、顎が小さい俊明の場合、親知らずが生えるスペースがないので、気づいたら親知らずが真横に生えてくるかもしれないというような話である。もうひとつは、親知らずを抜くなら三十歳までと言った歯医者の話が展開されている。それを聞いた安藤は、01 行目で「わたしでも歯が一本少ないんだよね.」と発話する。安藤の下の歯が一本少ないという情報が確認された（03・05 行目）後、秀太は、「へ::」(07 行目）と発することで情報を受け取り、「まあでもそれゆとりあるから.そしたら」(07 行目）と発話する。注目したいのは、秀太の 07 行目の発話の直後で、柚本が笑いながら繰り返した「ゆ(h)と(h)り」（08 行目）という発話である。

【事例 3-5: CEJC-T009_014a 00:01:52】

01　安藤:　わたしでも歯が一本少ないんだよね.
02　　(0.7)
03　秀太:　どこの?　下の?（ . ）(...)
04　　(.)
05　安藤:　うん.
06　　(0.3)
07　秀太:　へ::.まあでもそれゆとりあるから.そしたら.
→08　柚本:　［ゆ(h)と(h)り］
09　安藤:　［んだいじょぶ］かも.
10　　(0.3)
11　秀太:　だいじょぶかも.((グラスを口元に,声がもぐもぐと聞こえる))

柚本の笑いながらの繰り返し((h)マークで示す)により、先行発話で気づいた面白さが顕在化

[52] 玲子の笑いながらの繰り返しにより、店員が笑う可能性もある。しかし、店員の顔にはぼかしがかけられており、その表情を確認することができないため、これを裏付ける証拠はない。

される。つまり、「ゆとり」という言葉は連鎖上「笑っても良いもの」となっている。注目したいのは、繰り返された秀太の発話（07 行目）には、笑いを誘う技法が用いられていないという点である。そして、柚本の笑いながらの繰り返しは、最初の笑いになっている。柚本（現在の話し手（秀太）以外の話者）が、最初の笑いを産出することで、秀太を笑いの対象にしようとしている。

柚本の 08 行目の発話に対し、他の参与者はどのような反応を示しているのだろうか。柚本の 08 行目の発話と同時に、安藤の「んだいじょうぶかも.」（09 行目）が産出されている。安藤の発話は、07 行目の秀太の発話に対する反応である。そして、0.3 秒の間の後、秀太は「だいじょうぶかも.」（11 行目）と発話する。つまり、他の参与者は続けて現在の話題について話している。それによって、柚本の 08 行目で産出した笑いの誘いを拒絶していると言える。

事例 3-6 を見てみよう。事例 3-6 は事例 3-5 の前で生じた会話断片である。事例 3-6 の前では秀太が、現代人は顎が小さくなっているから、親知らずを抜かないといけないという話をしていた。安藤と柚本が親知らずを抜いていないと表明した後、安藤は 01 行目で俊明に向けて「抜いた? 」と質問する。着目したいのは、11 行目と 16 行目の柚本の発話である。

【事例 3-6: T009_014a 00:00:50】

01　安藤:　抜いた?　((俊明に向いて))
02　　(0.4)
03　俊明:　抜いてない。
04　　(0.2)
05　安藤:　顎ちっちゃい[じゃん.]
06　俊明:　　[顎　]ちっちゃい.
07　　(.)
08　柚本:　ね抜かなきゃ[じゃん.]
09　秀太:　　[そ れ]たぶんだんだんだんだん前歯が(0.5) =
10　　= クラッシュ してくるよってゆわれ[て :. ((俊明に))
→11　柚本:　　[ク(h)ラ[: :ッ(h)シュ]
12　俊明:　　[あ : .　]
13　秀太:　　[そうそう.] ((俊明に))=
14　　=クラッシュ[ってゆわれたもん. 俺.] ((柚本に))
15　安藤:　　[うん,　わ た し でも:]
→16　柚本:　heh ク(h)ラッ(h)[シュ .　°hhh°]=
17　安藤:　　[あれなんだよね,　]
18　柚本:　=°huhu° ((0.4 秒))

19　安藤:　　あの(0.4)矯正してたんだよね.
20　　(0.2)
21　俊明:　　[(あ:)
22　秀太:　　[あ:[:　:　:　　]
23　柚本:　　[うん, ま:じで?]　(0.2)　あたしも:.

01 行目から 06 行目の会話では、顎の小さい俊明が親知らずを抜いていないということがわかった。それに対し、親知らずを抜いた経験者である秀太は、俊明に向けて「それたぶんだんだんだんだん前歯が(0.5)クラッシュしてくるよってゆわれて:」(09・10 行目) と発話する。秀太の発話における「クラッシュ」という言葉は、柚本に 11 行目で笑いながら繰り返されている。

事例 3-5 と同じく、ここでの秀太の発話には笑いを誘う技法が用いられていない。しかし、次のターンでは笑い (11 行目) が産出されている。ここで柚本は、先行する発話で「笑っても良いもの」としてデザインされていない発話を、笑いながら繰り返している。つまり、11 行目の笑いながらの繰り返しは、柚本自身にとっての笑いポイントをピックアップしている。そうすることで、秀太を笑う連鎖の開始位置になっている。

ただし、この断片で生じている笑いながらの繰り返し (11 行目) 後の連鎖は、事例 3-5 とやや異なっている。この事例では、笑われた秀太は、「クラッシュってゆわれたもん. 俺.」(14 行目) と発話し、抵抗を示している。その後、柚本はもう一度笑いながら「heh ク(h)ラッ(h)シュ」(16 行目) と繰り返す。それに、発話の繰り返しの後、柚本は笑いを続けている (16・18 行目)。

柚本が 2 回目の笑いながらの繰り返しと、それに続く笑いで何を達成するのか、詳細を見てみる。柚本が 1 回目に産出した笑いながらの繰り返しに対し、笑われた秀太は抵抗している。一方、他の参与者である安藤と俊明も柚本の笑いに同調のスタンスを示していない (笑いやスマイルなどの表情を産出していない)。実際、秀太の 10・11 行目の発話に対し、安藤と俊明は現在進行中の話題に関連する発話を産出している。俊明は頷きながら「あ : 」(12 行目) と、安藤は「うん, わたしでも: あれなんだよね」(15・17 行目) と発話する。要するに、柚本が笑いながらの繰り返しにより、ピックアップした「笑うべきもの」に対し、他の参与者 (安藤・俊明) は反応していない。ここで彼らが反応していないことから、その「笑うべきもの」に対する理解が及んでいない可能性もある。そのため、柚本はもう一回「笑うべきもの」を繰り返すことで、他の参与者の笑いを追求している (Jefferson 1979)。しかし、ここでも他の参与者たちは、笑わずに現在進行中の話題を進めている。

以上の 3 つの事例分析を通して、参与者は笑いながらの繰り返しを用いることで、先行発話で「笑っても良いもの」としてデザインされていない「遊戯要素」を、自分自身にとっての「笑うべきもの」としてマーク (ピックアップ) し、先行話者を笑うことを達成していることがわかっ

た。

3.3.3.2 「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」

前節で分析した笑いながらの繰り返しの事例は“普通”の「誰かを笑うこと」である。それに対して、本節では、普通の「誰かを笑うこと」より「有標的」であり、繰り返された発話の話者を「からかい」の対象として笑うことを達成する会話事例を検討する。

事例 3-7 は 4 人の大学生（D と E：男、F と G：女）がアルバイトをテーマとして語っているものである。E は今回の収録以前、他のメンバーとの会話収録に参加したことがあるため、経験者として、F と G から「どうやって話せばいいの」（01 行目）「前なんだったの？」（06 行目）といったような情報を求められている。E は、前回の内容についての語り（省略の部分）の後、すこし笑いを含む口調で「じゃあ一番アルバイトに情熱を持ってるスちゃんから.」（36 行目）と提案する。

注目したいのは、42 行目の F の「パン大好きだもん」という発話と、それを笑いながら且つ F の口調を真似する形で産出された 48 行目の E の「.HH ♪大好きだも～ん. (0.4) ♪パンが大好きだ(h) も-.HH Hehe」という発話である。

【事例 3-7: Sakura06 00:00:00】

01　F:　[何話すの? アル[バイトについて hh]　どう(h)やって話せばいいの?
02　D:　[° hhhhhh°
03　G:　[° hhhhhhh°
04　E:　　[アルバイトについて]
05　　(0.7)
06　G:　前なんだったの?　((E に向かって))

((30 行省略：E による前回の収録についての語り))

36　E:　じゃあ一番アルバイトに情熱を持ってる[スちゃんから.]((スちゃん：F))
　　((少しの笑いを含む口調))
37　F:　　[huhu huh　　]
38　F:　[な(h)ん[で,hh*持っ(h) t-*.hh]
F_頭　　*頭を振る　*
39　E:　[° huhh　[　huhuhuh °　　]
40　G:　[huhh　　[° huh 語ろう°　　]

41　D:　　[° huhh°　((咳))　]
42　F:　え?　(0.2) パン大好きだもん.
43　E:　hu[hhuh　]
44　F:　　[huhhuh]
45　　(0.3)
46　E:　.HH(　(h)　)?
47　　(0.4)
→48　E:　.HH ♪大好き[だも～ん.　(0.4)♪パンが大好きだ(h)［も-.HH Hehe =
　　((F の口調を真似している))
49　F:　　[HUHUHu ((笑いすぎで声が出ていない))［.hh　((E を叩く))
50　E:　=.hh[hehe hh
51　F:　　［だって楽しいもんバイト.(.)ね.

まず、36 行目の発話から見てみる。36 行目の E の提案は F（スちゃん）への「からかい」として聞こえる。その理由は、E の提案に含まれる遊戯性である。会話収録の序盤で、F はビデオカメラに撮影されていることが気になっており、いかに話すかと迷っている。この F に対して、経験者である E は最初に F に語ってもらうという提案をしている。この E の提案は、会話収録場面にふさわしいものとしてデザインされている[53]。しかしながら、「一番アルバイトに情熱を持ってる」という修飾節と笑いが入った口調を用いることで、真剣に F に自分の提案を受け入れてもらおうという期待は強く感じられない。ここでは、真剣な提案というよりも、むしろ、「一番アルバイトに情熱を持ってる」という F への評価的な言葉に現れた「普通以上の情熱」が大学生としての参与者たちにとって何らかの逸脱したものとして捉えられ、遊戯性が伝わる「からかい」としてデザインされている。発話のターゲットになっている F 自身も「からかい」として捉え、「情熱を持ってる」という語句の直後に笑い始める（37 行目）。そして、笑いながら「な(h)んで,hh 持っ(h) t-」（38 行目）と産出する。

38 行目の発話に伴うのは、F が頭を振るという身振りである。発話と身振りから、F は E の「からかい」への抵抗を示していると言える。36 行目の E の発話に対して、G・D 共に笑いを産出する（40、41 行目）。ここから、E の発話に示されている「遊戯性」を理解したと言える。加えて、G は笑いながら「° 語ろう° 」とも発する（40 行目）。「語ろう」は 36 行目の E の発話の述語になりうる。そのためこの発話は、E の「からかい」への理解の証拠にもなりうる。

[53] 特に省略した会話の部分では、E が述べた前回のテーマ（犬派か猫派について）に対して、F は「え,犬派がいいな」と反応している。また、「へえ：」、「そうなんだ」などの発話をして、会話収録に興味を示している姿が見える。

Eの「からかい」に聞こえる発話に対して、パン屋のアルバイトをしているFは「な(h)んで,hh持っ(h) t-」と産出した上で、42行目で「え? (0.2) パン大好きだもん.」という理由を追加する。ここで、FはEの提案ではなく、「アルバイトに情熱を持ってる」という部分に対応している。「大好き」という感情表現が使われ、ただの理由というよりも、正当性がなく且つ他人に反論できない言い訳になっている。さらに、何らかの理由を述べる時に、「だもん」という文末表現を用いることで、甘えの気持ちが込められているだろう。この発話は、大学生にとってはやや幼い言い方かもしれない。

【事例 3-7 断片 1】

42 F: え? (0.2) パン大好きだもん.
43 E: hu[hhuh] (0.3) .HH((h))?
44 F: [huhhuh]
①

この42行目のFの発話に対し、まずEが最初に笑い(43行目)、そして、Fも笑いを産出している(①参照)。このEの笑いは、先行する42行目の発話を遡及的に「笑うべきもの」としてマークしている。43行目のEの笑いにより、すでに「誰かを笑うこと」の連鎖環境が作られている。その後、45行目から47行目までの流れから、次の話題に進めても良いところであるが、Eは42行目のFの発話をピックアップし、Fの音調を真似して、「.HH ♪大好きだも〜ん. (0.4) ♪パンが大好きだ(h) も-.HH Hehe」(48行目)と産出する。さらに、このEの笑いながらの繰り返しは、42行目のFの発話が産出されて2.1秒(①参照)経過した後の位置で産出されている。

【事例 3-7 断片 2】

42 F: え? (0.2) パン大好きだもん.
43 E: hu[hhuh]
44 F: [huhhuh]
45 (0.3)
46 E: .HH((h))?
47 (0.4)
→48 E: .HH ♪大好き[だも〜ん. (0.4) ♪パンが大* 好 き だ #(h) [*も-.HH Hehe
((Fの口調を真似している))
49 F: [HUHUHu ((笑いすぎで声が出ていない)) [.hh
F_左手 *挙げる *Eを叩く
fig #図 3-4

① 2.1秒

50　E:　=.hh[hehe hh

51　F:　　[だって楽しいもんバイト.(.)ね.

図 3-4　F の動作

E が笑いながら且つ F の幼い口調を真似して F の発話を繰り返すことで、遡及的に F の幼い言い方が連鎖上の笑いの焦点になっている。そうすることで、E は F を「からかい」の対象として笑うことを達成している。実際、F 自身も大笑い（49 行目）で反応した上で、左手を挙げて E を強く叩く（F_左手と図 3-4 を参照）ことと、51 行目で「だって楽しいもんバイト.（ね)」という理由を加えることで、48 行目の E の発話が自分への「からかい」であることへの理解を示している。最終的に、48 行目で笑いながら且つ口調の真似の形で先行する発話を繰り返すことにより、繰り返された話者を「からかい」の対象として笑うことが達成されている。

もう 1 つの「からかい」事例を見てみよう。事例 3-8 は、4 人の大学生（C と E：男,B と F：女）が「猫派か犬派か」について話している会話から抜粋したものである。01 行目から 26 行目までの会話についての分析は、第 4 章で詳細な分析を行なう。ここでは簡単な説明にとどめる。

会話断片の前で犬派だと表明していた E は、C の「おれ猫アレルギーだもん」（03 行目）という報告に対して「でも俺アレルギー°だよ.°」（08 行目）と発話する。E の発話に対し、F と C は「え?」(11・13 行目) と発することで、修復が開始されている。E は、「くしゃみ出る (から) (0.3) うちの犬はわりとなんか.　」（15 行目）と発話し修復を遂行している。C は E の修復に対して、「>そりゃ違う<.おまえのへやが埃っぽいだけ.」と発話し、E をからかっている。C の「からかい」に対し、E は「ち:がうよ..HH ちゃう毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん.」（18・21 行目）と発話し抵抗を示している。0.5 秒の間の後、E は続けて「まっくす-マスク要るよね.」(26 行目) と加える。

この断片での分析の焦点は、31 行目と 35 行目の C の笑いながらの繰り返しであるが、32 行目の F と 34 行目の B の笑いながらの繰り返しも併せて検討したい。

【事例 3-8: Sakura04 00:01:31】

```
 01   C:  ね[こね: ]
 02   F:     [引っか]かれ[た? ] ((断片の直前「猫の爪に引っかかれた」との関連))
 03   C:                  [お ]れ猫アレルギーだもん.
 04       (0.3)
 05   E:  うん.
 06   B:  毛?
 07       ( . )
 08   E:  でも,俺[ 犬  ]アレルギー° だよ.°
 09   C:         [うん.] ((B に向け,06 行目への応答))
 10       ( . )
 11   F:  え?
 12       ( . )
 13   C:  え?
 14       (0.7)
 15   E:  くしゃみ出る(から)(0.3)うちの犬はわり[となんか.     ]
 16   C:                                        [>そりゃ違う<.]=
 17       =おまえのへやが埃っぽいだ[け.]
 18   E:                            [ ち][:がうよ. =
 19   B:                                 [HEHe hehe he
 20   F:                                 [huh huh
 21   E:  = [.HH ちゃう[毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん.
 22   B:    [huh huh  [ hh
 23   F:    [huh huh  [hhh
 24   C:              [° huh huh huhuh °
 25       (0.5)
 26   E:  [まっ[くす -マス]ク要るよね.((B に向けて))
 27   B:      [° う:ん° ]
 28       (0.6)
 29   B:  (え-) あた[ しアレル[ ギ  ー  は   ない.huh
 30   E:             [hu hu  [huh huh
→31   C:                     [まっ(h)くすhuh huh hu
 32   F:  [hh まっ(H)く(h)[す(h)
```

33　E:　[(hh hh)　　[アレルギー[は　　[ない　の　?　]
34　B:　[(h h)　　[ま(h)っく[す　°hh°　].hhu
→35　C:　[(hh)　　[まっくす(h)　　]い(h)る?
36　B:　Hehe[he hehe hehe
36　C:　　[.hhehe　hehe
37　B:　.hh え飼ってるなんか, どっちか?

まず、26 行目の E 発話を検討する。E は犬が嫌いだと表明した B に向けて、「まっくす-マスク要るよね.」と発話し同意を求めている。E の発話では言い間違い（「まっくす-」）が産出されるが、即座に「マスク」と訂正し自己修復が遂行されている。ここで、言葉だけではなく、ジェスチャー（図 3-5）からも、E が自己修復を行なっていることが窺える[54]。

【事例 3-8 断片 1】

26　E:　まっくす-　マスク要 る　よね.((B に向けて))

図 3-5　26 行目の E のジェスチャー

次に、26 行目から 31 行目までのやりとりを見てみよう。E の同意要求に対し、B は遅れたタイミング（28 行目の 0.6 秒の間）で「(え-) あたしアレルギーはない」(29 行目）と発話し、会話連鎖を前に進める。

[54] 文字上、「まっくす-」は「アレルギー」が「Max」の程度なのだと思われるかもしれない。ここで「Max」ではなく「マスク」の言い間違いであるという理由を述べる。まず、「ま」の時点より前から、E は両手をマスクの形を作り始めている（図 3-11 左)。そして、「まっくす-」と言い終わった直後に、両手を少し口元から離している（図 3-11 中)。「マスク」と産出する時に、再び両手を口元に近づけ、そしてずっとこのジェスチャー（図 3-11 右）をしばらく保持している。言葉の修復と同時にジェスチャーの修復も行われていることが窺える。次に、35 行目の C の「まっくすいる？」という発話から、C は E が「マスク」を「まっくす」と言い間違えたこととして捉えていることがわかる。最後に、C の繰り返しに対して E の反応からも、自分の言い間違いを利用され、からかわれていることがわかる。

【事例 3-8 断片 2】

26　E:　まっ[くす -マス]ク要るよね.((B に向けて))
27　B:　　[° う:ん°]
28　　(0.6)
29　B:　(え-) あた[しアレル [ギ　ー　は　ない.huh
30　E:　　[hu hu　[huh huh
→31　C:　　[まっ(h)くす huh huh hu

② 1.4 秒

他方、C は、E が言い間違った言葉（「まっくす」）を取り上げ、笑いながら繰り返している（31 行目）。この C の笑いながらの繰り返しは、E の言い間違いが産出されて 1.4 秒（②参照）経過した後の位置で産出されている。加えて、29 行目の B の発話の途中で割り込む形で産出されている。要するに、言い間違えた E を逃さないようにするかのように、E の言い間違いを笑いながら繰り返しているのである。ここで、C は遡及的に自分自身にとっての「笑うべきもの」としてマークしている[55]。つまり、自分が何を笑っているのか、他の参与者に示している。さらに、相手の言い間違いを取り上げて笑うことは、揚げ足を取ってからかうという行為として認識できるだろう。

それでは、E は、C が笑いながら自分自身の言い間違いを繰り返すことに対して、どのような振る舞いで反応をしているだろうか。

E は C の笑いながらの繰り返しが産出された直後で、C から視線をそらしテーブルに落とす（②と図 3-6 図 3-7 を参照）。そして、E は視線を B に移し、「アレルギーはないの？」（33 行目）と質問する（③を参照）。つまり、E は視線をそらすことと B に質問することで、C の「からかい」を無視している。これは、「からかい」に対する一種の抵抗である。

【事例 3-8 断片 3】

28　　(0.6)
E_視線　>>(B に)
29　B:　*(え-) あた[しアレル　[ギ　ー　は　ない.]huh
30　E:　　[hu hu　[hh hh
31　C:　　#[まっ (h) く　す]#*huh hh
E_視線　*(C) ----------　* (テーブル)　②
fig　　# 図 3-6　#図 3-7

[55] C の笑いながらの繰り返しは、B の発話とオーバーラップするだけでなく、E の笑いともオーバーラップしている。しかしここで注意してほしいのは、ここでの E の笑いは笑いの誘い技法ではないということである。

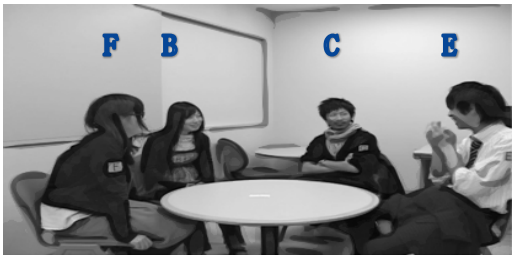

図 3-6 E のジェスチャーと視線

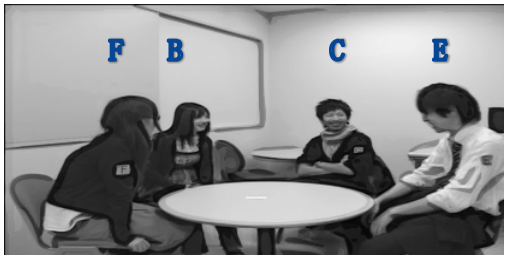

図 3-7 E の視線

32　F:　[* hh まっ(H)く(h)[す(h)
→33　E:　[*(hh hh)　[アレルギー[は　[*ない　の　?　]
E_視線　*(B) ----------*(テーブル)---->>
③

次に、32 行目と 34 行目における F と B による笑いながらの繰り返しで、何が達成されているかを見てみる（断片 4）。

C の笑いながらの繰り返しがトリガーとなり、F は 32 行目で笑いながら「(H)まっく(h)す(h)」と繰り返す。そして、B も F の笑いながらの繰り返しが産出された近くの位置で、笑いながら「ま(h)っくす °hh°」（34 行目）と繰り返す。からかう側である C の発話を繰り返すことで、C と「からかいのチーム」を組む（Machi 2014）ことを達成していることが考えられる。つまり、F と B は C と共に笑うことで、E をからかう対象として笑うことを達成している。この時の E の反応を見てみよう。B の笑いながらの繰り返しの途中で、E は視線を B から逸らしてテーブルに落としている（④を参照）。

【事例 3-8 断片 4】

31　C:　まっ（h）くす huh hh
→32　F:　[* hh [まっ(H)く(h)[す(h)]
33　E:　[* (hh hh)　[アレルギー[は　[*ない　の　?　]
→34　B:　[* (h h)　[[ま(h)っく [*す　°hh°　].hhu]
35　C:　[* (hh)　[*まっくす(h)　]い(h)る?
E_視線　* (B) ----------④- * (テーブル)--------->

参与者たちが笑いながら繰り返したのは、E の言い間違いである。それは、C が 1 回目の笑いながらの繰り返しで遡及的に笑うべきとしてマークしたものである。ここで参与者たちが繰り返した E の言い間違いをからかうべきこと（tasabale）と呼ぶこともできる。Glenn（2003: 73-80）によれば、「笑っても良いもの」を繰り返すことで「共有された笑い」が続けられる。その理論に

基づくと、からかうべきことを繰り返すことで、「からかい」の「効果」も続けられるだろう。これは、C が B による笑いながらの繰り返しが終わる前に、もう一度笑いながら E の言い間違いを繰り返す（35 行目）理由として考えられる。E の振る舞いからも、E がさらにからかわれていることがわかる。

【事例 3-8 断片 5】

33　E:　[(hh hh)　　[アレルギー[は　　[*ない　の ?]

34　B:　[(h h)　　[ま(h)っく[*す　°hh°　].hhu

35　C:　[(hh)　　[*まっくす(h)　]い(h)る?

E_視線　* (B) ---------- * (テーブル) -------->>

36　B:　Hehe[he hehe hehe

36　C:　[.hhehe　hehe#

fig　#図 3-8

37　B:　.hh え飼ってる*なんか, どっちか? ((C と F に))

E_視線　>>----------* (B) ------>>

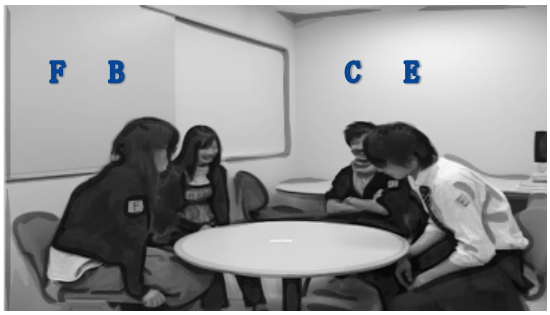

図 3-8　E の身体の向き

E が視線を B から逸らしてテーブルに落とし（④参照）、そして、身体を捻った状態（図 3-8 参照）を経て、視線を B に戻すまで合わせて 2.6 秒が経過している。E の振る舞いから、E は現在の話題から退出しようとしている[56]ことがわかる。E を見つめている B は、37 行目で「.hh え飼ってるなんか, どっちか? 」と発話することで、E をからかう活動を終える。

3.3.3 小括

以下では、本章が先行研究の知見から取り入れた分析のポイントにより各事例をまとめ、表 3-1 と 3-2 に示す。

[56] E はテーブルに置いてある紙をじっと見ている。その紙に「犬派か猫派か」のような短い情報が書かれている。

表 3-1 「誰かと共に笑うこと」の事例のまとめ

		繰り返された「遊戯要素」のターン （特徴・笑いを誘う技法の有無等）	最初の笑い	笑いながらの繰り返し	笑いながらの繰り返しの後の展開
「誰かと共に笑うこと」	事例 3-2	68 行目の師匠の 「知らな〜い=hhHeheh(し(h)ら-)Heh hehehe」 ・やや「有標」の口調 ・笑いを誘う技法有	師匠	73 行目の新田の 「¥知らな〜い.¥」	（直後：） ・他の参与者（奥村）が笑いを産出 ・共有された笑いの拡張
					・1.6 秒の沈黙の後、師匠が何らかの発話をすることで前の話題に戻る
	事例 3-3	111 行目の美沙の 「でなんであの:長くなりましたが,お尻は,.hhh 大丈夫です：.」 ・フォーマルな表現 ・笑いを誘う技法有 ・「good」を表すジェスチャーが伴う	美沙	114 行目の玲子の 「長(H)く(H)な(H)りま(H)した he」 124 行目の「.HH 前(H)置(H)き(H)長くな(h)りま(h)したが.」	（直後：） ・他の参与者（可奈と夏樹）が笑いを産出 ・共有された笑いの拡張
					・美沙が何らかの発話することで前の話題に戻る

表 3-2 「誰かを笑うこと」の事例のまとめ

		繰り返された「遊戯要素」のターン （特徴・笑いを誘う技法の有無等）	最初の笑い	笑いながらの繰り返し	笑いながらの繰り返しの後の展開
“普通”の「誰かを笑うこと」	事例 3-4	14 行目辰嶋の 「ちょっとあれしてもらえません:」 ・天井を指しているジェスチャーが伴う ・笑いを誘う技法無	玲子	17 行目の玲子の 「ちょっと(h)あれ(h)して(h)もらえ(h)ま(せん). Ha」	（直後：） ・辰嶋が笑いを産出する。（一緒に笑う） ・店員についてのやりとり
	事例 3-5	07 行目の秀太の 「へ::. まあでもそれゆとりあるから. そしたら.」 ・笑いを誘う技法無	柚本	08 行目の柚本の 「ゆ(h)と(h)り」	・一緒に笑うことが生じていない ・参与者たちが現在の話題について話し続ける
	事例 3-6	09・10 行目の秀太の 「それたぶんだんだんだんだん前歯が(0.5)クラッシュしてくるよってゆわれて:.」 ・笑いを誘う技法無	柚本	11 行目の柚本の「ク(h)ラ::ッ(h)シュ」 16 行目の柚本の「heh ク(h)ラッ(h)シュ. ° hhh° 」	・秀太が抵抗を示す ・一緒に笑うことが生じていない ・現在進行中の話題を進めている

（続）表 3-2 「誰かを笑うこと」の事例のまとめ

		繰り返された「遊戯要素」のターン （特徴・笑いを誘う技法の有無等）	最初の笑い	笑いながらの繰り返し	笑いながらの繰り返しの後の展開
「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」	事例 3-7	42 行目の F の 「え?（0.2）パン大好きだもん.」 ・笑いを誘う技法無	E	48 行目の E の 「.HH ♪大好きだも～ん.（0.4）♪パンが大好きだ(h)も-.HH Hehe」	・F が笑いを産出 ・E を叩く
	事例 3-8	26 行目の E の 「まっくす -マスク要るよね.」 ・笑いを誘う技法無	C	31 行目の C の 「まっ(h)くす huh huh hu」	・F と B が笑いながら繰り返しを産出 ・E が視線を C から逸らし、B に向けて別の質問をすることで、C の「からかい」を無視する
				35 行目の C の 「まっくす(h)い(h)る?」	・E が視線を B から逸らしてテーブルに落とす。身体を捻った状態で紙を見つめることで、現在の話題を退出しようとする。

3.4 考察

本節では、前節での事例分析の結果をまとめた上で考察を行う。前節では、笑いながらの繰り返しという「組み立て」の発話によって、以下のような異なる連鎖位置で、どのような行為が成し遂げられているのかを分析した。

00　話題が真剣に進められている

01　話者 A：発話に「遊戯要素」が含まれている

　　A-①　笑いを誘う技法が用いられている

　　A-②　笑いを誘う技法を用いられていない

02　話者 B：笑いながら A の発話における「遊戯要素」を繰り返す

まず、参与者は笑いながらの繰り返しを用いることで、連鎖上で自分自身にとっての「笑うべきもの」を明確に示す。つまり、いま何を笑うかを、笑いながらの繰り返しにより、他の参与者に明示することができる。

次に、笑いながらの繰り返しを用いることで成し遂げる行為は、連鎖上で繰り返された発話の話者がどのようなスタンスを示しているかによって異なる。話者 B が笑いながら A-①における「遊戯要素」を繰り返す場合、話者 A は笑いを誘う技法や「有標」の口調、ジェスチャーなども用いて自分自身を茶化している。つまり、話者 A が示すスタンスは【面白いことをしている】というものである。話者 B は吸気音や何らかのジェスチャーなどの事象を相互行為上の有意味なこととして捉え、それに敏感に笑いながらの繰り返しで反応することで、話者 A のスタンスに同調しており、話者 A と共に笑うことを成し遂げている。それと同時に、他の参与者の笑いをも誘っている。

それに対し、話者 B が笑いながら A-②における「遊戯要素」を繰り返す場合、話者 A は笑いを誘う技法を用いていない。つまり、話者 A が示すスタンスは【真剣に話している】というようなものである。この時に、話者 B は笑いながらの繰り返しを用いることで、話者 A を笑うことを成し遂げている。場合によって、話者 A を「からかい」の対象として笑うことを成し遂げることもあるのである。

「からかい」の対象として笑うことが成し遂げられている事例を詳しく観察すると、繰り返された「遊戯要素」はその産出者（からかわれる側）にしてみれば、「目立たない」「普通な」ものである。しかし、繰り返す側（からかう側）は、敢えてその「遊戯要素」に現れたアイデンティティーやカテゴリーを「逸脱した」ものとして捉え、繰り返すことでその「逸脱さ」を焦点化している。そうすることで、相手をからかっているのである。

最後に、事例 3-8 では、話者 B と F の笑いながらの繰り返しは、話者 C と共に、話者 E を笑

うことを達成している。つまり、B と F は、笑いながらの繰り返しを用いることで、「誰かと共に笑うこと」と「誰かを笑うこと」の両方を成し遂げている。この事例が示しているように「誰かと共に笑うこと」か「誰かを笑うこと」かというのは、明確に線引きができるものではない。会話が刻一刻と変化していく中での参与者の志向性についての描写である。

3.5 おわりに

本章では、笑いに関する先行研究の知見を踏まえて、相互行為上で笑いながらの繰り返しがどのような役割を果たしているのかを分析した。まず、笑いながらの繰り返しの産出者は、それを用いることで、自分自身にとっての「笑うべきもの」を明確に示すことがわかった。次に、異なった連鎖位置で、「誰かと共に笑うこと」か「誰かを笑うこと」を成し遂げていることも認められた。場合によっては、繰り返された発話の話者を「からかい」の対象として笑うことも成し遂げていることが明らかになった。

第４章「からかい」を行う前の「準備」段階
―「え？ 」「ん？ 」「なに?」などの無限定の質問に着目して―

4.1 はじめに

本章では、前章に引き続き、参与者を「からかい」の対象として笑うことについて検討したい。前章では、参与者は笑いながら先行話者の発話における「遊戯要素」を繰り返すことで、先行話者と共に笑うこと、または、先行話者を笑うことを達成するということを記述した。こうした事例では、参与者が先行話者の言い間違った言葉やおかしい言葉を笑いながら繰り返すことで、その言い間違いや可笑しさを焦点化している。それと同時に、先行話者を「からかい」の対象として笑うことを達成しているのである。

Drew（1987）の分析が示すとおり、「からかい」のターゲットになっているのは、会話に現れた過剰さや何らかの規範からの逸脱であると考えられる。我々が社会の一員として身につけている常識に基づき、会話に現れたその過剰さや逸脱を直接にターゲットにして相手をからかうという方法が十分ありうる。

しかしながら、筆者の集めた「からかい」の事例を観察すると、参与者はしばしば二段階または数段階を踏んで、相手をからかっているということがわかる。段階を踏むというのは、たとえば、以下のような流れを踏むということである。まず、何らかの「準備」を行う。そして、次の段階で相手をからかう。この「準備」の段階では、発話に対する理解確認の作業というような他者開始修復[57]（Kushida 2011 と初鹿野・岩田 2017 を参照）[58]や、「からかい」の対象となる参与者に向けられた指さし[59]（安井 2017, 2019 を参照）などが行われる。

本章で着目する「準備」段階では、「ん?」「え?」「なに?」などの「無限定の質問（Open-class Repair Initiators）」[60]と呼ばれるもの（Drew 1997）が産出されている。この無限定の質問は、他者修復開始の技法の１つであり、しばしば先行発話に聞き取りの問題があることを示すために使われる（Svennevig 2008；詳しい説明は 4.2 節に譲る）。しかしながら、参与者は聞き取りの問題に直面していない場合、あえて無限定質問を用いることで何を達成しているのだろうか。本章の関心は、事例 4-1 に見られるような、二人により産出されている無限定の質問（10・11 行

---

[57] 「からかい」を行う前ではなく、他者開始修復を産出すると同時に相手をからかう事例もある。初鹿野・岩田（2014）における事例 2 を参照されたい。

[58] Kushida（2011）では、先行発話に対する理解候補を提示することで修復を開始している（事例（19））。初鹿野・岩田（2017）では、［先行発話の部分の引用＋疑問詞］という発話形式で修復を開始している（事例（1））。いずれも、先行発話に関して、修復の開始者が理解の問題に直面していることを示している。

[59] 「からかい」の対象となる参与者に向けられた指さしは、主に他の参与者の注意を引くためと「からかい」の対象を焦点化させるために産出されている。

[60] 「オープンな修復開始装置」などの呼び方もある。

目）である。

【事例 4-1: 事例 4-3 からの抜粋 詳細は事例 4-3 を参照されたい】

06　奥村:　.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh
07　(0.3)
08　奥村:　He.h
09　(.)
→10　師匠:　[ん↑:]
→11　新田:　[え↑:]
12　(0.2)
13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ]か¥　ごめん hh　あ: そう° だったね.°
14　新田:　[He　]
15　新田:　あ [そ] び行っ[(0.2)　] たり[してんすか:_]
16　奥村:　[.hh]　[h(吐く息)]　[す : :　]ぐらい=

「準備」の段階

「からかい」の段階

事例 4-1 では、「からかい」として理解できる発話は、15 行目の新田の「あそび行っ（0.2）たりしてんすか:_」である。それが行われる前「準備」の段階では、発話の聞き取りの問題に直面していない師匠と新田が同時に「ん↑:」と「え↑:」と産出しているのである。仮にこの段階が「からかい」を行う「準備」の段階とすれば、具体的にどのような内容の「準備」を行なっているのか、そして、次の段階でいかに相手をからかっているのかを検討する。

以下では、まず本章の分析と深く関わりがある他者修復連鎖について紹介する（4.2 節）。次に、会話事例の分析を行う（4.3 節）。最後に、分析した結果をまとめた上で考察を行う（4.4 節）。

4.2 他者修復連鎖

本節では、まず他者開始修復が対応するトラブルのタイプを確認する（4.2.1 節）。次に、無限定の質問で開始した修復で、トラブル源の産出者がどのような対応をしているか（4.2.2 節）、無限定の質問の産出者自身はどのようなトラブルのタイプ（聞き取り・理解・受容性）に直面しているかについて述べる（4.2.3 節）。最後に、先行研究の知見をまとめる（4.2.4 節）。

4.2.1 他者開始修復が対処するトラブルのタイプ

修復が発話の産出・聞き取り・理解にかかわるトラブルに対処する方法である（Schegloff, Jefferson, and Sacks 1977）という点については、すでに第 2 章で紹介した。発話の産出に関するトラブルは、主に言葉探しや言い間違いなどの発話の産出上のトラブルを指している。他者開

始修復は、主に発話の聞き取り・理解にかかわるトラブルに対処するが、他者による訂正の形で発話の産出に関するトラブルにも対処する[61]。しかしながら、Svennevig（2008: 336）では、「発話の産出の問題」というのは、単に発音、語彙、統語などの言語的な問題だけではなく、虚偽、不適切、非関与的という、広い意味で何か間違ったことを言うといった容認性（acceptability）の問題も含むと指摘されている。

容認性について、Svennevig（2008）では、以下のように述べられている。

> 言語表現としての容認性だけでなく、社会行為としての容認性にも関わっているのである。1 つの行為を容認することには、発話で行われた主張の真正性、問題のある行為を産出する話し手の権利、発言と現在状況の関連性など様々なものが含まれる。（Svennevig 2008: 337, 筆者訳）

要するに、他者開始修復は、聞き取り・理解にかかわるトラブルに加え、上記の発話の産出上の容認性にかかわるトラブルにも対処する。

4.2.2 無限定の質問で開始した修復におけるトラブル源の産出者の対応

「え? 」「ん? 」「なに?」などの無限定の質問は、他者修復開始の一つの技法としては、トラブル源の所在とトラブルのタイプを特定する力が最も弱いものである（Schegloff, Jefferson,and Sacks 1977, Schegloff 2007, Hayashi and Hayano 2013）。串田・平本・林（2017）では、その特徴を以下のように述べている。

> 先行発話に何らかの問題があったことは表示するもの、先行発話のどの部分にかんして問題

---

[61] 他者開始修復には、修復の他者開始・自己実行と他者開始・他者実行という 2 タイプがある。他者開始・自己修復は主に聞き取り・理解にかかわるトラブルに対処するのに対して、「他者開始・他者実行は、他者による訂正の形を取ることが多い」（串田・平本・林 2017: 198）。修復の他者開始・他者実行は次の事例に見られる（串田・平本・林 2017: 197-198）。

((新潟出身でアメリカ在住の 2 人会話。2 人は学生時代からの友人。トシエは最近里帰りして、親不知（おやしらず）にあるミチエの実家に立ち寄った話をしている。市振（いちぶり）は親不知の隣町。))

01 トシエ：　う:んでもなんか:: .hhh あの市振も<u>変わ</u>ってたね::
02　(.)
03 ミチエ：　→親不知［よ.
04 トシエ：　［親しら［ず::.
05 ミチエ：　［huhhuhuhh そ(h)う(h)
06 トシエ：　[お(h)や(h)し(h)[ら(h)ず(h)::
07 ミチエ：　[hhh hhh hhh　[なんか<u>ね::</u>

03 行目は 01 行目の「市振」をトラブル源とした、ミチエによる修復の他者開始・他者実行のケースである。ここでは、修復開始の段階と修復実行の段階が分離しておらず、03 行目のミチエの発話が修復開始と修復実行を同時に行なっている。

があったのか、そして、それはどのようなタイプの問題なのかは明示しない。ゆえに、どのような修復を実行するのが適切なのかは、かなりの程度まで修復の実行者に委ねられることになる。（串田・平本・林 2017: 206）

次の会話事例を見てみよう。

【事例 4-2: 串田・平本・林 2017: 206-207 トラブル源などは筆者が追加】
((タクはもうすぐ引っ越しをするとサトシに告げた))

01　サトシ:　ひとりで住むん.
02　　(1.1)
03　タク:　ん::たぶんルームメイト取るけど.
04 サトシ:　おん.hhh
05 タク:　い[え-]
→06 サトシ:　[そこ]嫌になったん.　**トラブル源**
07　(0.3)
⇒08 タク:　え?　**無限定の質問による修復開始**
09　(1.0)
★10 サトシ:　そこ嫌になったん.　**修復の実行①**
11　(0.3)
★12 サトシ:　いま住んでるとこ.　**修復の実行②**
13　(1.0)
14 タク:　いやいや, 一軒家の:,家に:,
15　(0.3)
16 サトシ:　あ: (0.4)一軒家借りるん.

06 行目のサトシの質問に対し、タクは「え? 」（08 行目）という無限定の質問を発話し、修復を開始する。06 行目の発話は、トラブル源である。10 行目でサトシは「そこ嫌になったん.」という 06 行目の発話をそのまま繰り返している（修復の実行①)。この繰り返しは、サトシが自分の発話が全く聞き取られなかったと判断したことによると考えられる。つまり、タクが直面した問題が聞き取りの問題であったと扱っていることがわかる。10 行目の繰り返しの後、タクからの反応を得られなかった（11 行目の 0.3 秒の間）サトシは、「いま住んでるとこ. 」（12 行目）と発話する（修復の実行②)。12 行目の発話は、トラブル源を含む 06 行目の発話内の指示詞「そこ」に対する説明である。この 2 回目の修復の実行により、サトシはタクが直面している問題が

指示詞「そこ」に関する理解の問題だとしていることがわかる。

会話事例の分析を通して、無限定の質問の産出者であるタクは言葉に対する理解の問題に直面していること（修復の実行②から）がわかったが、トラブル源の産出者であるサトシは１回目で自分の発話がまったく聞き取られなかったと判断し、トラブル源を含む順番の発話をそのまま繰り返していることが認められた。さらに、無限定の質問についての研究である Drew（1997）と Oloff（2018）における会話事例でも、トラブル源の産出者は、トラブル源を含む順番の発話を繰り返すことによって修復の実行を遂行することが多いことが確認された[62]。

要するに、無限定の質問で開始した修復連鎖において、トラブル源の産出者は無限定の質問の産出者が聞き取りにかかわるトラブルに直面したと判断し、修復を遂行するのがデフォルトだと言える。これは、参与者が何らかのトラブルに対応する際、「最初に最も単純でコストのかからない方法を試してみる」（Pomerantz 1984b: 156）という選好に関連する社会的メカニズムにつながっている。

では、実際に無限定の質問の産出者自身はどのタイプのトラブルに直面しているのだろうか。次節ではこのことについて述べたい。

4.2.3 無限定の質問の産出者が直面しているトラブルのタイプ

修復の他者開始が対処するトラブルとしては、発話の聞き取り、理解、容認性に関わるという 3 つが典型的なものである。このうち、「理解または容認性の問題よりも聞き取りの問題として扱うことへの一般的な選好性」という優先順位が存在するということは、Svennevig（2008）で指摘されている。具体的には、以下のように述べられている。

> *A preference for the least serious construal of problems.*
> In the choice between different ways of addressing a problem in conversation, construing it as a hearing problem is preferred to construing it as an understanding problem, which in turn is preferred to construing it as an acceptability problem.
> （問題の最も深刻ではない解釈の選好性。
> 会話中の問題を正す様々な方法の中からの選択する際に、それを聞き取りの問題とする方がそれを理解の問題とするよりも好ましい。そして、それを理解の問題とすることは、またそれを容認の問題とすることよりも好ましい。）
>
> （Svennevig 2008: 339, 筆者訳）

[62] 2.1.5 節における事例 2-5 も参照されたい。

要するに、参与者は何らかのトラブルに直面している時、まず何らかの方法で、自分の聞き取りに問題があったかどうか、自分の理解が正しいかどうか、を確認する。そうすることで、「デリケートな問題の発生を回避することができるかもしれない[63]」（Svennevig 2008: 341）。

前節ですでに述べたが、「無限定の質問は、先行発話に何らかの問題があったことは表示するものの、先行発話のどの部分に関して問題があったのか、そして、それはどのようなタイプの問題なのかは明示しない」（串田・平本・林 2017: 206）。しかしながら、Svennevig のこのトラブルの優先順位の指摘から、無限定の質問の産出者自身も、何らかのトラブルに直面すると、まず自分自身の聞き取りに問題があることに志向することがわかる。さらに、Svennevig（2008）の議論に基づくと、無限定の質問は「何と言った? （what did you say? ）」などの聞き取りの問題の明示的な指標に相当するようである。たとえば、「何と言った? 」という質問に対して、しばしば自分の発話を繰り返すことで応答することがある。無限定の質問で開始した修復連鎖で、トラブル源の産出者もしばしば先行する自分の発話を繰り返すのである。

4.2.4 先行研究のまとめ

本章で注目した先行研究の要点は以下の 3 つである。

(a) 他者開始修復は、発話の聞き取り・理解・容認性に関する問題に対処する。
(b) 参与者は、何らかの問題に直面する際、発話の理解・容認性の問題よりもまず自分の聞き取りの問題があるかどうかを確認することがしばしばある。
(c) 無限定の質問はデフォルトとして、発話の聞き取りの問題を示す際に用いられる。

ここで、少し説明を加える。(b) については、会話の進行性（progressivity）と面子への影響（face work）の両方に関する懸念により、動機付けられているようである（Svennevig 2008: 345）。より具体的に言えば、聞き取りの問題は理解の問題よりも認知的に解決しやすいためである。ま

---

[63] Svennevig の論考の詳細は、以下の通りである。
Hearing and understanding repair initiators may be considered as placing the responsibility on the repair initiator (by admitting a failure to hear or understand), whereas acceptability repair initiators place it on the speaker of the trouble source turn (by implying that s/he has said something wrong or inappropriate).
Presenting a candidate solution to an acceptability problem thus exposes the potential inadequacy of the interlocutor in a way that candidate solutions to hearing or understanding problems do not.
（聞き取りと理解にかかわる問題の修復開始装置は、（聞き取れなかったことや理解できなかったことを認めることから）修復開始者自身に責任を負わせているように見なされるかもしれない。一方、容認性にかかわる修復の開始装置は（何か間違ったことや不適切なことを言ったということを含意しながら）、その責任をトラブル源の産出話者に負わせる。したがって、容認性の問題の解決になりそうなものを提示するということは、聞き取りの問題あるいは理解の問題の解決になりそうなものがしないような方法で、相手の潜在的不適切さを暴露することになる。）
(Svennevig 2008: 339, 筆者訳)

た、他人の行為を是正することは、面子を脅かす行為をとなりやすいためである。

（c）については、以下のことを加えたい。Drew（1997）が指摘した理解・容認性にかかわる問題に対処する際、無限定の質問を選ぶということは、「最初で最もコストのかからない解決策」（Svennevig 2008: 346）と関係している。

上記の先行研究の知見を踏まえ、以下では、参与者が「からかい」を行う前に無限定の質問を用いることで何を達成しているのかを分析していく。

4.3 分析

本節では以下のような会話連鎖で無限定の質問を分析する。

01　話者 A：　トラブル源を含む発話
02　話者 B：　「え? 」、「ん? 」、「なに? 」などの無限定の質問
03　話者 C：　「え? 」、「ん? 」、「なに? 」などの無限定の質問
　　（(話者 B と C が同時にまたは順次に無限定の質問を産出する)）
04　話者 A：　B と C が直面しているトラブルに対処する
05　話者 C：　認識可能な「からかい」
06　話者 A：　「からかい」に対する何らかの反応

分析のポイントは、以下の 3 点である。まず、トラブル源を含む発話の産出位置と組み立てを記述する。次に、「準備」の段階で無限定の質問を産出することで何を達成しているのかを分析する。具体的には、「え? 」、「ん? 」、「なに? 」などの無限定の質問が産出される際のタイミング、参与者の身体の動きと顔の表情などを分析する。最後に、認識可能な「からかい」とトラブル源を含む発話の産出者 A の反応を記述する。

本節では、2 つの会話事例の分析を行う。4.3.1 節では、無限定の質問が同時に産出される事例を分析する。その次の 4.3.2 節では、無限定の質問が順次産出される事例を検討する。

4.3.1 無限定の質問が同時に産出される事例

本節では、無限定の質問が同時に産出される事例を検討する。事例 4-3 は、師匠（あだ名）、奥村、新田が居酒屋で収録した会話から抜粋したものである。座る位置を図 4-1 に示す。師匠は 40 代後半で、奥村と新田は 30 代後半である

CEJC コーパスで公開されている【T001_014】データは 01 行目からである。01 行目以前で何が生じていたかは分からないが、01 行目から 04 行目の最初のところまでに長い沈黙が生じているということが目立っている。それは、会話が途切れているということだろう。04 行目で師匠

が奥村に向けて「えっ休みの日とか何やってるん? 」と発話し、新しい話題を振っている。新しい話題を振られた奥村は、06 行目で「.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh」と産出する。その後、10 行目と 11 行目で師匠と新田が無限定の質問を産出することで、修復の連鎖が生じる。

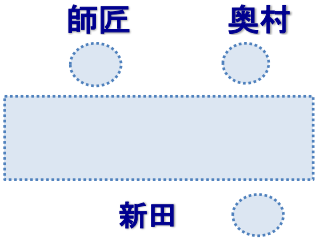

図 4-1　会話の参与者の座る位置

【事例 4-3 CEJC-T001_014 00:00:00】

01　　(0.7)
02　師匠:　((咳払い))
03　　(1.0)
04　師匠:　((咳払い)) (.)えっ休みの日とか何やってるん?
05　　(0.4)
06　奥村:　.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh
07　　(0.3)
08　奥村:　He.h
09　　(.)
→10　師匠:　[ん↑:]
→11　新田:　[え↑:]
12　　(0.2)
13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ]か¥　ごめん hh　あ: そう° だったね.°
14　新田:　　[He　]
15　新田:　あ [そ] び行っ[(0.2)　] たり[してんすか:_]
16　奥村:　　[.hh]　　[h(吐く息)]　　[す : :　　]ぐらい=
17　　=[かな::とか ha あ(h): あ[とは::　[.h
18　師匠:　[Hehehe hh　hh　　[.HHE .H[HE hh　[HE]HAHA # hh=
19　新田:　　[° hh° [HE HE　H[E]
20　師匠:　=.H[HH ざっ(H)くり(h)し(h)て =

21　新田:　　[.Hh　　He　　.hh
22　師匠:　=[.HH　　]
23　新田:　[だって笑]いすぎ[っす(h)[よ..hhh　　]
24　奥村:　　[huHu　((タバコ息を吐く))
25　師匠:　　[>いや:いやいややく] いやいやいや =
26　　=もっとこういろんな[人]がね(.)[しゃべんないと]° いけないからな.°
27　奥村:　　[gh]　　[kheh .hh　　]
28　　(2.3)
29　新田:　なもうあれですよね,冬とか(0.2)スノボ行ったりします[もんね.]
30　奥村:　　[う　:　]ん.
31　師匠:　う::あん ((食べながら))

まず、注目したい部分の連鎖構造を以下に示す。

【事例 4-3 断片 1】

06　奥村:　.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh
トラブル源を含む発話
→10　師匠:　[ん↑:]　**無限定の質問**
→11　新田:　[え↑:]　**無限定の質問**
13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ]か¥　ごめん hh　あ: そう° だったね.°
B と C が直面しているトラブルに対処する
15　新田:　あそび 行っ(0.2)たりしてんすか:_
認識可能な「からかい」
16　奥村:　.hh　　h(吐く息)　　す : : ぐらい=
17　　=かな::とか ha あ(h): [とは::　.h　　**「からかい」に対する何らかの反応**

この事例では、10 行目と 11 行目で無限定の質問が同時に産出されているという点が際立つ。無限定の質問が産出されること自体は、遡及的に 06 行目の奥村の発話に対して何らかの問題があったということを示すことができる。さらに、同時に産出されていることにより、その問題の何らかの性質を一層際立たせているだろう。もちろん、この同時に産出されること自体は、偶然であるかもしれない。

それでは、同時に無限定の質問を産出している師匠と新田は、どのような問題に直面しているのだろうか。二人が産出している無限定の質問と、06 行目のトラブル源が含まれている奥村の

発話との位置関係を確認する。

【事例 4-3 断片 2】

06　奥村:　.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh
07　　(0.3)
08　奥村:　He.h
09　　(.)
→10　師匠:　[ん↑:]
→11　新田:　[え↑:]

① 0.7 秒

上記の断片で①として示すように、06 行目の奥村の発話が終わった 07 行目から 09 行目までには合わせて 0.7 秒の間がある。つまり、トラブル源が含まれている発話が産出され 0.7 秒経過した後で、無限定の質問が同時産出されているのである。トラブル源と離れた位置で、聞き取りの問題があったと伝える方法として、「え?」より「何と言った?」というような、トラブルのタイプを特定する力がより強いものが必要であろう。たとえば、筆者のデータベースでは、トラブル源と離れた位置で「えっえっごめん,な-な-何をした人って」、「なに? えっなんつった? 」というような、2 つ以上の修復開始技法が用いられている。ここで、トラブル源と離れた位置で二人により同時に産出された無限定の質問は、聞き取りの問題ではないと伝えている。つまり、師匠と奥村が直面しているのは、発話の聞き取りよりも、発話の理解の問題または容認性の問題である、ということを示唆している。

では、そもそも 06 行目の奥村の発話にどのようなトラブル源が含まれているのだろうか。奥村の発話が産出されている連鎖上の位置とデザインを確認する。

奥村の発話は、04 行目の師匠の「えっ休みの日とか何やってるん? 」という質問に対する応答として産出されている。では、師匠の質問はどのような性質を持っているのだろうか。

【事例 4-3 断片 3】

01　　(0.7)
02　師匠:　((咳払い))
03　　(1.0)
04　師匠:　((咳払い)) (.)えっ休みの日とか何やってるん?
05　　(0.4)
06　奥村:　.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh
07　　#(0.3)

fig　　# 図 4-2
08　奥村:　He.h
09　　(.)

図 4-2 会話の参与者の身体向き

師匠は、ビデオカメラで録画されていることを考慮し、長い沈黙を埋めるように、WH 疑問を提示し、奥村に語ることを要求している。我々の常識から、師匠の語るこの要求が、「いつでも、どこでも、だれとでも話せる」浅い話題の振り方であるということがわかるだろう。ここで師匠が期待しているのは、沈黙を埋める「普通」の話題の提供であると理解できる。

しかしながら、このような浅い話題の振り方をした後の位置で、奥村は「普通」ではない話題[64]を提供している。「普通」ではない点は、「友人」ではなく「女の子」という言葉を選び、笑いながら「女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり」という発話の仕方から伺える。「女の子」という言葉を笑いながら産出することで、奥村は自分自身の発話を「笑っても良いもの」としてデザインし、師匠と新田の笑いを誘っている（Jefferson 1979）[65]。これに対し、二人とも奥村の笑いの誘いを受け入れていない。このとき師匠はその間にビールを持ち上げて飲んでいる。新田は身体と視線を奥村に向け、笑わずに話を聞く振る舞いをしている（図 4-2 参照）。要するに、二人とも奥村の笑いの誘いを受け入れていないのである。そして、0.3 秒（07 行目）の間の後、奥村は再び笑いを産出し（08 行目）二人の笑いを誘っている。しかし、師匠と新田も笑っていない（09 行目の 0.1 秒ぐらいの間と図 4-3 左参照）[66]。その後の位置で、師匠と新田は同時に無限定の質問を産出する。

---

[64] ビデオカメラで録画されている状況で、30 代後半の男性によって産出されている「女の子と遊びに行ったり」という発話は、「普通」の話題ではないように聞こえるだろう。
[65] Jefferson の笑いの誘いに関する議論は、第 3 章を参照されたい。
[66] 「休みの日とか何やってるん? 」と質問された奥村が、なぜ「女の子と遊び行ったりする」というような応答を産出するのか、また、なぜ「女の子と遊び行ったりする」を「笑っても良いもの」としてデザインするのかについては、明らかではない。ここで、奥村も長い沈黙を埋めることに志向し、自分を茶化して面白い話題を提供しようとしているのかもしれない。もしくは、三人の間で「女の子と遊び行ったりする」に関して何らかの共有知識を持っているのかもしれない。これらの 2 つの疑問は、筆者の分析に影響を与える可能性がある。しかし、ここで重要なのは、師匠と新田が無限定の質問を産出することで、遡及的に奥村の発話に何らかの問題があったことを示していることである。

【事例 4-3 断片 4】

08　奥村:　He.h

09　　(.)#

fig　　#図 4-3 左

10　師匠:　[ん↑:]

→ 11　新田:　[え↑:]#

fig　　#図 4-3

図 4-3 会話の参与者の身体の向き

無限定の質問が産出された時点の三人の身体の向きなどは、図 4-3 右に示す通りである。また、10 行目と 11 行目において、無限定の質問が産出される前後の師匠と新田の顔の表情については、図 4-4 と図 4-5 を参照されたい[67]。

図 4-4「ん↑:」が産出される前後の師匠の動作と顔の表情

図 4-5　「え↑:」が産出される前後の新田の顔の表情

師匠と新田の表情から、二人は聞き取りの問題に直面しているようには見えない[68]。実際、奥

[67] 本来ならば顔の表情をより明確に示す写真を提示するべきであるが、個人情報保護の問題があるため、ここではボカシを入れた似顔絵を提示している。以下、表情を提示する図は同様に取り扱う。

[68] 一般的に、他者開始修復、特に無限定の質問により開始された修復において、修復開始者は、発話（audible）の修

村もそのように理解している。奥村の反応を見てみる。

【事例 4-3 断片 5】

10　師匠:　［ん↑:］

11　新田:　［え↑:］

12　　(0.2)

13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ]か¥　ごめん hh　あ: そう°だったね.°

14　新田:　　[He　]

奥村は、13 行目（修復実行をするべき位置）でまず、自分が気づかなかったことに気づいたことを示す「あ(h)¥あ:そっか¥」と発話した後、「ごめん」と謝る。この「あ」は、Heritage (1984b) が「change-of-state token」と呼ぶもの[69]である (Endo 2018, Hayashi and Hayano 2018 参照)。つまり、奥村は、修復を実行するべき位置で、何らかの認識の変化を示した後、自分の先行する行為について二人に謝っている。「ごめん」という謝罪表現から、奥村は自分の先行する行為が不適切であることを認めていることがわかるだろう。要するに、奥村は師匠と新田が発話の聞き取り且つ理解の問題に直面していなかったことを理解している。さらに、笑いを含ませて「hh あ: そう°だったね.°」と発話する[70]。

ここで、奥村は師匠と新田が直面したトラブルに対処しているが、一般的な意味上の修復実行とはやや異なっている。むしろ、奥村は、トラブルの責任 (Robinson 2006, Kushida 2011 参照) が自分側にあることを認め、修復する必要がないことを示している。

一旦ここでまとめてみよう。師匠の「えっ休みの日とか何やってるん? 」(04 行目）という質問に対して、奥村は「.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h　.hh」（06 行目）と応答する。奥村の応答に潜在している逸脱は、師匠と新田により同時に産出されている無限定の質問により顕在化されている。さらに、無限定の質問の産出に伴うのは、ビールを飲んでいる師匠がびっくりしたようにグラスを口元から離して奥村を見つめること (図 4-5) と、新田が身体を奥村のほうに傾けて、ニヤニヤした顔の表情を示すこと（図 4-6）である。二人は

復開始に伴って何らかの身体的な資源（embodied displays of other-initiation of repair）も用いる。このことについて Oloff（2007: 31）は、以下のように述べている。In L1/monolingual interactions, the fundamental features of visible repair initiation include raising or contracting the eyebrows or orienting the gaze and/or the body towards the speaker of the trouble source turn.(…)In face-to face encounters, participants encounters, participants – mostly by gaze or head re-direction but also by eyebrow position or hand gesture – keep hold of their embodied repair initiation display until the repair is underway.

69 「chage-of-state-token」とは、その時、知識・情報・志向・認識の状態が変化したことを示すものである（Heritage 1984: 299)。英語では Oh が典型例である。

70 「そうだったね」という発話は、注 66 とつながり、いくつかの可能性を持つ。重要な点は、奥村は 13 行目で師匠と新田が直面していたトラブルに対処しているということである。

無限定の質問に身体の動きと顔の表情というリソースを加えることにより、現在直面しているのが発話の聞き取りの問題ではなく容認性の問題である、ということを際立たせている。実際、奥村もそのように理解し、13 行目で「あ(h)¥あ:そっか¥　ごめん hh あ:そう°だったね.°」と謝り、修復の実行はしない。では、13 行目の発話が終わる時点は、修復連鎖が閉じられて次の連鎖（話題）に進んでも良い位置になりうるが、実際、どのような展開になるだろうか。

【事例 4-3 断片 6】

13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ#]か¥　ごめん hh　あ: そう°だったね.°
14　新田:　　[He　#]
fig　　#図 4-6

図 4-6　13 行目の奥村の発話が産出されている時点での新田の表情

15　新田:　あ [そ] び　行っ[(0.2)　] たり[*してんすか:_]
16　奥村:　[.hh]　[h(吐く息)]　[す : :　]ぐらい=
新_nod　*(nod 小/4)----　②

図 4-7　15 行目の発話が産出されている時点での新田の表情

奥村が自分の発話に容認性の問題があったことを認めて謝っている時、新田はニヤニヤした顔の表情（図 4-6）を示し、さらに 15 行目で続けてそのようなやや深い意味を持っているような表情（図 4-7）を示しながら、敢えて 06 行目の奥村の発話をピックアップして Yes/No 質問の形

（「んですか」）で、「あそび行っ(0.2)たりしてんすか:_」と産出する。この新田の発話の「してんすか_」という部分に伴う 4 回の小さい頷き（②を参照）と、発話が下降調で産出されることで、奥村に確認を求めるというよりも、遡及的に自分が 11 行目で「え↑:」と産出している際に確かに聞き取りに問題がなかったことを証拠づけるように見える・聞こえる。さらに、単に「あそび行ったり」ではなく、敢えて 0.2 秒ほど伸ばして「あそび行っ（0.2）たり」というデザインがされることで、再び 06 行目の奥村の発話に現れた逸脱を際立たせる。そうすることにより、この場（ビデオカメラで撮られている状況）にふさわしくない発話（話題）をしてしまったことを認めて謝った奥村の決まりの悪さを際立たせていることから、一種の「からかい」として捉えることができるだろう。また、次の連鎖（話題）に進めようとしている奥村に向かって、敢えて、06 行目で語っている不適切なものを拾い上げて話題にすることで、「そんな話題を語ってもいいよ、聞いてあげるぞ」という新田のスタンスが見える。このような意味からも、15 行目の発話は一種の「からかい」に聞こえる。

奥村は「からかい」に聞こえる発話に対してどのような反応をするのかを見てみる。

【事例 4-3 断片 7】

13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ]か¥　ごめん hh　あ: そう°だったね.°
14　新田:　　[He　]
15　新田:　あ [そ] び 行っ[(0.2)　] たり[してんすか:_]
16　奥村:　　[.hh]　　[h(吐く息)]　　[す : :　　]ぐらい=
17　奥村:　=かな::とか ha あ(h): あとは::　.h

図 4-8　16-17 行目の発話が産出されている時点での奥村のしぐさ

奥村は、「あ: そう°だったね.°」(13 行目）の末尾の付近でたばこを持ち上げたが、しかし、17 行目の発話の末尾まで、図 4-8 に示しているように唇の近くで持っているにもかかわらず、吸ってはいない。つまり、16 行目の前半の吸気音と息を吐く音は、たばこを吸う時の音ではなく、気まずい時の息として理解可能である。また、15 行目の新田の発話が終わっていないところ

で、奥村は文法的なつながり（「行ったり」）を利用し、「す::ぐらいかな::とか」と産出している。さらに、音の伸びなどを利用し、発話権を保持しながら、「ha あ(h): あとは:: .h」と発話し、何らかのアイテムを追加しようとする。奥村の発話が産出されている位置、発話のデザインや笑い声及び顔の表情やしぐさから、奥村が決まりの悪さから逃げようとしていることが窺えるだろう。つまり、奥村の反応から、奥村は 15 行目の新田の発話を一種の「からかい」であると理解しているということがわかる。

この時、新田と同時に無限定の質問を産出した師匠は、どのような振る舞いをしているのだろうか。

【事例 4-3 断片 8】

15　新田:　あ［そ ］び 行っ［ (0.2)　］たり［してんすか:_ ］
16　奥村:　［.hh］　［h(吐く息)］　［ す ： ：　］ぐらい=
17　奥村:　=［かな:: #とか ha あ(h): あ［とは::　［.h
18　師匠:　［Hehehe # hh　hh　［ .HHE .H［HE hh　［HE］HA #HA　hh=
19　新田:　③　［° hh°　［HE HE　H［E ］
fig　#図 4-9 左　#図 4-9 右

図 4-9　全員の表情

15 行目の新田の発話に対して、師匠は 18 行目で笑い始め（③と図 4-9 左参照）、そしてその後、腹を抱えて笑う（図 4-9 右）。師匠の笑いからも分かるように、師匠は新田の発話を奥村への「情報の確認」ではなく、奥村への「からかい」として理解していることを示している

4.3.2 無限定の質問が順次に産出される事例

前節では無限定の質問が同時に産出される事例を分析した。本節では、前節の事例とやや異なり、無限定の質問が順次に産出される事例を検討する。

事例 4-4 は、4 人の大学生が「猫派か犬派か」について話している会話から抜粋したものである。それぞれの座る位置を、図 4-10 に示す。

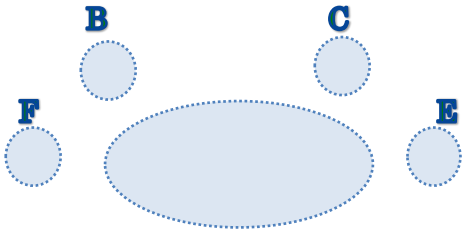

図 4-10 会話の参与者の座る位置

会話断片の前で、E と F は自分が犬派であることを表明しているが、B は自分が犬派でもない猫派でもないということを表明している。この時点で、C はまだ自分の立場を表明していない。B は、犬が嫌いな理由を説明した後、猫が嫌いな理由を語り、猫が話題になっているところである。事例 4-4 はそれに続くものである。

【事例 4-4: Sakura04 00:01:31】

01　C:　ね[こね:]
02　F:　　[引っか]かれ[た?] ((断片の直前「猫の爪に引っかかれた」との関連))
03　C:　　[お]れ猫アレルギーだもん.
04　　(0.3)
05　E:　うん.
06　B:　毛?
07　　(.)
08　E:　でも,俺[犬]アレルギー° だよ.°
09　C:　　[うん.] ((B に向け ; 06 行目への応答))
10　　(.)
→11　F:　↑え
12　　(.)
→13　C:　え?
14　　(0.7)
15　E:　くしゃみ出る(から)(0.3)うちの犬はわり[となんか,　　]

16　C:　　[>そりゃ違う<.]=
17　　=おまえの部屋が埃っぽいだ[け.]
18　E:　　[ち][:がうよ. =
19　B:　　[HEHe hehe he
20　F:　　[huh huh
21　E:　= [.HH ちゃう[毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん.
22　B:　　[huh huh　[hh
23　F:　　[huh huh　[hhh
24　C:　　[° huh huh huhuh °

事例 4-4 で分析の焦点となる部分の連鎖構造は、以下のようになる。

【事例 4-4 断片 1】

08　E:　でも,俺[犬　]アレルギー° だよ.°　　**トラブル源を含む発話**
→11　F:　↑え　　**無限定の質問**
→13　C:　え?　　**無限定の質問**
15　E:　くしゃみ出る(から)(0.3)うちの犬はわりとなんか,
B と C が直面しているトラブルに対処する
16・17　C:　>そりゃ違う<.おまえのへやが埃っぽいだけ.
認識可能な「からかい」
18　E:　ち:がうよ.
21　　.HH ちゃう毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん.
「からかい」に対する何らかの反応

まず、08 行目の E の発話の産出位置と組み立てを見る。01・03 行目で、まだ犬派か猫派か表明していない C は、「ねこね: 俺猫アレルギーだもん.」と発話する。一般的な常識から、「猫アレルギーだもん.」という発話により、C が猫派ではない可能性が浮上する。つまり、「○○アレルギーであるので、○○派ではない」という関係は、デフォルト的なものである。しかし、犬派であることを表明した E は、「でも」と言い始め、C の発話と同じフォーマットを用い、「俺犬アレルギー° だよ.° 」(08 行目) と発話する。E の発話に現れている「犬アレルギーであるが、犬派である」という関係は、デフォルト的なものと比べると一種の逸脱したものとして聞こえるだろう。

E の発話の後、F は「↑え」(11 行目) と、C は「え? 」(13 行目) と発話することにより修復

を開始する[71]。修復の連鎖が生じると、その会話の中でそれまでに起きたCの「猫アレルギー」に関する語りが中断され[72]、08行目のEの「でも,俺犬アレルギー°だよ.°」という発話に対する何らかのトラブルに対処することを相互行為の当面の課題として前面に出している。では、FとCはどのタイプのトラブルに直面しているのだろうか。

【事例 4-4 断片 2】

```
   08   E:  でも,俺[ 犬  ]*アレル#ギー°だよ.°
   09   C:          [うん.] ((Bに向け ; 06行目への応答))
   C_頭              |頷きながらEのほうへ変える
   C_視線                    * (E)------------>
   fig                              #図 4-11
   ..................................................
   10       ( . )
   11   F:  ↑え          ① 0.5秒
   12       ( . )
   ..................................................
→  13   C:  #え?
   fig      #図 4-12
   fig      #図 4-13
```

Eの発話が産出されて0.1秒の後に、Fは、聞き取りの問題があると示すために使われる無限定の質問の「↑え」(11行目)を産出することから、Eの発話が聞き取れなかった可能性もないわけではない。Fの「↑え」が産出されたところまで、EにはFが聞き取りの問題に直面していると思っていた可能性がある。

仮にFが聞き取りの問題に直面していたとしたら、CはFの「↑え」の後の位置で、もう一度聞き取りの問題に直面していると伝える必要はないだろう。Cは08行目のトラブル源を含む発話が産出されて0.5秒(①を参照)の後の位置、つまり、トラブル源から離れた位置で、「え? 」を産出している。ここで、前節の事例4-3と同じく、トラブル源と離れた位置で「え?」を産出することにより、今直面しているのが聞き取りの問題ではないと伝えている。聞き取りの問題があったことを示す可能性があるFの「↑え」の後のスペースで、Eに十分な修復の時間を与えて

---

[71] ここで修復が生じる可能性の1つは、「犬アレルギー」という診断自体に対する疑いである。「犬アレルギー」自体は、もちろん存在しているが、重要なのは参与者にとってこの診断を聞いたことがあるかどうか、ということである。Cの「猫アレルギー」という診断に対して、Bは「毛? 」(06行目)と質問する。Bは、猫アレルギー自体に対する疑いではなく、猫アレルギーの原因について質問する。しかし、「犬アレルギー」に対する「え? 」というような反応は、「犬アレルギー」という診断自体に対する疑いであるように聞こえる。

[72] 「おれ猫アレルギーだもん」というCの発話は、一種の語りの前置きに聞こえる。

いる。このスペースを活用し、もう一度無限定の質問を産出することにより、自分自身が直面しているのは聞き取りの問題というよりも理解または容認性に関わる問題であることを際立たせている。

さらに、C の顔の表情変化（図 4-11 と図 4-12 参照）からは、C が「あなたは何と言ったの? 」というような聞き取りの問題に直面していることは窺えない。むしろ、「うそでしょ? 」や「あなたは何を言っているの.」という批判的な反応に読み取れる。

図 4-11 会話の参与者の身体の向きと C の顔の表情

図 4-12 会話の参与者の身体の向きと C の顔の表情

さらに、C の「え? 」が産出されている時の B の表情（図 4-13）からも、聞き取りの問題が生じていることは窺えない。

図 4-13　13 行目の「え? 」の時点の B の表情

参与者の表情から分析したものは、決して筆者の主観的な判断ではない。E 自身もそう理解している。では、E は無限定の質問で開始した修復にどのように反応しているのかを見てみよう。

【事例 4-4 断片 3】

13　C:　え?

→14　　(0.7)

C_視線　(E)

B_視線　(E)

F_視線　(E)

E_視線　(B)

15　E:　くしゃみ出る(から)(0.3)うちの犬はわり[となんか,　　]

C の「え? 」の後、0.7 秒（14 行目）のやや長い間が生じている。この 0.7 秒の間で、三人とも E を見つめ、E の修復を待っている。そして、注目されている E は自分が産出したトラブル源を含む順番を繰り返さずに、「くしゃみ出る(から)」という理由節を産出する。ここで、トラブル源を含む順番を繰り返さないことから、E 自身が F と C は聞き取りの問題に直面しているのではないと理解していることが分かる。この「くしゃみ出る(から)」という E 自身の体の状態に言及する理由節は、他の参与者に疑われた「犬アレルギー」の強い根拠になりうる。このあとの、「うちの犬はわりとなんか,」という発話は、E 自身は「犬アレルギーでありながら、犬を飼っている犬派である」という事実に対する弁明になると考えられる。

次に、E への「からかい」として理解できる 16・17 行目の C の「>そりゃ違う.<お前の部屋が埃っぽいだけ.」という発話を分析する。

【事例 4-4 断片 4】

15　E:　くしゃみ出る(から)(0.3)うちの犬はわり[となんか,　　]
16　C:　　[>そりゃ違う<.]=
17　　=おまえの部屋が埃っぽいだ[け.]
18　E:　　[ち][:がうよ. =
19　B:　　[HEHe hehe he
20　F:　　[huh huh
21　E:　= [.HH ちゃう[毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん.
22　B:　　[huh huh　[hh
23　F:　　[huh huh　[hhh
24　C:　　[° huh huh huhuh °

まず、この C の発話は、E の「うちの犬はわりとなんか」(15 行目) という、発話の途中で割り込む形で産出されている。なぜ C は E の発話の途中で割り込むのだろうか。そして、割り込むこと自体はどのような効果を持っているのだろうか。もう一度、15 行目における E の発話の産出位置を確認する。

この 15 行目の E の発話は、F と C が無限定の質問で開始した修復連鎖の中の修復の実行をすべき位置で産出されている。E は修復の実行をすべき位置で、まず「くしゃみ出る(から)」という理由節を産出し、修復の実行を行なっている。この後、0.3 秒の間が生じているが、E はジェスチャーで発話を続けようと示しながら、「うちの犬はわりとなんか」と産出している。つまり、E の修復の実行がまだ続いているところで、C に割り込まれているのである。

C が早口で「>そりゃ違う.<」(16 行目) と発話し E の発話に割り込むことにより、C は E が言おうとしていることを制している。さらに、「お前の部屋がほこりっぽいだけ」(17 行目) と発話する。この発話は、E 自身が言及した「犬アレルギー」の強い根拠になりうる「くしゃみ出る」の原因を、E の部屋の汚さに帰属させている。要するに、C は E の修復の実行を無効にしているのである。この点から C の発話は挑発的な行為になりうる。さらに、「おまえの部屋が埃っぽい」という、E の所有物に対するネガティブな評価を、「だけ」というとりたて助詞を伴って産出することにより、一層挑発的に聞こえる。

この挑発的な行為は、E への「からかい」に聞こえる。その証拠に、E が大きい声で「ち:がうよ.」(18 行目) と否定し、「.HH ちゃう毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん」(21 行目) と理由を述べている。ここで E は「C の「からかい」に抵抗を示しているのである。このとき他の参与者である B と F は、笑いで C が E をからかっているということに理解を示しいている (19・20・22・23 行目)。加えて、からかう側自身もくすりと笑っている (24 行目)。

4.4 考察

本節では、前節で分析した結果をまとめた上で考察を行う。前節では、以下のような会話連鎖で、「からかい」が行われる前に産出された無限定の質問が、どのような相互行為上の仕事をしているのかについて、分析を行った。

01　話者 A：　トラブル源を含む発話
02　話者 B：　「え? 」、「ん? 」、「なに? 」などの無限定の質問
03　話者 C：　「え? 」、「ん? 」、「なに? 」などの無限定の質問
　　（(話者 B と C が同時にまたは順次に無限定の質問を産出する)）
04　話者 A：　B と C が直面しているトラブルに対処する
05　話者 C：　認識可能な「からかい」
06　話者 A：　「からかい」に対する何らかの反応

一般的に、無限定の質問は、参与者が聞き取りの問題に直面している時に用いる 1 つのプラクティスである。しかし、前節で分析したように、修復開始者（話者 B と C）は無限定の質問を産出することで、先行発話（01 行目）に対して何らかの問題があったことを示しているが、トラブル源と離れた位置を利用することで、それが聞き取りの問題ではないことも伝えている。さらに、顔の表情の微細な特徴により、修復開始者が直面しているのは、発話の理解の問題よりも容認性の問題の可能性が高いと判断できる。

要するに、参与者は「からかい」を行う前に、無限定の質問を産出することで先行発話に現れた容認性の問題、つまり、何らかの規範からの逸脱を連鎖上の焦点として際立たせている。

では、なぜ聞き取りに問題がないにもかかわらず、参与者はあえて、先行発話に聞き取りの問題があったかのように無限定の質問を産出しているのだろうか。

既に 4.2 節で述べたが、「容認性の問題の解決になりそうなものを提示するということは、聞き取りの問題あるいは理解の問題の解決になりそうなものがしないような方法で、相手の潜在的不適切さを暴露することになる」（Svennevig 2008: 339）。先行発話の容認問題に対し、しばしば聞き取りの問題があったことと示すために使われている無限定の質問を用いることで、表面上自分の聞き取りに問題があったかのように示すことができる。さらに、無限定の質問で開始した修復連鎖では、「どのような修復を実行するのが適切なのかは、かなりの程度まで修復の実行者に委ねられることになる」（串田・平本・林 2017: 206）という性質があるために、「言われたことがより理解しやすく、そしておそらくもっと容認されるようにするために、先行話者がそれを調整できるような場所を提供することにある」（Schegloff 2007: 151）。そうすることで、デリケートな問題の発生を回避できるだろう。

無限定の質問にせよ他の修復開始技法にせよ、他者開始修復自体は、相互行為を先に進めるために参与者が互いの行為に対する理解が共有できていない時の対処方法である（城 2013: 25 と高木・細田・森田 2016: 183 参照）。相互行為としての「からかい」を行うのも同じである。Drew（1987）で指摘されているように、「からかい」のターゲットになっているものは、からかわれる側にしてみれば目立たない、普通の行為やカテゴリーである。しかし、「からかい」発話の中で、それを逸脱したものとして捉え、相手をからかっている。会話の参与者の間で、どの人・どの点をターゲットにしているのか、なぜターゲットにしたものが「遊戯性」と「挑発性」を持っているのか、などの「理解」が共有されなければ、その発話は「からかい」として認識できないだろう。

この「理解」が共有されるために、会話の参与者はしばしば他者開始修復で、自分の聞き取りに問題がないかどうか、発話に対する自分が理解したものと相手が発した意味との間に齟齬がないかどうか、を確認する。もし自分の聞き取り・理解に問題があれば、おそらく次の段階で「からかい」を行わないだろう。

一方、発話に対する聞き取り・理解に問題がなく、容認に問題が生じた場合、他者開始修復を利用することで、その容認の問題（何らかの規範からの逸脱）を連鎖上の焦点として際立たせている。次の段階で、容認の問題そのもの（トラブル源）（事例 4-3）、または容認問題に対する修復の実行（事例 4-4）をターゲットにし、相手をからかう。このような「からかい」は「相手の逸脱の顕在化であり、同時に、それをお互いに笑い合うことで、その場に生じた緊張と対立を緩和するものである」（初鹿野・岩田 2017: 39）。

4.5 おわりに

本章では、参与者は「からかい」を行う前に、しばしばどのような「準備」をするのかという疑問から出発し、無限定の質問という他者修復開始技法に着目して考察を行った。具体的に、二人より同時にまたは順次に無限定の質問が産出される事例に対する質的分析をした。参与者は「からかい」を行う前に、無限定の質問を産出することで先行発話に現れた容認性の問題、つまり、何らかの規範から逸脱したものを連鎖上の焦点として際立たせていた。この「準備」ができた後に、容認の問題そのものまたは容認の問題に対する修復の実行をターゲットにし、相手をからかうということが分かった。

第 5 章 「からかい」の協同構築
―「観衆」の振る舞いに着目して―

5.1 はじめに

「からかい」の研究は、からかう側とからかわれる側の振る舞いを中心に展開されてきている。しかしながら、相互行為としての「からかい」の協同構築には、からかう側とからかわれる側以外に、その場にいる参与者も大きな影響を与えていると考えられる。

話者が、ある参与者に向けて、目の前にいる別の参与者に言及した発話は、言及対象への「からかい」として聞こえるということは既に多くの先行研究で指摘されている（西阪 2001、初鹿野・岩田 2008、安井 2017、2019）。これは、からかう側とからかわれる側以外の参与者の存在が「からかい」の生起に影響を与えることを示したものである[73]。では、このからかう側とからかわれる側以外の参与者は、「からかい」の協同構築にどのような影響を与えているのだろうか。この点については、先行研究でもまだ十分に光を当てられていない。

本章では、からかう側とからかわれる側以外の参与者を観衆（audience）と呼ぶ。従来の「からかい」の研究では、観衆は発話を聞く者である「聞き手（hearer）」として扱われ、その反応はある発話（行為）が「からかい」かどうかを判断する際の指標の 1 つとして使われている（Keltner et al. 2001: 230-231 Table1 参照）。しかし、多人数会話では複数の「聞き手」がいる。そのため、「聞き手」として一括りにして扱うと、それぞれの「参与地位」（Goffman1981）（2.3 節を参照されたい）を見失う可能性がある。「からかい」連鎖の中で、「観衆」がどのような「参与地位」で参加しているのかについては、次節で論じる。

本章の研究目的を述べる前に、まず本章の研究対象を明確にする。本章では、上記で挙げた西阪（2001）、初鹿野・岩田（2008）、安井（2017、2019）などの研究で分析された、【からかう側が「からかい」を達成するために、観衆に向けて目の前にいる参与者（からかわれる側）に言及するという行為】に関心を寄せる。この時の「観衆」は、Keltner et al.（2001）と次節で挙げる Pawluk（1989）で述べられている観衆、または一般的な観衆という用語よりも狭い捉え方である。 これらは「」 を用いてで区別することとする。

本章の目的は、この「観衆」の振る舞いがいかに「からかい」の協同構築に影響を与えているのかを明らかにすることである。以下、最初に本章の議論に関わる主要な先行研究を概観する（5.2 節）。次に、具体的な会話事例の分析を行う（5.3 節）。最後に、考察を行う（5.4 節）。

---

[73] 本論文で分析した会話断片は、全て 3 人以上の多人数会話からの抜粋である。しかし、筆者がデータを集めた際に 2 人の会話にも注目したが、「からかい」が生じたものは非常に少なかった。この点からも、からかう側とからかわれる側以外の誰かの存在は、「からかい」の生起に影響を与えていると言える。

5.2「観衆」の参与役割と反応

本節では、「からかい」連鎖における「観衆」の参与役割と反応に関する先行研究を概観する。

まず、「観衆」の参与役割について述べる。一般的には、図 5-1 に示すように、「からかい」の発話（utterance）の受け手とその発話に伝わる「からかい」の行為（action）の受け手は同じ者であり、つまり、両方ともからかわれる側である。この場合、観衆は、「傍参与者」(Goffman1981) として「からかい」連鎖に参加している。

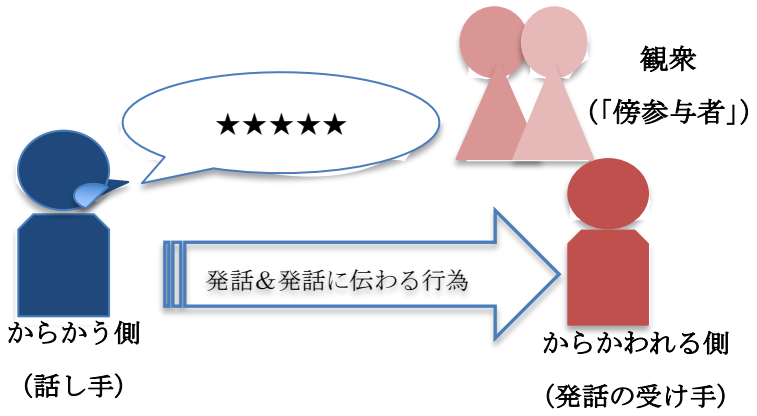

図 5-1　一般的な「からかい」の伝達モデル

一方、「からかい」の発話とその発話に伝わる「からかい」の行為の受け手が異なっている場合もある。図 5-2 に示すように、「からかい」の発話は、からかわれる側ではなく「観衆」に向けて産出される。この場合、「観衆」はその「からかい」発話の「受け手 (addressee)」(Goffman1981) であり、からかわれる側は「からかい」の発話の「間接的な標的 (indirect target)」(Levison1987) である。

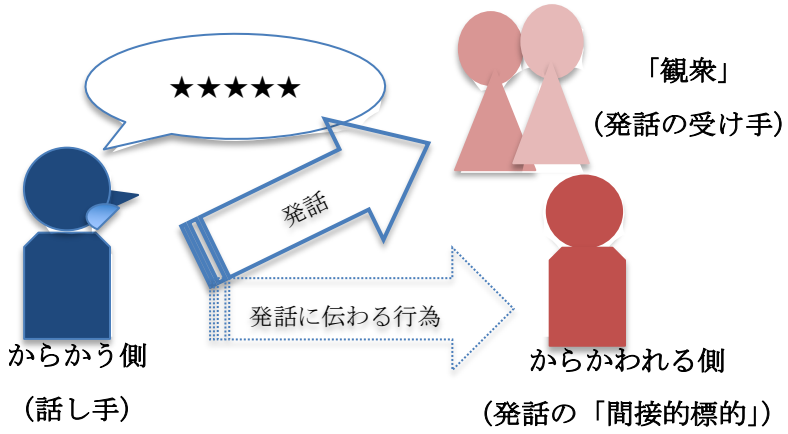

図 5-2　　本章における「からかい」の伝達モデル

たとえば、以下の先行研究の事例を見てみよう。

【事例 5-1: 初鹿野・岩田 2008: 126 事例 4 行番号改変】

01　エガワ:　あの, み-みは-三上舞っているじゃない >で s’ か=最近<
02　　なん[か::>よく]テレビ出る<
03　ドイ　:　　[あ::::.　]
04　エガワ:　じゃない d’ s’ [か::
05　ドイ　:　　[ん::.
06　エガワ:　あれも　もうボ-ボータレなん’ で s’ よね:¿
07　フジイ:　>ねね<こいつ::-のなんか情報源ってアオイ芸能[とか週刊ゴシッ p]とか
→08　ドイ　:　　[HH　Ahh　Ahh　]
09　フジイ:　そん’ な もんだか [ら:
10　エガワ:　　[いや:::あ:::[の:::あれ ま]
11　フジイ:　　[yah　hanhohh]
12　エガワ:　それもあるん’ で s’ けど: い[やけど,
13　フジイ:　　[ん:.
14　エガワ:　それ- そ-あそこらへんは >で s（’ ね）<雑誌は　書けないん’ ’ すよ.
15　　(0.4)

事例 5-1 は、友人関係にある 3 人の男性の会話である。06 行目でエガワが芸能界について自分の知っている話を披露する。その直後で、フジイがドイに宛ててエガワの話の情報源について述べている（07・09 行目）。フジイの発話内容は、ドイに向けられており、エガワの話の情報源がゴシップ記事ばかり載せるような大衆紙であるという推測である。そして、それを伝えることで、ドイに対して、エガワの話をまともにとりあわないようにという「忠告」を行なっている。「忠告」という行為は、「申し出」や「依頼」と同様、隣接ペアの FPP であると考えられる。初鹿野・岩田は、まるでエガワが提示する情報の信憑性に疑問があり、エガワの話を聞く意味がなかったと言っているようなものとして、フジイの発話内容を記述している。実際、フジイの発話（07・09 行目）はエガワへの「からかい」として聞こえる。詳細な分析は初鹿野・岩田（2008: 126-129）を参照されたい。

本章で取り扱う事例は、この事例の構造と似ているが、「観衆」の振る舞いに違いがある。上記の事例では、「観衆」であるドイが笑っていること（08 行目）から、ドイはフジイの発話が行なっている行為（「からかい」）に対する理解を示していると言える。観衆の笑いという反応については、「からかい」に関する分析をしている先行研究の事例では、「からかい」に理解を示しており、

からかう側のスタンスへの「寄り添う態度」を示す、というような記述が多い。

一方で、Pawluk（1989）の記述によると、観衆はからかう側に「寄り添わない態度」を示すこともありうる。Pawluk が述べた観衆とからかわれる側の反応は、以下の表 5-1 に示す通りである。ここでのコメンタリーは、「からかい」の発話として理解しても良い。

表 5-1　からかわれる側と観衆の反応[74]

	パターンⅠ	パターンⅡ	パターンⅢ	パターンⅣ
からかわれる側	コメンタリーを受け入れるかそれに従う	コメンタリーを拒絶する	コメンタリーを受け入れる	コメンタリーを拒絶する
観衆	コメンタリーを受け入れるかそれに従う	コメンタリーを拒絶する	コメンタリーを拒絶する	コメンタリーを受け入れる

本章の関心の 1 つは、笑いなどの反応で表す「態度の寄り添い」だけではなく、「観衆」の振る舞いがいかに「からかい」の協同構築に貢献するのか、ということにもある。さらに、「観衆」はどのような振る舞いをすることで、からかう側のスタンスへ寄り添わない態度を示しているのだろうか。いずれにせよ、相互行為としての「からかい」の協同構築には、「観衆」の振る舞いが重要であることを強調したい。

繰り返し述べるが、本章で主に注目するのは、「からかい」発話と行為の受け手が異なっている場合である。ここで注意したいのは、会話の参与枠組みは常に相互行為の中で変化していることである。すなわち、会話における発話や行為の受け手、「観衆」も常に変動する。そのため、本章における「観衆」は“メイン”の「からかい」[75]が産出された段階で決められたものに定めた上で、その役割を分析する。これはあくまでも分析・記述の便宜上の呼び方である。

5.3 分析

本節では、2 つの事例を検討する。1 つは、「観衆」がからかう側のスタンスに寄り添いつつ、からかう側と協同的に「からかい」を構築する事例である（5.3.1 節）。もう 1 つは、「観衆」がからかう側のスタンスへ寄り添わない態度を示しているものの、自分の振る舞いがからかう側に

[74] Pawluk（1989）をもとに筆者が作成した表である。
[75] “メイン”の「からかい」とは、筆者がどの参与者を「観衆」と呼ぶか、「からかい」発話と行為の受け手が異なるかどうかを判断する際に用いた用語である。具体的には、「からかい」を投射する行為（「からかい」の前置きとして理解しても良い）や、さらなる「からかい」（1 回目の「からかい」の後の「からかい」）と対照して呼んでいる。

利用され、結果的に「からかい」の協同構築になっている事例である（5.3.2 節）。

5.3.1 からかう側のスタンスに寄り添いつつ「からかい」を協同構築している事例

事例 5-2 は、萌、佐久、玲奈が喫茶店で収録した会話から抜粋したものである。座る位置は図 5-3 に示す通りである。会話者の関係は以下の通りである。まず、萌と佐久は高校時代の友人である。そして、萌と玲奈は共通の知り合いを介して知り合った友人である。ここで注意したいのは、玲奈と佐久は親しい友人ではないと見られることである。

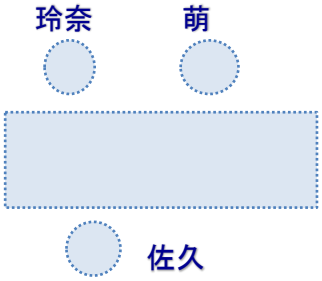

図 5-3 事例 5-2 における各参与者の座る位置

事例 5-2 はビデオデータが始まって 5 秒ほどのもので、直前の状況については詳しくわからない。分析と関わりがある部分は 16 行目の佐久の発話からであるが、16 行目の発話を理解するために、その前の状況を説明する。

佐久は 03 行目で、萌に向けて直前の話題と関連する「経堂」という場所に言及する。萌はすぐに反応しない（05 行目の 0.2 秒の沈黙）ため、佐久は「あのガオカ((千歳丘高校の略称))のすぐ隣じゃん, ね:.」[76]（06 行目）と情報を付け加えて萌に同意を求める。萌が確認した（「あそうそうそうそう.」07 行目）の後、「経堂」が話題になっている。そして、佐久は玲奈に「経堂」と関連のある過去（彼女の高校時代）の情報を提供する（16、21、22 行目）。佐久が情報を提供している途中で、萌はその発話に割り込み、挑発的かつ遊戯的に佐久が提供した情報を部分的に訂正する（24 行目）。そして、萌は、自分がなぜ 24 行目の行為をしたかという説明を産出する（29、31、34 行目）。その萌の説明には、高校時代の自分が「真面目だった」（29 行目）こと、佐久が「体操部」（31 行目）に所属しており、「体操部ちょっと不良だったんで」（34 行目）という情報が含まれている。目の前にいる佐久が所属していた「体操部」に「ちょっと不良だった」というようなネガティヴな評価を玲奈に向けて産出するのは、佐久への「からかい」に聞こえる（西阪 2001、初鹿野・岩田 2008、安井 2017、 2019 参照）。

[76] 「ガオカ」は東京都立千歳丘（ちとせがおか）高等学校の略称である。前後の文脈から萌と佐久がそこに通っていたということがわかる。学校の近くにある駅の名前は千歳船橋で、隣の駅は経堂である。

【事例 5-2: CEJC-K001_003b 00:00:05】

01 玲奈: そうかい,いざとなったらその手がある[ってことなのね ?][そうだ]ね:。
02 萌 : [そう, そうなんです][よ : .]
03 佐久: 経[堂ってでも]あれじゃん.
04 玲奈: [う:ん.]((01 行目の自分の発話の続き))
05 (0.2)
06 佐久: あのガオカ((千歳丘高校の略称))のす[ぐ隣じゃん,[ね:.]
07 萌 : [あそうそう [そう]そう.]
08 玲奈: [経堂]ってい] =
09 =いとこでしょ? [あれな-目黒だっけ?][° メ[ロ°]
10 萌 : [でも経堂いい:で:す][えっ[とね世田] 谷=
11 佐久: [世田谷:.]
12 萌 : =[で [す.]
13 玲奈: [>世[田谷,そう]そうそうそう.<
14 佐久: [うん.]
15 玲奈: あれはあの:そうだね, 結構おハイソな=
16 佐久: うん.[なんかあたしたちが]行ってた高校の: [とな]りの駅で:,
17 玲奈: [ところだよね? そう] [うん.]
18 (.)
19 玲奈: あ [そ う : ^ な ん] だ.]
20 萌 : [そ う : .]
21 佐久: [よく行っ てたんですよ.]むか]し::=
22 佐久: =[とた [ぶんだいぶ]違うと思 い ま[す.]
23 玲奈: [へ [: _] [° う] ん : °]
24 萌 : [.hh] ¥あたしは行って[な][かった]よ [:?] ¥
25 佐久: [あ]
26 (.)
27 佐久: [あっそう?]
→28 玲奈: [お : ?]
29 萌 : あたし真面目だったん[で:,
→30 玲奈: [お : ↑ :
31 萌 : [huhhuh [huh [.hh] [体操部: (.) hehe] [.hhu hh]=

32　佐久:　[えっ? あた [し:][そっ]ちの[カラオケ屋さんとか,]　[.ha そう　]
→33　玲奈:　[お:?]　[あお　↑:　]
34　萌　:　= [hh 体操][部][ちょっと不良だっ(h)] [たん(h) [で(h):.]　hhh]
35　佐久:　[.HHu　][体　][操　部　:.　]　[hhh　]　HAHA]
→36　玲奈:　[意外に　]　] [ちょっと[(ブレ)]　huh]=
→37　玲奈:　= [.hh ちょっと不良だったの[ね?　]
38　萌　:　[hhh　huh　.HH　[そう.]　=
39　佐久:　[HAh　hhh　hh　[hh　]
40　萌　:　=[不良グループだったん[で すよ:. huhuh　huh　]heh]
41　佐久:　[.HHHU　Huhu　[違 う よ 不　良 じゃ な　] く.]
→42　玲奈:　[>不良グループだったの,実は <]
→43　玲奈:　[な [:ん だ:.]
44　萌　:　[hh [hhhh hh] [Hhh　[h h h]　HAhHh　[hh　Hh　hh]　hh　]
45　佐久:　[heHA HA]　[h ち [がうよ.]
→46　玲奈:　[あなた]こうさしてた[人　?　]
47　佐久:　[違(h)うちゃう]ちゃあ]=
48　佐久:　=[さ(h)[して(h)ないちょっ違. hh ちが]ちが. [ちょっと: ブーちょっ]と:=
49　萌　:　[hh　[hhhh　hhh　hhh　hh　hh　]　hh　[hhh　hhh　hh]
→50　玲奈:　[あ : の: パステルカラーの]　[シャーペンを,うん.]
51　萌　:　=[うん.
52　玲奈:　[うん.
53　(0.2)
54　佐久 :　あの:ガストみたいなとこに[たまってた(h)[だ(h)け.]
55　萌:　[hhh　[huh　huh]
→56　玲奈:　[あ　:,]
→57　不良だ[な:.]
58　萌　:　[hh][huhuh　huh　]
59　佐久:　[塾][もい(h)か(h)ず.]
→60　玲奈:　[まあなんていかん[わね:?]　[Hhhhh
61　萌　:　[hhhh　hh　hh　[hhhhh] hhh　[hhhh
62　佐久:　[hhhh]　hah　[hhh

この事例で、“メイン”の「からかい」として分析するのは、34 行目と 40 行目の発話（網か

けの部分）である、ここでの記述の焦点となるのは、この“メイン”の「からかい」が産出される前後の玲奈の振る舞いである。具体的には、萌が行なっている「からかいの前置き」が連鎖上の焦点となった後、玲奈がどのような振る舞いをしているか、その振る舞いによりどのようなスタンスを示しているか、を最初に記述する（5.3.1.1 節）。次に、玲奈がいかに協同的に萌の行なっている「からかい」を構築するのかを分析する（5.3.1.2 節）。最後に、佐久と親しくない玲奈は、本来佐久への「からかい」をしにくいにもかかわらず、萌の「からかい」を踏まえてその「からかい」をいかにしてエスカレートさせているかということを述べる（5.3.1.3 節）。

5.3.1.1「からかい」が産出されるまでの経緯と「観衆」の絶妙なスタンス

玲奈の振る舞いを記述する前に、「からかい」が産出されている過程を見てみる。

まず、16 行目から 28 行目までのやりとりを検討する。ここで鍵になるのは、24 行目の萌の「￥あたしは行ってなかったよ:? ￥」という発話である。後ほど詳しく分析するが、萌のこの発話は、「挑発性」と「遊戯性」を持っており、ある意味で一種の「からかい」としても理解可能である。しかしながら、「からかい」としての情報がやや足りないため、ここではひとまず萌の 24 行目の発話を「からかいの前置き」と呼ぶ。

重要なのは、参与者たちがこの発話をどのように取り扱うかである。具体的には、24 行目の萌の発話のデザインと産出される位置、及び発話に伴う萌の表情・身振りを記述する。

【事例 5-2 断片 1: 16 行目から 28 行目まで】

16　佐久:　うん. [*なんかあたしたちが]@行ってた高校の: [とな]りの駅で:,

17　玲奈:　　[ところだよね?　そう]　　[うん.]

萌_nod　　↑大 nod/1;小 nod/1

佐_視線　　*（玲）----------＞＞

玲_視線　　@(佐) ----------＞＞

図 5-4　16 行目の佐久の視線・身振り

18　　(.)

19　玲奈:　+あ［そ　う　：^　　］+な　　ん　　だ.］

20　萌　：　　［そ　　う　：.　　］

21　佐久:　　［よく行ってたんですよ.］む　　か　　］し::=

萌_視線　　+（玲）----------+(佐)---------->>

萌_nod　　|大 nod/1

22　佐久:　=［とた　［ぶんだいぶ］違*うと思　い @ま［す.　　］

23　玲奈:　［へ　　［：_　　］　　［°う　］:ん°　］

24　萌　：　　［.hh　　］¥あたしはいっ@て［な　　］［かった］［よ　］:?　¥ @

25　佐久:　　［あ,］

佐_視線　　>>-- *（萌）---------->>

玲_視線　　>>-- @（萌）----------@

図 5-5　24 行目の萌の表情・身振り

26　　（.）

27　佐久:　［@あっそう?　］

28　玲奈:　［@ お：　?　］

玲_視線　　>>--@(佐)--->>

図 5-6　27、28 行目の佐久・玲奈の表情・身振り

24 行目までのやりとりにおいて佐久は、話題になっている「経堂」に関する過去（彼女の高校

時代）の情報を玲奈に提供している（16、20、22 行目）。佐久は玲奈にも理解できるように、06 行目の「ガオカ」を「あたしたちが行ってた高校」（16 行目）に置き換えている（16 行目）。この言葉の置き換えは、佐久が萌と自分の間を繰り返して指す手振り（図 5-4）を伴っている。「あたしたち」（16 行目）という発話は佐久の手振りにより、佐久は萌を同じ成員のカテゴリー[77]（同じ（ガオカの）高校の生徒）の担い手としてデザインしている。そして、「よく行ってたんですよ.」（21 行目）という述部を産出する。この 21 行目の発話には主語がないため、「いったい誰がよく行っていたのか」ということが曖昧になっている。しかし、この発話は 16 行目から続く発話であることから、主語は「あたしたち」（16 行目）であることが推測できる。そして、参与者は佐久の手振り（図 5-6）により、「あたしたち」（16 行目）が萌を含んでいると理解できるだろう。つまり、萌を含む「（ガオカの）高校生」というカテゴリーに結びついた活動（category-bound activity）[78]（Sacks 1972）に、「（経堂）よく行ってたんです」が挙げられている。

21 行目までに佐久が描写している「経堂」について、萌は一回大きく頷き、情報の受け止めを示している。つまり、佐久の発話は連鎖上特に問題（発話の産出問題・聞き取り問題・理解の問題）になっていないと分かる。それにもかかわらず、萌は、佐久の「むかし::とたぶんだいぶ違うと思います.」（20・22 行目）という発話が産出されている途中で、「¥あたしは行ってなかったよ:? ¥」（24 行目）と発話する。

この萌の発話の連鎖上の位置とデザインを見てみよう。16 行目から 22 行目まで、萌は「傍参与者」（Goffman 1981）として会話に参加している。24 行目で佐久の発話に割り込み、「話し手（speaker）」として参加する。傍参与者が現在の話し手の発話に割り込む手法について安井（2017: 170）は、笑いや間の挿入などで参与者から注意を引くほかに、受け手からの反応を要請する形に発話をデザインし、受け手から反応を引き出すことで新たな連鎖を開始させると指摘している。安井の指摘を基に考えると、24 行目の萌の行為は、現在やりとりをしている佐久と玲奈の注意を引き、受け手である佐久からの反応を要請していると言えるだろう。具体的には、萌は佐久に向けて、息を吸い（.hh のマーク）、体を玲奈に寄せて右手を胸の前で左右に振りながら（図 5-5）、笑いを含んだ発話を産出している。この萌の目立った身体の動きと声の性質（¥のマー

---

77 「成員カテゴリー」とは、人の種類を表す言葉もしくはそれによって表される概念のことである。「カテゴリー化」とは、何らかの成員カテゴリーを特定の人間に適用することである。カテゴリー化は、大きく 2 種類の仕方で行われうる。第 1 に、カテゴリー化は、カテゴリー名を用いて発話を組み立てることを通じて行われる。第 2 に、カテゴリー化は、カテゴリー名を用いることなしにも行われうる。それは、カテゴリーと特定の述部との間に存在する規範的結びつきを利用することによってである（串田・平本・林 2017: 243-245）。

78 カテゴリーに結びついた活動という概念について、串田・平本・林（2017: 250-256）は「社会の成員の常識的知識の中では、特定のカテゴリーには一定の活動が規範的に結びつけられている。このことをサックスは『カテゴリーに結びついた活動』と呼んだ。たとえば、『子ども』というカテゴリーには、遊ぶといった活動が結びついている。また、カテゴリーに規範的結びついているのは、活動だけではない。たとえば、『大学生』というカテゴリーには勉強をするという行為だけではなく、授業を受けることができるという権利や、レポートを提出すべきであるという義務や、試験問題を解くことができるという能力や、お金がないという性質など、さまざまな特徴が結びついている」と解説している。

ク）は参与者の注意を引くだろう。トラスクリプトからわかるように、佐久は「違う」（22 行目）という言葉を産出する時点で視線を萌に移し始める。そしてその直後、佐久の発話の受け手である玲奈も、頭を萌のほうに動かし萌を見ている。

さらに、萌の発話に用いられた言語的なデザインからも、発話の受け手である佐久の反応を要請していることがわかる。先行する佐久の発話に用いられた「あたしたち」（16 行目）という言葉に対して、萌は「あたし」ととりたて助詞の「は」を用いている。次に、佐久の「よく行ってた」（16 行目）に対し、萌は「行ってなかった」と産出している。このとき、上昇調で終助詞の「よ」を用いて「行ってなかった」をマークしている。そして、萌は佐久の発話の途中に割り込み、佐久の発話を訂正している。ここで萌が訂正しているのは、単に「自分が経堂へ行っていたか行っていなかったか」という事実関係ではなく、「（経堂に）よく行ったんです」という活動をしていた「（ガオカの）高校生」という成員カテゴリーに自分は属していないということである。つまり、自分（「あたしは」）は、佐久のような「（経堂に）よく行ってたんです」という「（ガオカの）高校生」ではなかった「よ」、というような挑発的な発話に聞こえる。

一方、「あたしは行ってなかったよ:？」という発話に伴うわざとらしい口調と萌の表情・手振り（図 5-5）は、発話が挑発的な訂正というより遊戯性を持った訂正としての性格を帯びることに繋がる。要するに、佐久の発話が産出される途中で開始された萌の発話は、遊戯性を伴っている挑発的な訂正行為に聞こえる。しかしながら、連鎖上この萌の発話は、「からかい」としては「情報」がやや足りない。その証拠の 1 つとして考えられるのは、萌の発話のターゲットになっている佐久と「観衆」である玲奈の反応である。

佐久が、「あ(.)あっそう？」（25-27 行目）と反応するのに対し、玲奈は「お:？」という感動詞を用いて反応する（28 行目）。それぞれの発話に表れている音声的特徴と、それに伴っている顔の表情・身振り（図 5-6）から、二人は直前の萌の発話で示された遊戯性を理解していることがわかる。佐久の反応と身振りと顔の表情から、「本当にそうなの」というようなスタンスが見える。また、佐久と萌の過去を知らない玲奈は、視線を萌から佐久に移し、そして目立つ顔の表情と音調で「お:？」と発話する。この玲奈の反応には、「あなたの高校時代には黒い歴史があるのね」というような期待（スタンス）も見える。玲奈の反応の詳しい分析については、後述する。

以上をまとめると、佐久が玲奈に向けて「経堂」に関する過去の高校時代の情報を提供し、その途中で、萌が 24 行目で、参与者の注意を引くために遊戯的かつ挑発的な要素を含む発話を産出している。この 24 行目の萌の発話は、理解しやすいように「からかいの前置き」と呼ぶ。

次に、「からかいの前置き」が産出された後の 29 行目から 33 行目までのやりとりを検討する。この部分でまず注目するのは、「あたし真面目だったんで」（29 行目）、「huh huh　huh .HHH 体 操部 ：（.） hehe .hhu hh 」（31 行目）という萌の発話とそれに伴う萌の顔の表情と身振りである。

【事例 5-2 断片 2: 29 行目から 33 行目まで】

→29　萌　：　+あたし真面目だ+った[んで: ,　　#

30　玲奈:　　[お*: ↑　　#

萌_視線　　+(玲) ----------->>

佐_視線　　>>-- *(玲)-->>

fig　　#図 5-7 左

→31　萌　：[huh　@+huh　[* huh　] .HHH] [@*体　+ 操 部 ： *# (.) hehe][*+.hhu hh +]

32　佐久:　[えっ? @ +あた [*し:そ]っちの][@*カラ+オケ屋さん*#とか,] [* +.ha そう+]

33　玲奈:　　[*お:?　]　　[*+あお↑ : +]

萌_視線　　>>-- +(佐) ---------->　　+(玲) ----------　　+(佐) ----+

玲_視線　　>>--@(萌)--- ~~ ~~ ~~　~~　~@ (佐) ---------- >>

佐_視線　　>>--　* (萌)　----~~　*(手)　--- ~~~~　*(萌) ---　*(玲) -->>

fig　　#図 5-7 右

図 5-7　29、31 行目の萌の視線・身振り・手振り

「あたし真面目だったんで」という発話から、萌は、佐久が用いた「(ガオカの) 高校生」というカテゴリーを継承し、自分を「真面目な (ガオカの) 高校生」にカテゴリー化している。その後、笑い始める (31 行目の前半) が、ここでの笑いは、直前の発話を笑うべきものとしてデザインするか、またはこれから何か笑うべきものを産出するかにつながっていることが推測される。そして、萌は目立つ手振りで、佐久のほうを示しながら、「体操部」(31 行目) という情報を提供する。この 31 行目の「体操部」が産出される際の萌の目立っている手振り (図 5-7 右) は、一種の「焦点化 (spotlighting)」の手段 (安井 2019 参照) である。さらに、「体操部」という言葉に伴っている萌の手振りは、29 行目の「あたし真面目だったんで」という発話に伴う手振り (図 5-7 左) と対照させているように見える。以上の分析から、萌自身がなぜ「あたしは行ってなかったよ」(24 行目) という訂正行為をしたかという疑問への説明は、自分が「真面目な (ガオカの)

高校生」であったから、ということである。このとき、「(経堂に) よく行ってた」佐久は「体操部」に属しており「不真面目な（ガオカの）高校生」であったことにも言及している。萌が佐久に向けて行った手振りと笑いにより、佐久が「誰かを笑うこと」の対象であるように聞こえる。

では、「誰かを笑うこと」の焦点となる佐久は、どのような反応をしているのだろうか。佐久は、萌の「真面目」(29 行目）という発話の直後で、両手をすこし挙げ、何かを言おうとしている。そして、「えっ? あたし:そっちのカラオケ屋さんとか」(32 行目）と発する。ターン冒頭で「え」という間投詞を使用することで、自分が持っていた知識や前提、期待等々から乖離したものをトークの中に見つけたことを示している（Hayashi 2009）と考えられる。つまり、32 行目の佐久の発話は、萌の発話で含意された「自分が不真面目な（ガオカの）高校生」であったことへの弁明に聞こえる。

前節で述べたように、34 行目の萌の「体操部ちょっと不良だったんで」という発話は、佐久への「からかい」に聞こえる。では、この「からかい」が産出されるまでの「観衆」である玲奈は、いったいどのような振る舞いをしているのだろうか。もう一度、16 行目から 33 行目の会話を見てみる。

【事例 5-2 断片 3: 16 行目から 33 行目まで】

16　佐久:　うん.[なんかあたしたちが]いってた高校の:［とな]りの駅で:,
17　玲奈:　　［ところだよね?　そう］　　［うん.］
18　　(.)
19　玲奈:　あ［そ　う　：^　な　　ん　　］だ.]
20　萌　:　　［そ　　う　　：.　　］
21　佐久:　　［よくいっ　てたんですよ.]むか]し::=
22　佐久:　=[とた　［ぶんだいぶ]違うと思　い　ま[す.　　］
23　玲奈:　［へ　　［：_　　］　　［°　う　］ん：°］
24　萌　:　　［.hh　　］￥あたしはいって[　な　　][かった]よ［:?　］￥
25　佐久:　　［あ］
26　　(.)
27　佐久:　［あっそう?　］
→28　玲奈:　［お：　?　　］
29　萌　:　あたし真面目だったん[で:,
→30　玲奈:　　［お：↑：
31　萌　:　[huhhuh　　[huh　[.hh]　　[体操部:　(.)　　hehe]　[.hhu hh　　]=
32　佐久:　[えっ? あた　[　し:][そっ]ちの[カラオケ屋さんとか,] [.ha(そう)(h)]

→33　玲奈:　　［お：？］　　［あお　↑：　］

玲奈は、佐久が提供した「経堂」に関する情報（萌と高校生時代のこと）に対して、「あそう:ˆなんだ.」（19 行目）、「へ:」、「うん」（23 行目）と反応し、情報の受け取りを示している。しかし、萌の割り込み発話（24 行目）に対して、目立つ音調で「お:？」（28 行目）と反応する。

ここで興味深いのは、玲奈の視線である。萌の割り込み発話の前では、玲奈の視線は佐久に向いているが、萌の発話の最中に、視線を萌に移している。24 行目の萌の発話が終わった直後、玲奈は佐久に向けて目立つピッチ且つ上昇調で「お:？」（28 行目）と発する。その後の萌の「あたし真面目だったんで」（24 行目）と「体操部」（31 行目）という発話に対して、玲奈は 40 行目と 33 行目でも「お」という間投詞しか産出していない。しかしながら、この 4 つの「お」は、決して無意味なものではない。では、玲奈はこの 4 つの「お」を用いて何を達成しているのだろうか。

まず、玲奈によって産出されている 4 つの「お」のピッチの曲線（図 5-8・9・10・11）を見てみると、いずれも、目立つピッチで産出されていることがわかる。さらに、4 つ目の「あお↑：」（33 行目）は、音量も著しく目立っている。

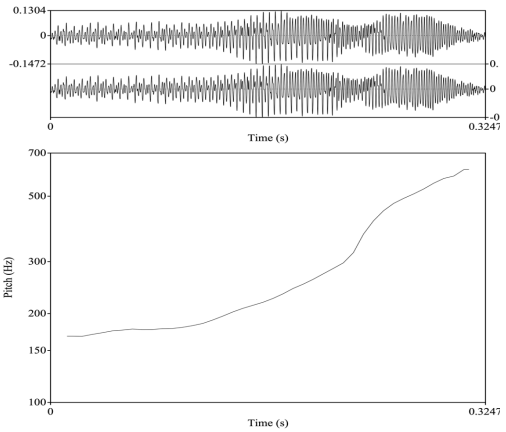

図 5-8　28 行目の玲奈の「お:？」のピッチ

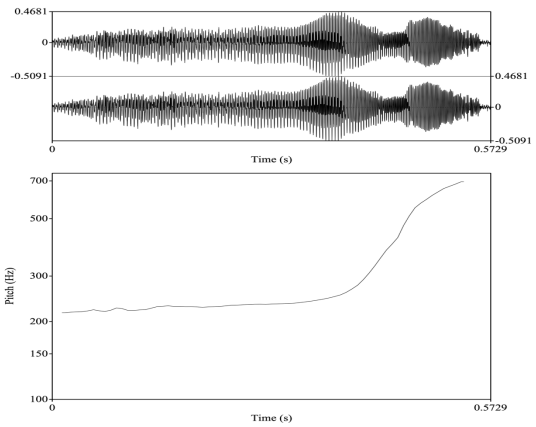

図 5-9 30 行目の玲奈の「お：↑：」のピッチ

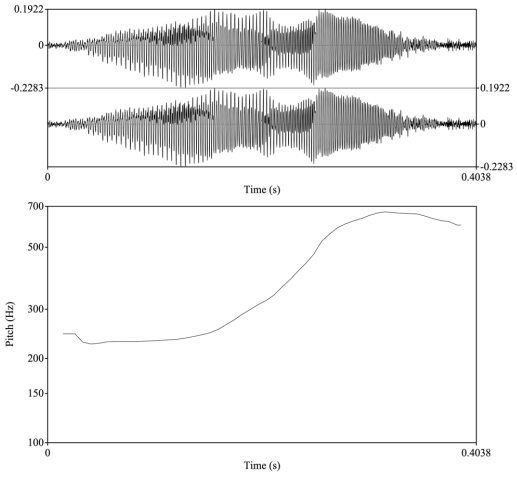

図 5-10 33 行目の玲奈の「お:？ 」のピッチ

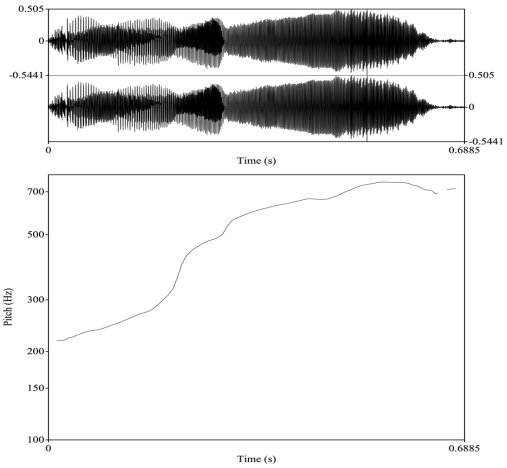

図 5-11 33 行目の玲奈の「あお↑ : 」のピッチ

さらに、それぞれの「お」を産出する際の玲奈の顔の表情は、図 5-12 に示すように目立つものである。つまり、ここで玲奈が「実質的内容・評価」を示さない間投詞である「お」を使っていることにから、玲奈の中立的なスタンスがわかる。それと同時に、目立った表情と身体の動きとピッチ、および佐久に向けた視線で、「何か面白いことがあるかな」という期待も示しているように見受けられる。

図 5-12　28、30、33 行目の 4 つの「お」の時点の玲奈の表情

要するに、「観衆」である玲奈は、際立つリアクションを取ることで、萌のスタンスに寄り添う態度を示していると言える。

ここでもう 1 つ興味深いのは、33 行目前半の玲奈の「お」という反応の産出位置が、何か新しい情報を得た後の位置ではないこと[79]である。では、玲奈はなぜこの位置でも「お」を産出するのだろうか。

この「お」という間投詞はある種の安全な反応として選ばれている可能性がある。佐久と萌とのような親しい友人同士の間で「仲間割れ」のような「からかいでありうるもの」（24 行目）が生じた場合、第三者（「観衆」）である玲奈にとっては、からかう側に寄り添うか、からかわれる側に寄り添うか、というのはある種のジレンマである。つまり、玲奈は、からかう側である萌とからかわれる側である佐久のどちらに寄り添うべきか、または中立的な立場をとるべきか、という非常に微妙な立場に立っている。玲奈は、この 4 つの「お」という反応とそれに伴う音声的特徴、そして身体の動きにより、からかう側に寄り添いつつも、行き過ぎないようにするという絶妙なバランス調整[80]を行っていると考えられる。

5.3.1.2 「からかい」の協同構築と「観衆」の貢献

前節では、「観衆」である玲奈は「からかい」を行おうとしている萌に寄り添いつつも、行き過ぎないような振る舞いをしていると述べた。本節では、玲奈はいかに萌と協同的に「からかい」を構築するのかを記述する。

萌は 34 行目で、玲奈に向けて「体操部ちょっと不良だったん(h)で(h):.」と発する。この発話は、萌が玲奈に向けて産出しており、玲奈に佐久に関する高校時代の情報を提供するという行為である。しかし、佐久が属していた体操部へのネガティヴな評価が玲奈に向けて笑いながら行われていること、その際に際立つ手振り（図 5-13）を伴っていることから、佐久への「からかい」にも聞こえる（西阪 2001、初鹿野・岩田 2008、安井 2017, 2019）。萌の発話に対し、佐久は大笑いという反応（35 行目の後半）を示している。つまり、佐久は萌の発話に現れている遊戯性を理解したことを示している。一方、「観衆」である玲奈がどのような振る舞いをしているのか、会話の詳細を見てみる。

【事例 5-2 断片 4: 31 行目から 36 行目まで】

31　萌　：［huh　huh　［ huh　］.HHH ］［ 体　操　部 ： (.) hehe］［ .hhu hh　］
32　佐久：　［えっ？ あた［し:そ］っちの　］［カラオケ屋さんとか,］　　［.ha(そう)］
33　玲奈:　　［お:？　］　　［あお↑ :]=

[79] 30 行目の「お」は萌の「あたし真面目だったんで」に対して産出されており、33 行目の後半の「あお」は「体操部」という情報に対して産出されている。しかし、33 行目の前半の「お」が産出される位置では、佐久の発話途中であり、また萌はその時点で笑っている。

[80] 誰かに寄り添いつつも行き過ぎないようにするスタンス調整は、不満（complaining）を語る連鎖でもよく見られる（Drew and Walker 2009）。

→34　萌　：　[体操][部+ちょ][っと]*不良だ]った[ん［(h) で(h):.]

35　佐久:　[.HH][体+ 操　][部:]　　[hu [HAHA HA　]

36　玲奈:　=[お]　　[意外] *に]　[#ちょ[っと(ブレ)] =

((36 行目の「お」は 33 行目の「あお↑:」の続きである))

玲_視線　　>>--+(萌) ----------->>

佐_視線　　>>-- *(萌) ----------->>

図 5-13　34 行目の萌の身振りと表情

図 5-14　36 行目「ちょっと(ブレ)」という発話に伴う玲奈の身体と表情

玲奈は「あお↑:」の続きで、「意外に」と評価した後、萌の「体操部ちょっと不良だったんで」という発話の TRP の近くで、「ちょっと（ブレ)」(36 行目）と発する。この「ちょっと（ブレ)」は、玲奈が萌の発話の繰り返しを試そうとしているように聞こえる。図 5-13 の 3 コマ目と 4 コマ目が、このときの玲奈の身振りである。さらに詳しく見ると、図 5-14 で示したように、玲奈は左肘で萌に触れながら萌の発話を繰り返そうとして、「ちょっと（ブレ)」と発している。この左肘の動きによる萌との身体の接触は、「チーム」を組む「暗号」として理解できる。

その後、玲奈は 37 行目で、「ちょっと不良だったのね」と発し、萌に確認を求める。この「ちょっと不良だったのね」(37 行目）という発話は、萌の「体操部ちょっと不良だったんで」(34 行目）という発話の繰り返しである。その際、玲奈は萌のジェスチャーの繰り返しも行っている（図 5-

15)。つまり、玲奈は発話の内容の繰り返しだけでなく、ジェスチャーに含まれている意味をも繰り返しているのである。からかう側の発話を繰り返すことで「からかいのチーム」を組むという Machi（2014）の議論を踏まえると、玲奈は協同的に萌が行なっている「からかい」行為のフレームに参加しているのである[81]。

【事例 5-2 断片 5: 37 行目から 39 行目まで】

37　玲奈:　= [.hh[ちょっと不良*だったの[ね ？　]

38　萌 ：　　[((笑いすぎて声が出ない)).HH　[そう.]　=

39　佐久:　　[HAH[　((笑いすぎて声が出ない)　　)

図 5-15　34 行目の萌のジェスチャーと 37 行目の玲奈のジェスチャー

玲奈の同意要求（37 行目）に対して、萌は「そう」（38 行目）と承認する。串田（2006）の「そう」に対する記述に基づくと、ここで萌は「自分が開始した行為の実現に貢献したことを認定する」（串田 2006: 111）という行為をしている。つまり、萌は、34 行目で萌が行った「からかい」という行為の実現に玲奈の繰り返しが貢献したことを認定している。

38 行目の「そう」に引き続き、萌は、「不良グループだったんですよ」（40 行目）と発話する。この発話は、玲奈の貢献を踏まえて産出されていると分析しうる（串田 2006）。

【事例 5-2 断片 6: 40 行目から 42 行目まで】

40　萌　：　=[不良グループだっ[た [んで すよ:. huhuh　huh　heh hehe]

[81] 相互行為の具体的な展開のなかで行われる特定の活動にふさわしいやり方で志向（発話のデザイン、身体の向き、顔の向き、視線の向きなどによって表示される）が配分されるとき、その志向の配分は「参加フレーム」と呼ばれる（西阪 2008a）。この点については、西阪（2009）安井（2019）を参照されたい。

41　佐久:　[.HHH　Huhu　hu[hu [違 う よ=不　良　じゃ な く.hh]
→42　玲奈:　[>不[良グループだっ*たの, 実はく.HHH　]

図 5-16　40 行目の萌の身振り

図 5-17　42 行目の玲奈の身振り

34 行目の萌の「ちょっと不良だったんで」という発話に比べ、40 行目の「不良グループだったんですよ」という発話は、情報量は変わらないが、「ちょっと」の欠落と終助詞の「よ」の使用、手振り（図 5-16）により、ネガティヴ的な評価をグレードアップさせているように聞こえる。そうすることで、萌は自分が 34 行目で行った「からかい」行為をグレードアップさせているようにも聞こえる。40 行目の萌の「不良グループだったんですよ」という発話に対し、玲奈は再び繰り返すというプラクティスを用い、「>不良グループだったの, 実はく」（42 行目）と産出する。

ここで、「不良グループだったの」という発話に伴う玲奈の身振りにも注意したい（図 5-17）。玲奈の手振りは、萌の手振りを繰り返して産出しているように見える。からかう側の発話と手振りの繰り返しにより、「からかいのチーム」（Machi 2014）が強化されているのだろう。繰り返し発話の直後に、「実は」（42 行目）という副詞が「付加要素（increment）」（Couper-Kuhlen and Ono 2007）の形で追加されている。「実は」という副詞を使用することで、会話連鎖上、「（佐久が所属していた）体操部が不良グループだった」という「事実」が打ち明けられている。

続いて、36、37、42 行目の玲奈の発話が産出されるタイミングを見てみる。前述した通り、36 行目の「ちょっと(ブレ)」は、玲奈の繰り返しの試行として聞こえる。実際、玲奈は 37 行目で、36 行目で行おうとした繰り返しを遂行している。36 行目の繰り返しの試行と 42 行目の繰り返しはいずれも萌のターンの完結可能点付近で産出されている。加えて、玲奈の 42 行目の繰り返し発話と同時に産出されているのは、佐久の「違うよ不良じゃなく」という発話である。ここでのターンの完結可能点付近で産出される発話と、それによる玲奈と佐久の発話のオーバーラップは、いずれも次の話し手がターンの完結を予測して早くターンを開始した結果である（Sacks, Schegloff, and Jefferson 1974)。佐久は早い時点で萌の「からかい」に対する抵抗を示している（Drew 1987）が、玲奈はそれより早い時点で萌との「からかいのチーム」を強化している。いずれも、先に話す発話者が「勝つ」のである。

ここまで見たように、玲奈の振る舞いは次のようにまとめられる。玲奈は、からかう側である萌の発話とジェスチャーを繰り返すことにより、萌に寄り添うスタンスを示している。それと同時に、玲奈の発話が産出されているタイミングなどの連鎖の構造から、「からかい」の構築に貢献している。つまり、「観衆」である玲奈は、からかう側である萌のスタンスに寄り添いつつ、萌と協同的に佐久への「からかい」という行為を達成していると言える。

5.3.1.3「観衆」による「からかい」のエスカレーション

前節では、「観衆」である玲奈がからかう側である萌と協同的に「からかい」を構築しているということを記述した。本節では、佐久と友人同士ではない玲奈が、本来佐久への「からかい」をしにくいにもかかわらず、萌が行なった「からかい」を踏まえ、その「からかい」をエスカレートさせていることを記述する。前節に続く 43 行目から 62 行目までの会話を見てみる。

【事例 5-2 断片 7: 43 行目から 62 行目まで】

```
→43  玲奈:    [ な [:ん だ:.]
  44  萌  :   [hh  [huhhuh ]  [huh  [ h h h ]  HAHAHA  [Heh   Hh   ]  hh  ]
  45  佐久:         [heHA HA ]  [.hh ち[がうよ.]
→46  玲奈:                              [あなた]こうさしてた[ 人    ?     ]
  47  佐久:                                          [>違うちゃう]ちゃあ<]=
```

図 5-18　43 行目の玲奈の表情

図 5-19　46 行目の玲奈の身振り・表情

48　佐久:　=[さ(h)[して(h)ないちょっ違. hh ちが]ちが. [ちょっと: ブーちょっ]と:=
49　萌　:　　[hh　[hhhh　hhh　hhh　hh　　hh　]　hh　[hhh　　hhh　　hh]
→50　玲奈:　　[あ　:　の: パステルカラーの　]　　[シャーペンを, うん.]

図 5-20　50 行目の玲奈の身振り・表情

51　萌:　　=[うん.
52　玲奈:　　[うん.
53　　(0. 2)
54　佐久　:　あの:ガストみたいなとこに[たまってた(h)[だ(h)け.]
55　萌:　　[hhh　　[huh　huh]

→56　玲奈:　　[あ　:,]
→57　　不良だ[な:.]
58　萌　:　　[hh][huhuh　huh　]
59　佐久:　　[塾][もい(h)か(h)ず.]
→60　玲奈:　[まあなんていかん[わね::?]　　[Hhhhh
61　萌　:　[hhhh　hh　hh　　[huhhuhh] hhh　　[hhhh
62　佐久:　　[hhhh　　]　hah　　[hhh

玲奈はまず 43 行目で「な:んだ:」と発話する。ここで、玲奈が「な:んだ:」と発することで、ここまでのやりとりで言及されていた「佐久が不良だった」ということを理解したことを示している。しかし、「な:んだ:」という発話に伴う表情（図 5-18）を見てみると、遊戯性を伴っていることがわかる。これに対して萌は笑いで反応しており、玲奈の発話に現れた「遊戯性」を受け入れていることが示されている。

「な:んだ:」(43 行目）という発話の後、玲奈は、すこし間を置いて「反応機会場」(西阪 2008a）を与える。この間に萌が大笑い（44 行目）で反応し、佐久が「ちがうよ」(45 行目）と反応する。しかし、45 行目の佐久の「ちがうよ」の「ち」の直後で、「あなたこうさしてた人? 」(46 行目）と発話する。そして、「あ:の:パステルカラーのシャーペンを」（50 行目）という発話を追加する。46 行目と 50 行目の玲奈の発話とそれに伴うジェスチャー（図 5-19・20）から、玲奈は「不良高校生」というカテゴリーを継承し、独自の観点から佐久に対してさらなる「からかい」をしていることがわかる。からかわれる側である佐久は、玲奈のからかう発話と同時に早口で「>違うちゃうちゃあ<」(47 行目)、「さ(h)して(h)ないちょっ違. hh ちがちが」(48 行目）と発話し、玲奈の発話を否定する。その後も、「ちょっと:ブ−ちょっと:」(48 行目）と「あの:ガストみたいなとこにたまってた(h)だ(h)け」（54 行目）と発話し、自分の高校時代の活動を弁明している。こうした笑いながら抵抗をしている反応、つまり、「ポーカーフェースの (po-faced)」反応 (Drew 1987）からも、玲奈が「からかい」をしていることがわかる。加えて、「からかい」の発端である萌が大笑いで反応していることも、玲奈が佐久をからかっていることの傍証となる。

5.3.2 からかう側のスタンスに寄り添わずに「からかい」を協同的構築している事例

前節では、「観衆」がからかう側のスタンスに寄り添いつつ、からかう側と協同的に「からかい」を構築し、さらに、「からかい」をエスカレートさせている事例を分析した。本節では、「観衆」がからかう側のスタンスへ寄り添わない態度を示している事例を検討する。具体的には、まず 5.3.2.1 節でからかう側がいかに「からかい」を産出しているのか、いかに「観衆」に「からかいのチーム」を組むことを提案しているのか、を分析する。そして、5.3.2.2 節で、「観衆」は

いかにからかう側の「からかいのチーム」を組むという提案を“拒絶”しているのかを見る。最後に、5.3.2.3 節で、その提案を“拒絶”した「観衆」の振る舞いがいかにからかう側に利用され、からかわれる側へのさらなる「からかい」になっているのかを述べる。そして、「観衆」はいかにからかわれる側の代弁者になり、からかう側のスタンスへ寄り添わない態度、からかわれる側のスタンスへ寄り添う態度を示しているかを記述する。

5.3.2.1「からかい」の産出及び「からかいのチーム」を組むという提案

事例 5-3 は 4 人の大学生（C と E: 男；B と F: 女）が「猫派か犬派か」をテーマとして話している会話から抜粋したものである。座る位置は、図 5-21 に示す通りである。

この事例で最初に「からかい」として聞こえるものは、29 行目の E の「うざかったね? 」という発話であり、このときの「観衆」は B である。

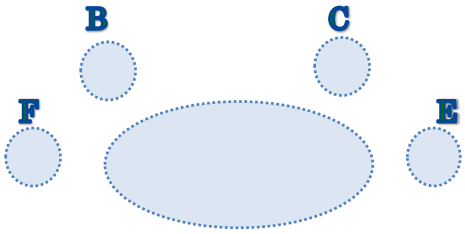

図 5-21　参与者の座る位置

【事例 5-3: Sakura04 00:10:50】

01　E:　前回盛り上がったんでしょう(か). .hh（(B と C に向けて)）
02　　(0.2)
03　B:　前回はオーバーして, *((視線を C に))*
04　　(0.3)
05　C:　う[ん.]
06　B:　　[は]なして[た.]
07　C:　　[ず]っとしゃべって[たよね.]
08　E:　　[huh　] [° hhh°] *((B に向けて))*
09　B:　　[うん.] *((E に向けて頷く))*
10　　(0.4)
11　B:　あっもう[授業だ]:って
12　E:　　[° .hh]°
13　C:　そうそう. 授業ギリギリまでしゃべ[ってたもんね.]

14　B:　　[うん.めっちゃ]しゃべっとった.=
15　E:　=[huhhh]　((笑っている顔))
16　B:　　[(.hh)　] 面(h)白(h)か(h)った(h)
17　　(1.1) *((E 視線を下に；4 回くらい小さい頷き))*
18　F:　ふん[ふん.]
19　E:　　[メイン]トーク?　((C に向けて))
20　　(0.8)
21　C:　うん.
22　　(0.3)
23　C:　後半は俺がずっと質問してた. .hh
24　B:　huhh ((29 行目が終わるまで笑顔))
25　E:　う:ん.((頷き))
26　　(0.5)
27　C:　女の子ってこうゆうとこあるよねみたいな.
28　　(1.1)
29　E:　うざかったね?　((B に向けて))
30　　(0.8)
→31　B:　°え-°ここは-ここはここで面白かったよ.
32　E:　>¥あっそう.¥< Huhhuh ここはここで面白かった[って.] huhu .hh
33　B:　　[huhh]
→34　B:　なんか (0.3) ↑あ:↓あ[:　:　:って] 言ったり,=
35　E:　　[どうしたの?　] ((C に向けて)
36　E:　=°hhh°
37　C:　そう [そうそう.]
38　B:　　[ね：¿　]

まず、上記のトランスクリプトから、29 行目の発話は、E が B に向けて誰かへのネガティヴな評価に同意を求めるものだと分かる。誰に対するネガティヴな評価であるかを解明するために、29 行目までの経緯を見てみる。

この断片の直前まで（会話収録が始まって 11 分ごろ）は、「犬派か猫派か」というテーマに関する会話が進行している。しかし、そのテーマがなかなか膨らまず、何回も会話が詰まった。その後 E は、B と C に向けて 01 行目で「前回盛り上がったんでしょう（か）. .hh」と質問する。これは、B と C は前回の会話収録にも参加していたことに起因する質問である。この質問に対し

て、B と C は 03 行目から 16 行目までで、前回の状況について述べている。そして、E は C に向けて、「メイントーク？ 」と質問する（19 行目）。19 行目の E の質問に対して、C は「うん.」（21 行目）と応答し、0.3 秒の間の後、自ら「後半は俺がずっと質問してた. .hh」と追加する（23 行目）。そして、E の「う:ん. 」（25 行目）という反応と 0.5 秒の間（26 行目）の後、C は再び自ら「女の子ってこうゆうとこあるよねみたいな. 」という情報を提供する（27 行目）。C の発話の後に、1.1 秒の長い沈黙が生じ（28 行目）、そして、C への「からかい」として聞こえる発話（29 行目）が産出されている。

【事例 5-3 断片 1】

27　C:　女の子*ってこうゆうとこあるよねみたいな.
B_視線　　*（(テーブルに)）----------->>
28　　+(1.1)
E_視線　+(B) -->>32
E_nod　|((E 3 回くらい小さい頷き))
29　E:　うざかったね?　((B に向けて))

29 行目の発話は、評価対象が言及されていないが、連鎖位置から判断すると、19 行目から 27 行目までの連鎖で C が言及した内容に繋がっているようである。C は 27 行目で、「女の子」というカテゴリーを用い、同時に自分を「男の子」というカテゴリーに入れている[82]。さらに、C は前回の会話収録では、「女の子」が「こうゆうとこある」（27 行目）という述部を用いて「ずっと質問してた」（23 行目）。C の発話を聞いて E は評価を下すが、この行為を通じて E も C が行なったカテゴリーを継承していることがわかる。つまり、29 行目の発話は、前回のテーマである「異性に求める条件」について「女の子ってこうゆうとこあるよねみたいな. 」と質問する「男の子」が「うざかった」という評価なのである。

この 29 行目の発話は、どのような行為を成し遂げているのだろうか。1 つは、E が C へのネガティヴな評価を B に向けて産出しており、C への「からかい」として聞こえるのである[83]（西

[82] C が男性であるというのは、事実であり、なぜわざわざ自分を「男の子」というカテゴリーに入れるのか、というような疑問を持たれるかもしれない。C は「20 代」（年齢）、「男の子」（男性）、「日本人」（国籍）、「大学生」（職業）などのカテゴリーのすべてに正しく適用できる。しかし、だからといって、ある相互行為場面でこれらのカテゴリーを用いて C をカテゴリー化することが、自動的に適切になるわけではない。（串田・平本・林 2017: 245-246）。前回の収録では、異性に求める条件というテーマについて、「女の子」というカテゴリーは B（ともう 1 人の女性）に適切に適用できるので、C は「男の子」が属している「性別」という「カテゴリー集合」から「女の子」を選んでいるのである。同時に、自分を「男の子」というカテゴリーに入れている。

[83] 29 行目までの会話（収録が始まったところから）の動画を繰り返し観察した筆者が捉えたものを補説しておく。裏付けられる証拠がないため、論文の主張とはしない。既に述べたが、「犬派か猫派か」というテーマが膨らまず、何度も会話が詰まった。加えて、E は 4 人の中で「司会者」（メイントーク）のような役割をしているようである。

阪 2001、初鹿野・岩田 2008、安井 2017, 2019 参照)。もう 1 つは、E が B に「からかいのチーム」を組むという提案をしているようにも聞こえるのである。上記で記述したように、29 行目の発話は、E が B に向けて同意を求めているのである。E は、前回の収録場面で「女の子」というカテゴリーを担っている B に向けて、「男の子」というカテゴリーを担っている C が「うざかった」というネガティヴな評価に対しての同意を求めているのである。換言すれば、29 行目の発話は、C への「からかい」に聞こえる発話を B に向けて産出することで、「一緒に C をからかおう」という提案として認識できる。

5.3.2.2「からかいのチーム」を組むという提案に対する「観衆」による“拒絶”

E が発した「からかいのチーム」を組む提案の発話（29 行目）の受け手である B は、どのような振る舞いをしているのだろうか。詳細を見てみる。

【事例 5-3 断片 2】

29　E: @うざかった*ね?　((B に向けて))
B_視線　-->> * ((E に)) -->>
C_視線-->>@(下)---------->>
30　(0.3) *(0.3)@(0.2)
B_視線　-->> * (F との間の下に) -->>
C_視線　-->> @(B)-->>32
→31　B: ° え-° ここは-ここはここで*面白かったよ.
B_視線　-->>*(E)-------->>

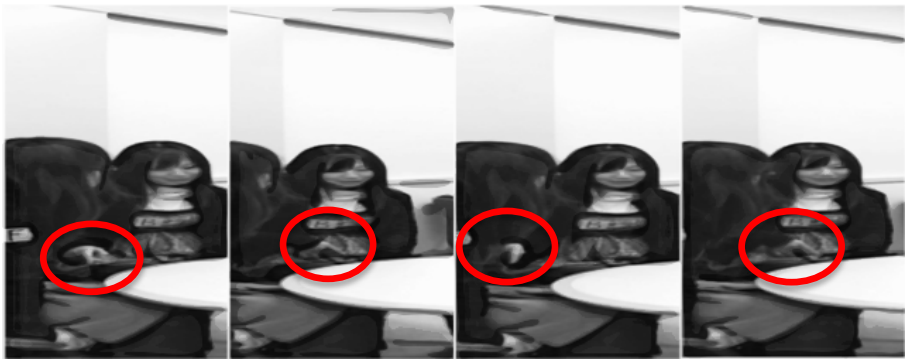

図 5-22　31 行目の発話における B の視線と手振り

今回の収録が盛り上がらないのに対して、前回の収録では盛り上がった。この盛り上がった原因の 1 つは、「メイントーク」である C にあるようである。この点から、「後半俺がずっと質問してた」、「女の子ってこうゆうとこあるよねみたい」という C の発話は、自慢話に聞こえる。これは、Drew（1987）で挙げた先行する bragging（自慢する）という行為に見られる「やりすぎ」といった特徴であろう。E はその「やりすぎ」をターゲットにして C をからかっているのではないかと推察される。

Bは、「うざかったね」の「ね」の時点までは、視線をテーブルに落としており、「ね」から視線をEに向けるが、0.3秒くらい（30行目）を経て、視線を逸らしてFとの間の下に落としている。そして、0.5秒の間の後、Bは右手の人差し指でFとの間を指しながら「°え-°ここは-ここはここで面白かったよ.」（31行目）と産出する（図5-22）。30行目の0.8秒の間（0.3秒と0.5秒を合わせる）と31行目の「°え-°」「ここは-」というような言い淀みから、BはEの同意要求に遅れて発話を産出していることが分かる。

加えて、前回の会話収録では、Bは今回と同じ位置に座っており、もう1人の女性はFの位置に座っていた。Bは座る位置を利用して、16行目で自分自身が下した「面(h)白(h)か(h)った(h)」という評価をやり直している。前回の収録全体が面白かったのではなく、女の子との間の会話が面白かったということになっているだろう。もちろん、BはEの発話に対応しているが、内容面から、「うざかったね」という同意要求に対して、「面(h)白(h)か(h)った(h)」という応答は、ややずれているだろう。

これらの特徴から、31行目のBの発話はEの同意要求への非選好的な応答であるということがわかる。つまり、Bはからかう側であるEの「からかいのチーム」を組むという提案を“拒否”していると同時に、中立的なスタンスを示している。

では、Eがからかおうとしているcは、どのような反応を示しているだろうか。Cは29行目の発話の直後にすぐ視線をBに移し、Bの反応を見ている。Cの視線からも、「観衆」であるBが29行目の発話にいかなる反応をするかが重要であるということが分かる。

5.3.2.3 からかう側のさらなる「からかい」への「観衆」による代弁

「からかいのチーム」を組むという提案を“拒絶”された後、どのような展開があるのだろうか。Eは32行目でBに向けて早口で「あっそう」と受け止めるが、そして、Cに向けて笑いながら「ここはここで面白かったって.」と発話することで、連鎖が拡張されている。

【事例5-3 断片3】

31　B:　°え-°ここは-ここはここで面白かったよ.

32　E:　>¥あっそう.¥< @Huhhuh+ここはここで*面白かった[って.] huhu .hh

33　B:　[huhh]

E_視線　-->> +(C)　---------->>

C_視線　-->> @(E)　---------->>

C_表情　↑((真剣顔)) -->

図 5-23　32 行目の「ここはここで」の時点の E の手振りと視線の向き

この E の「ここはここで面白かったって.」という発話は、C へのさらなる「からかい」として聞こえる。発話のデザインから言うと、まず「ここはここで面白かった」というのは、先行話者の B の発話を繰り返したものである。次に、発話の産出と同時に E は B の手振りも利用している（図 5-23）。発話と手振りの繰り返しにより、B の応答（31 行目）の「前回の会話収録で面白かったのは C と関係なく B ともう 1 人の女の子の間のことである」という含意を再び浮き上がらせている。それと同時に、29 行目の「からかい」とリンクし、C をターゲットにしている。さらに、笑い声と「って」という引用マーカーを使用することで、「遊戯性」が伝わると考えられる。からかわれる側である C は真剣な表情を示しており、これは一種の「からかい」への抵抗だと言える（Drew 1987）。

では、からかう側である E に自分の発話とジェスチャーを利用された B は、どのような反応をしているかを記述する。

【事例 5-3 断片 4】

31　B:　°え-°　ここは-ここはここで面白かったよ.

32　E:　>¥あっそう.¥< Huhhuh ここはここで*面白かった[って.] huhu .hh

→33　B:　[huhh]

→B_non　↑((口を開けて何かを言おうとしている))

→B_視線　*(C)---------->>

→34　B:　なんか *(0.3) ↑あ:↓あ[: * :　:って]@言ったり,=

35　E:　[どうしたの?] ((C に向けて))

→B_視線　-->>* ((前方)) -------> * (C) ---------->>

C_視線　-->> @ (B) -->>

36　E:　=° hhh°

37　C:　そう［@そうそう.］

38　B:　　［@ね：¿　］

C_視線　　@(E)-->>

（(その後、E は B に向けて 4 回くらい小さい頷き、そして「でもね案外ねわからないね」と発話する)）

32 行目で E は、B の発話とジェスチャーを利用して C へのさらなる「からかい」をしている。それに対して、B は C に視線を向け、笑っている（33 行目）。この B の笑いは E が行なっている「からかい」への理解を示している。しかしながら、B は C に向けて「なんか（0.3）↑あ:↓あ:::って言ったり」（34 行目）と発話する。この B の発話は一種の代弁に聞こえる。実際、C はすぐ「そうそうそう」（37 行目）と承認する。B の代弁行為は、からかう側のスタンスへ寄り添わない態度を示していると同時に、からかわれる側のスタンスに寄り添う態度を示していると考えられる。

5.4 考察

前節では、「からかい」の発話と「からかい」の行為の受け手が異なる場合、「観衆」の振る舞いが「からかい」の協同構築にいかに貢献しているのかについて事例分析を行った。本節では考察を行う。

表面上、前節で分析した 2 つの事例が示したように、「観衆」の振る舞いは、表面上、「からかい」の協同構築に異なる貢献をしている。事例 5-2 では、「観衆」である玲奈は、からかう側である萌のスタンスに寄り添いつつ振舞っている。そして、からかう側と協同的に佐久への「からかい」を構築している。すなわち、「観衆」とからかう側の間で「からかいのチーム」が組まれているのである。事例 5-3 では、「観衆」である B は、からかう側である E の「からかいのチーム」を組むという提案を“拒絶”している。しかし、その振る舞いは、E に利用され、C へのさらなる「からかい」になっている。結果的には、「観衆」の振る舞いは「からかい」の協同構築に貢献している。

しかし、この 2 つの事例には共通点も見られる。それは、最初の段階で「観衆」は「慎重に」振る舞いながら中立的なスタンスを示しているということである。事例 5-2 では、「からかいの前置き」段階で、「観衆」である玲奈は、「実質的内容・評価」を示さない間投詞である「お」を使うことにより、中立的なスタンスを示している。事例 5-3 でも、「観衆」である B は「からかいのチーム」を組むという提案に対し、非選好的な反応を示すことで、E の提案を“拒絶”していると同時に、中立的なスタンスを示している。これらは、「からかい」が持つ「挑発性」という性

質に関わるだろうと考えられる。

以上から、「観衆」は、異なる連鎖環境において様々な振る舞いをしているが、いかに中立的なスタンスを取るのかという課題に常に直面していると言える。

5.5 おわりに

本章では、「からかい」の協同構築で、「観衆」がどのような振る舞いをしているのかについて、2 つの事例分析を行った。1 つは、「観衆」がからかう側のスタンスに寄り添いつつ、からかう側と協同的に「からかい」を構築する事例であった。もう 1 つは、「観衆」がからかう側のスタンスへ寄り添わない態度を示しているが、自分の振る舞いがからかう側に利用され、結果的に、「からかい」の協同構築になっている事例であった。このことから、「観衆」は、異なる連鎖環境において様々な振る舞いをしているが、いかに中立的なスタンスを取るのかという課題に常に直面しているとみることができるだろう。

第 6 章　総合考察

6.1 はじめに

本章では 3 章から 5 章まで分析した結果を踏まえ、「遊び」としての「からかい」がどのような特徴を持っているのかを考察する。

6.2 「遊び」としての「からかい」の特徴

第 3 章では、話題が真剣に進められている連鎖の中で、先行話者に笑いを誘う技法が用いられていない場合、参与者が笑いながら先行話者の発話における「遊戯要素」を繰り返すことで、先行話者を笑うことを成し遂げているということを明らかにした。「からかい」の場合は、からかう側が相手を「からかい」の対象として笑うことを成し遂げるのである。以下では、まず、本論文で分析した全ての「誰かを笑うこと」(「誰かと共に笑うこと」を除く）の事例のいくつかの特徴をまとめ、表 6-1 に示す。次に、笑われた者とその場にいる他の参与者の反応をまとめ、表 6-2 に示す。

表 6-1 から、笑いを含む口調で（笑いながら）の発話の繰り返しが多く利用されていることがわかる。無論、「笑いながらの繰り返し」が第 3 章の分析の焦点となっているため、表 6-1 に多く反映されている。しかしながら、第 4 章と第 5 章の事例にも見られるため、笑いを含む口調で（笑いながら）の発話の繰り返しは、「からかい」を成し遂げるために利用可能なプラクティスであるということが言えるだろう。

繰り返し強調しているように、異なった「位置」で産出した「笑いを含む口調での発話の繰り返し」が異なった行為を成し遂げている。同じ「からかい」連鎖の中で、笑いを含む口調での発話の繰り返しによって成し遂げられた行為が異なることもある。例えば、事例 3-7 における E の笑いながらの繰り返しにより成し遂げられている行為は、F への「からかい」である。事例 4-2 における新田のニヤニヤした顔の表情を示しながらの繰り返しによって成し遂げられている行為は、奥村への「からかい」に聞こえる。事例 5-2 における玲奈の笑いながらの繰り返しが成し遂げているのは、萌に寄り添い、「からかいのチーム」を組むことである。また、注 7 で述べているように、「プラクティスと行為の関係は、一対一である場合も、一対多である場合も、多対一である場合もある」。事例 3-7 では、E の笑いながらの繰り返しに、口調の真似や大げさな音調を加えている。さらに、2 回の連続の繰り返しを産出している。事例 4-2 では、新田が「引き金」の発話を一部繰り返して Yes/No 質問の形で産出している。事例 5-2 では、玲奈が笑いながらの繰り返しに、ジェスチャーの繰り返しを加え、からかう側の萌に確認を求めるような形で産出している。

表 6-1 本論文において分析した全ての「誰かを笑うこと」事例のまとめ

<table>
<tr><th></th><th></th><th>「引き金」の発話</th><th>分析において注目する遊戯的な発話部分</th><th>遊戯的な発話のローカルな位置</th><th>遊戯的な発話のデザイン</th></tr>
<tr><td rowspan="3">“普通”の「誰かを笑うこと」</td><td>事例 3-4</td><td>14 行目辰嶋の
「ちょっとあれしてもらえません:」</td><td>17 行目の玲子の
「ちょっと(h)あれ(h)して(h)もらえ(h)ま(せん). Ha」</td><td>14 行目の辰嶋の発話のターンが終わった直後</td><td>・笑いながら「引き金」の発話を繰り返す</td></tr>
<tr><td>事例 3-5</td><td>07 行目の秀太の
「へ::.まあでもそれゆとりあるから.そしたら.」</td><td>08 行目の柚本の
「ゆ(h)と(h)り」</td><td>7 行目の秀太の発話のターンが終わった直後</td><td>・笑いながら「引き金」の発話の一部要素を繰り返す</td></tr>
<tr><td rowspan="2">事例 3-6</td><td rowspan="2">09・10 行目の秀太の
「それたぶんだんだんだんだん前歯が(0.5)クラッシュしてくるよってゆわれて:.」</td><td>11 行目の柚本の「ク(h)ラ::ッ(h)シュ」</td><td>09・10 行目の秀太の発話のターンの末尾の付近</td><td rowspan="2">・笑いながら「引き金」の発話の一部要素を繰り返す</td></tr>
<tr><td>16 行目の柚本の「heh ク(h)ラッ(h)シュ.°hhh°」</td><td></td></tr>
</table>

（続）表 6-1 本論文において分析した全ての「誰かを笑うこと」事例のまとめ

		「引き金」の発話	分析において注目する遊戯的な発話	遊戯的な発話のローカルな位置	遊戯的な発話のデザイン
「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」	事例 3-7	42 行目の F の 「え? (0.2)パン大好きだもん.」	48 行目 E の 「. HH ♪大好きだも～ん. (0. 4) ♪パンが大好きだ(h)も-. HH Hehe」	43 行目から 47 行目までの E と F の笑いの後（2.1 秒経過）	・笑いながら「引き金」の発話（の一部要素）を繰り返す ・口調の真似（「話し方」を繰り返す） ・大げさな音調（プロソディ）
	事例 3-8	26 行目の E の 「まっくす-マスク要るよね.」	31 行目 C の 「まっ(h)くす huh huh hu」	26 行目の発話が産出されて 1.4 秒経過	・笑いながら「引き金」の発話の一部要素を繰り返す
			32 行目の F の発話[84] 「hh まっ(H)く(h)す(h)」 34 行目の B の発話 「ま(h)っくす ° hh° . hhu」		・C の繰り返すことで焦点化となる部分を笑いながら繰り返す
			35 行目の C の発話 「まっくす(h)い(h)る?」		・再度笑いながら「引き金」の発話の一部要素を繰り返して Yes/No 質問の形で産出

[84] 32 行目の F の発話と 34 行目の B の発話は、C が産出した「からかい」に付属しているものとして理解されたい。一種の「からかい」になりうると同時に、その場にいる参与者の反応でもある。

（続）表 6-1 本論文において分析した全ての「誰かを笑うこと」事例のまとめ

		「引き金」の発話	分析において注目する遊戯的な発話部分	遊戯的な発話のローカルな位置	遊戯的な発話のデザイン
「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」	事例 4-2	06 行目の奥村の 「.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たりh .hh」	15 行目の新田の発話 「あそび行っ(0.2)たりしてんすか:_」	07 行目から 14 行目までのやりとりの後	・ニヤニヤした顔の表情を示しながら、「引き金」の発話の一部要素を繰り返して、Yes/No 質問の形の形で産出
	事例 4-3	08 行目の E の 「でも,俺犬アレルギー° だよ.° 」	16・17 行目の C の発話 「>そりゃ違う<.おまえの部屋が埃っぽいだけ.」	10 行目から 15 行目までのやりとりの後（15 行目の E の発話に割り込む）	・「引き金」の発話の産出者の E が述べた理由・根拠への否定 ・E の所有物に対するネガティブな評価
	事例 5-3	23・27 行目の C 「後半は俺がずっと質問してた. .hh 女の子ってこうゆうとこあるよねみたいな.」	29 行目の E の発話 「うざかったね?」	27 行目の C の発話が産出されて 1.1 秒経過	・「観衆」に向けて、「引き金」の発話の産出者の C へのネガティブな評価に対して同意を求める
			32 行目の E の発話 「Huhhuh ここはここで面白かったって.huhu .hh」		・笑いながら「観衆」の発話の繰り返し ・引用マーカー「って」

（続）表 6-1 本論文において分析した全ての「誰かを笑うこと」事例のまとめ

		「引き金」の発話	分析において注目する遊戯的な発話部分	遊戯的な発話のローカルな位置	遊戯的な発話のデザイン
「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」	事例 5-2	16・21・22 行目の佐久の「なんかあたしたちがいってた高校の:となりの駅で:, よくいってたんですよ. むかし::とたぶんだいぶ違うと思います.」	24 行目の萌の発話「. hh ¥あたしはいってなかったよ:? ¥ 」	22 行目の佐久の発話に割り込む	・笑いを含む口調で「引き金」の発話の産出者の佐久の発話への訂正（佐久と同じ成員カテゴリーに属していたことを訂正） ・ジェスチャー ・身体の向き
			34 行目の萌の発話「hh 体操部ちょっと不良だっ(h)たん(h) で(h):. hhh」		・「観衆」に向けて、笑いながら「引き金」の発話の産出者の佐久へのネガティブな評価 ・ジェスチャー
			37 行目の玲奈の発話「. hh ちょっと不良だったのね?」		・「からかい」に聞こえる萌の発話とジェスチャーを繰り返し、萌に確認を求める

（続）表 6-1 本論文において分析した全ての「誰かを笑うこと」事例のまとめ

		「引き金」の発話	分析において注目する遊戯的な発話部分	遊戯的な発話のローカルな位置	遊戯的な発話のデザイン
「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」	（続）事例 5-2		40 行目の萌の発話 「不良グループだったんですよ:. huhuh huh heh」		・自分が発した「からかい」に聞こえる発話における「挑発性」要素を繰り返す ・ジェスチャー ・笑い、顔の表情
			42 行目の玲奈の発話 「>不良グループだったの, 実は <」		・再度からかう側の萌の発話における「挑発性」要素とジェスチャーを繰り返す ・顔の表情
			46 行目以降の玲奈の発話 「あなたこうさしてた人? 」 「あ:の:パステルカラーの, シャーペンを」 「あ:, 不良だな:.」 「まあなんていかんわね:?」		・先行する「からかい」のエスカレーション ・ジェスチャー ・顔の表情 ・身体の向き

では、笑いを含む口調での発話の繰り返しはなぜしばしば利用されているのだろうか。冗談やユーモラスな話に対する笑いに関する研究を行なった Sacks（1974）の分析によると、冗談の後の笑いが持つ１つの重要な機能として、冗談に対する理解および評価を示すことが挙げられる。先行発話における具体的な「面白み」を理解したからこそ、笑いを含む口調でその「面白み」を繰り返すことができるのである。

表 6-1 には、もう１つ興味深い特徴がある。“普通”の「誰かを笑うこと」を比べると、「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」における遊戯的な発話が産出される位置（ローカルな位置）は、概ね「引き金」の発話とやや離れているということである[85]。この点については、第 4 章で考察した「からかい」を行う前の「準備」が関わっていると考えられる。すなわち、参与者はしばしば二段階または数段階の手順を踏んで、相手をからかう。連鎖上、「引き金」の発話に「逸脱」、「過剰さ」、「おかしさ」を顕在化または焦点化する「準備」が必要であることが推察される。ただし、この点については、さらに詳細に検討する必要があるので、「からかい」の特徴としては挙げないことにする。

最後に、表 6-2 から、からかう側が積極的にその場にいる参与者を「遊び」に巻き込むという特徴が見出せる。

表 6-2 から、Drew（1987）で指摘されているからかわれる側のポーカーフェースの反応が見られる。他方、その場にいる参与者には、笑いという反応が多いという点が見られる。加えて、第 5 章で分析したように、その場にいる参与者（「観衆」）は、からかう側と協同的に「からかい」を構築するという点も見られている。さらに、第 3 章の事例 3-8 では、その場にいる参与者である B と F（観衆）が、笑いながらからかう側である C の「からかい」発話を繰り返すことで、C と共に E を「からかい」の対象として笑うことを達成している。このような、その場にいる参与者の反応の特徴から、「『からかい』の提起者は、積極的にまわりの人をまきこむことによって『からかい』のゲームを成立させようとする」（江原 1985: 178）と考えられた。

[85] この特徴は、本論文で分析した「からかい」の事例だけではなく、筆者のデータベースにおける他の事例からも見られる。呉・松村（2018）で分析した３つ事例も参照されたい。

表 6-2 笑われた者とその場にいる参与者の反応

		笑われた者の反応	他の参与者の反応
“普通”の「誰かを笑うこ	事例 3-4	・笑い	（店員の顔の表情は不明）
	事例 3-5	・無反応（現在の話題について話し続ける）	・現在の話題について話し続ける
	事例 3-6	・抵抗を示す	・現在の話題について話し続ける
「からかい」の対象としての「誰かを笑うこと」	事例 3-7	・笑い ・からかう側を叩く	・参与していない
	事例 3-8	・視線をそらす ・他の参与者に向けて、「からかい」発話に関連ない発話を産出する ・身体を捻ってテーブルに置いてある紙をじっとみる	・笑いながらからかう側の「からかい」の発話を繰り返す
	事例 4-2	・決まりの悪さから逃げようとしているしぐさ	・笑い（爆笑）
	事例 4-3	・からかう側の発話を否定する ・理由を加える	・笑い
	事例 5-2	・笑い ・からかう側の発話を否定する ・「からかい」の発話に「同意」する[86]	・からかう側と協同的に「からかい」を構築
	事例 5-3	・真剣顔	・からかう側の「からかい」の提案を拒絶する ・笑い ・からかわれる側のための代弁

[86] 事例 5-2 の後の展開では、佐久は、「からかい」の発話における「不良」ということを取り上げ、笑いながら「だってみんな不良だから」と発話している。

6.3 おわりに

本章では、3 章から 5 章までに分析した事例における「からかい」の発話のデザインの特徴とからかわれる側の反応とその場にいる参与者の反応をまとめた。これらを踏まえ、「遊び」としての「からかい」が、次の 2 つの相互行為的特徴を持っているということが明らかにした。1 つは、「からかい」の発話に他者発話の（部分）繰り返しが多く利用されるということである。もう 1 つは、からかう側が積極的にその場にいる参与者を「遊び」に巻き込むということである。

第 7 章　結論

7.1 本論文の概要

本論文では、「からかい」を行う方法や手続きを明らかにするために、相互行為分析の観点から日本語会話における「からかい」を考察した。

各章では、以下の点について述べた。

第 1 章では、まず研究の出発点として、「からかい」及び「遊び」一般の重要性を述べた。次に、「からかい」の定義を述べた。加えて、日本語会話に基づいた「からかい」の研究の現状を紹介し、本論文の位置付けを示した。その後、なぜ相互行為分析で「からかい」に取り組むのかという疑問に対しては、相互行為分析の概要を示した上で、相互行為分析で「からかい」に取り組む利点を述べることで回答した。最後に、本論文の研究目的を提示し、論文の構成を示した。

第 2 章は、本論文が扱う方法論を説明した。まず、相互行為分析の中心とまり会話分析の基本的な考え方と分析概念について述べた。具体的には、会話分析の基本的視点と中心的な考え方などの検討を通し、会話分析ではどのようにして行為を記述するかという「行為の構成と理解」について詳しく説明した。さらに、これまで会話分析で明らかになった「連鎖組織」、「優先組織」、「順番交替組織」、「修復」、「遡及的連鎖」などの手続きを確認した。次に、発話と共起する非言語行動を中心に扱うマルチモダリティについて、視線とジェスチャーを例にして確認をした。会話の参与枠組みについても述べ、最後に、データの概要とデータの示し方を説明した。

第 3 章では、「遊び」の研究でよく注目されている笑いながら他者の発話を繰り返すという形式の発話に注目した。具体的には、当該の話題が真剣に進められているという文脈において、話者 A に「遊戯要素」が含まれた発話が産出され、話者 B は笑いながらその「遊戯要素」を繰り返すことで何を成し遂げているのか、を分析した。分析から得られた結果は、以下の通りである。

まず、相互行為の参与者は、笑いながらの繰り返しを用いることで、連鎖上で自分自身にとっての「笑うべきもの」を明確に示していた。次に、繰り返された発話の話者が示すスタンスによって、先行話者と共に笑うことを達成するのか、または先行話者を笑うことを達成するのかを、区別していた。先行話者を笑うことが達成されている事例の中では、先行話者を「からかい」の対象として笑うことが達成されているものがあった。それらの事例では、繰り返された「遊戯要素は、その産出者（からかわれる側）にしてみれば、「目立たない」「普通な」ものであった。しかし、繰り返す側（からかう側）は、敢えてその「遊戯要素」に現れたアイデンティティーやカテゴリーを「逸脱した」ものとして捉え、繰り返すことでその「逸脱性」を焦点化していた。そうすることで、相手をからかっていた。最後に、「誰かと共に笑うこと」か「誰かを笑うこと」か、というのは、明確に

線引きができるものではなく、会話が刻一刻と変化していく中での参与者の志向性についての描写であることを強調した。

第 4 章では、「からかい」が行われる前の段階で産出されている「ん?」「え?」「なに?」などの無限定の質問に着目した。相互行為の参与者が「からかい」を行う前に「ん?」「え?」「なに?」などの発話を産出することで、具体的にどのような内容の「準備」を行なっているのか、そして、次の段階で参与者がいかに相手をからかっているのか、を分析した。

一般的に、無限定の質問は、参与者が聞き取りの問題に直面している時に用いる 1 つの慣用手段とされる。しかし、第 4 章で考察したように、二人が同時にまたは順次に無限定の質問を産出する連鎖の中で、参与者はトラブル源との距離や顔の表情などを利用し、直面しているのが聞き取りの問題ではなく発話の容認性の問題、すなわち、何らかの規範から逸脱したものを連鎖上の焦点として際立たせていた。この「準備」ができた後に、容認の問題そのものまたは容認の問題に対する修復の実行をターゲットにし、相手をからかう、ということがわかった。

第 5 章では、「からかい」の協同構築で、「観衆」がどのような振る舞いをしているのかについて、2 つの事例分析を行った。1 つは、「観衆」がからかう側のスタンスに寄り添いつつ、からかう側と協同的に「からかい」を構築する事例であった。もう 1 つは、「観衆」がからかう側のスタンスに寄り添わない態度を示すものであった。この場合、自分の振る舞いがからかう側に利用され、結果的に、「からかい」の協同構築になっている事例もあった。「観衆」は、異なる連鎖環境において様々な振る舞いをしているが、いかに中立的なスタンスを取るのかという課題に常に直面している、ということがわかった。

第 6 章では、3 章から 5 章までの分析を踏まて、「遊び」としての「からかい」の特徴を考察した。「遊び」としての「からかい」が次の 2 つの特徴を持っていることが明らかになった。1 つは、「からかい」の発話に他者発話の（部分）繰り返しが多く利用されるということであった。もう 1 つは、からかう側が積極的にその場にいる参与者を「遊び」に巻き込むということであった。

7.2 研究の意義

本節では、本論文の研究意義を 2 点述べる。

第一に、本論文は会話分析という研究分野に貢献した。繰り返し述べたように、会話分析は、ふだん自明とされている相互行為を成し遂げるために、人々が用いている方法や手続きを明らかにすることを目指す研究分野である。本論文では、「からかい」を達成するために、笑いながらの繰り返し、無限定の質問から開始する修復、「観衆」との協力などの資源（プラクティス、手続き）が参与者に利用されることを明らかにした。さらに、本論文の第 4 章で着目した無限定の質問は修復開始装置であるが、Drew（1997）も指摘しているように、その汎用性により、様々な連鎖で使用可能であることにも言及した。参与者は「からかい」を行う前に、無限定の質問を産出することで先行

発話に現れた容認性の問題、つまり、何らかの規範からの逸脱を連鎖上の焦点として際立たせているという点が、無限定の質問の汎用性を裏付ける証拠となると考えられた。これらの成果は、今後の会話分析研究に資すると考えられる。

第二に、「からかい」研究に対する学術的貢献をもたらすことができたと考える。本論文では、「からかい」はいかに参与者によって相互的に達成されるのかを議論した。この点は、からかう側の発話を中心に展開されたこれまでの研究に示唆を与えうる。従来の「からかい」研究の多くでは、笑いや「観衆」の反応は、発話が「からかい」であるかどうかを判断する指標とされてきた。本論文では、先行話者（からかわれる側）を笑うことの中で「からかい」を位置付けることで。そうすることで、その都度の参与者のスタンスが重要な役割を果たしていることを示すことができた。さらに、「観衆」は決して発話を聞く者に留まらず、「からかい」の構築に大きく貢献もしていることも明らかにした。

7.3 今後の課題

本論文で明らかにした「からかい」連鎖構造の特徴は、「からかい」研究の一端に過ぎない。本論文の 3 つの課題により明らかになった連鎖構造は遡及的連鎖である。今後は、先行発話の一部の繰り返しにより開始した修復連鎖や、ネガティブな評価を含めた連鎖について、会話データを増やし、より詳しく検討したい。さらに、「からかい」研究から得られた示唆を日本語教育に活かす試みも考えたい。「『からかい』とそれに対する反応を適切に行うことは、親密な関係にあることの認識を、やりとりを通して示すことであり、そのやり方を知ることは、非母語話者が日本語での雑談に、親しい仲間として参加できるようになるために重要である。しかし、この点について、日本語教育の分野で論じられることはこれまでほとんどなかった」[87]。そこで、日本語教育のための会話教育教材開発へ応用する手立てを探ることを今後の課題とする。

[87] 当該の科学研究費助成事業研究報告書にはページが振られていない。「研究開始当初の背景」の部分より引用した。

参考文献

Alberts, J. K. (1992) An inferential/strategic explanation for the social organization of tease. *Journal of Language and Social Psychology*, 11 (3), 153-177.

Couper-Kuhlen, E. and Ono, T. (2007) 'Incrementing' in conversation: A comparison of practices in English, German and Japanese. *Pragmatics,* 17(4), 513-552.

Bateson, G. (1972) A theory of play and fantasy. In *Steps to an Ecology of Mind*, pp.177-193. New York: Ballantine. （グレゴリー・ベイトソン［佐藤良明訳］「遊びと空想の理論」『精神の生態学』258-279, 思策社, 1990.）

Brigitte, J. and Austin, H. (2015) Interaction Analysis: Foundations and Practice, *Journal of the Learning Sciences*, 4(1), 39-103.

坊農真弓・高梨克也（編）(2009)『多人数インタラクションの分析手法（知の科学）』オーム社.

陳力（2018)「テレビ番組のインタビュー・トークにおける発話デザインの相互行為的分析」九州大学大学院地球社会統合科学府博士論文.

Drew, P. (1987) Po-face receipt of teases, *Linguistics*, 25, 219-253

Drew, P. (1997) 'Open'class repair initiators in response to sequential sources of troubles in conversation, *Journal of Pragmatics*, 28(1), 69-101

Drew, P. and Walker, T. (2009) Going Too Far: Complaining, Escalating and Disaffiliation. *Journal of Pragmatics*, 41 (12): 2400-2414.

團康晃（2013)「指導と結びつきうる「からかい」―「いじり」の相互行為分析―」『ソシオロジ』58(2), 3-19, 社会学研究会.

Eder, D. (1993) "*Go get ya a fench!*": Romantic and sexual teasing among adolescent girls. In D. Tannen (Ed.), *Gender and conversational interaction: Oxford studies in sociolinguistics* (pp.17-31). New York: Oxford University Press.

Egbert, M. (2004) Other-Initiated Repair and Membership Categorization--Some Conversational Events That Trigger Linguistic and Regional Membership Categorization. *Journal of Pragmatics*, 36 (8), 1467-98.

榎本美香・伝康晴（2004)「3 人会話における聞き手のちょっとした振る舞いについて」『社会言語科学会第 14 回発表論文集』162-165.

榎本美香・伝康晴（2011)「話し手の視線の向け先は次話者になるか」『社会言語科学』14(1), 97-109.

遠藤智子・横森大輔・林 誠（2017)「確認要求に用いられる感動詞的用法の「なに」―認識的スタンス標識の相互行為上の働き―」『社会言語科学』20 (1), 100-114.

Endo, T. (2018) The Japanese Change-of-State Tokens a and Aa in Responsive Units. *Journal of Pragmatics*, 123, 151-66.

遠藤由美（2007）「役割と社会的スキルがからかい認知に及ぼす影響」『社会学部紀要』38 (3), 119-131, 関西大学.

遠藤由美 (2008)「からかいの主観的理解 : 役割と他者への一般的態度の影響」『社会学部紀要』39(3), 1-16, 関西大学.

江原由美子（1985）『女性解放という思想』勁草書房.

Geyer, N. (2010) Teasing and ambivalent face in Japanese multi-party discourse. *Journal of Pragmatics*, 42 (8), 2120-2130.

Goffman, E. (1967) *Interaction ritual: essays on face-to-face interaction*. Oxford, England: Aldine.

Goffman, E. (1974) *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. New York: Harper and Row.

Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*. Philadephia: University of Pennsylvania Press.

Goodwin, C. (1981) *Conversational organization: Interaction between speakers and hearers*. New York: Academic Press.

Goodwin, C. (1987) Forgetfulness as an Interactive Resource. *Social Psychology Quarterly*, 50 (2), 115-130.

Glenn, P. J., and Knapp, M. L. (1987) The interactive framing of play in adult conversations. *Communication Quarterly*, 35, 48-66.

Glenn, P. J. (2003) *Laughter in Interaction*. Cambridge University Press, Cambridge.

Gumperz, J. J. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Gumperz, J. J. (1992) Contextualization and understanding. In A. Duranti. and C. Goodwin. (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*, 229-252, Cambridge: Cambridge University Press.

初鹿野阿れ・岩田夏穂（2008）「選ばれていない参加者が発話するとき―もう一人の参加者について言及すること―」『社会言語科学』10 (2), 121-134.

初鹿野阿れ・岩田夏穂. （2014）「話の展開のやり方をターゲットとして「からかい」の分析」『社会言語科学会第 34 回大会発表論文集』34-37.

初鹿野阿れ・岩田夏穂（2016）「教材開発に向けた「褒め」と「からかい」への反応の分析 ―会話分析の観点から―」2016 年日本語教育国際研究大会口頭発表.

初鹿野阿れ・岩田夏穂（2017a）「「からかい」連鎖の構造と相互行為における環境」柳町智治・岡田みさを（編）『インタラクションと学習』25-42, ひつじ書房.

初鹿野阿れ・岩田夏穂（2017b）「会話分析を用いた「からかい」の分析 ―日本語会話教材の開発に向けて―」科学研究費助成事業研究成果報告書.

Haugh, M. (2014) Jocular mockery as interactional practice in every Anglo-Australian conversation. *Australian Journal of Linguistics*, 34(1),76-99.

Haugh, M. (2016) "Just kidding": teasing and claims to non-serious intent. *Journal of Pragmatics*, 95,120-136.

Haugh, M. (2017) Teasing. In Salvatore Attardo (Eds.), *The Routledge Handbook of Language and Humor*, 204-218. Routledge.

Haugh, M. and Pillet-Shore, D. (2018) Getting to Know You: Teasing as an Invitation to Intimacy in Initial Interactions. *Discourse Studies*, 20(2), 246-69.

Hayano, K. (2013) *Territories of knowledge in Japanese interaction*. Doctoral dissertation, Radboud University Nijmegen, Nijmegen.

林誠（2008）「相互行為の資源としての投射と文法 ―指示詞「あれ」の行為投射的用法を巡って―」『社会言語科学』10(2), 160

Hayashi, M. (2009) Marking a 'noticing of departure' in talk: *Eh*-prefaced turns in Japanese conversation, *Journal of Pragmatics*, 41(10),395-425.

Hayashi, M. and Hayano, K. (2013) Proffering insertable elements: A study of other-initiated repair in Japanese. In M. Hayashi., G. Raymond. And J. Sidnell. (Eds.), *Conversational repair and human understanding*, pp.293-321. Cambridge: Cambridge University Press.

Hayashi, M. and Hayano, K. (2018) A-prefaced responses to inquiry in Japanese. In Heritage J. and M.-L. Sorjonen (Eds.), *Between Turn and Sequence: Turn-Initial Particles Across Languages*, pp.191-224. Amsterdam: John Benjamins.

Heritage, J. (1984a) *Garfinkel and Ethnomethodology*. Polity Press, Cambridge.

Heritage, J. (1984b) A change-of state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atskinson. and J. Heritage. (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 299-345. Cambridge: Cambridge University Press.

平本毅（2015）「「絶句」の会話分析」『立命館産業社会論集』51 (1), 239–254.

平本毅（2016）「物を知らないことの相互行為的編成」『フォーラム現代社会学』15, 3-17.

Holt, E. (2016) Laughter at Last: Playfulness and laughter in interaction, *Journal of Pragmatics*, 100, 89-102.

細馬宏通（2007）「微笑と哄笑の個人間相互作用」『社会言語科学会第 20 回大会発表論文集』241-250.

Huizinga, J. (1955) *Homo Ludens: a study of play-element in culture*（ヨハン・ホイジンガ［高橋英夫訳］『ホモ・ルーデンス：人類文化と遊戯』中央公論社, 1963

古山宣洋（2002）「発話と身振りの記号論：個人内及び個人間での発話と身振りの協調による談話の構造化」斎藤洋典・喜多壮太郎（編）『ジェスチャー・行為・意味』55-79 共立出版.

Jefferson, G. (1972) Side sequence. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in social interaction*, 294-338. New York: Free Press.

Jefferson, G. (1979) A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance/declination. In G. Psathas (Ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 70-96. New York: Irvington.

Jefferson, G. (2004) Glossary of transcript symbols with an introduction. In G. Lerner. (Ed), *Conversation analysis: Studies from the first generation*, 13-31. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Jefferson, G., Sacks, H., and Schegloff, E. (1977) *Preliminary notes on the sequential organization of laughter*. (Pragmatics Microfiche). Cambridge: Cambridge University, Department of Linguistics.

城綾実（2013）「相互行為におけるジェスチャーの同期とその産出過程」滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士論文.

城綾実（2017）「相互行為における身体・物質・環境」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実（編）『会話分析の広がり』97-126, ひつじ書房.

片岡邦好・池田佳子・秦かおり（編）（2017）『コミュニケーションを枠づける–参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版.

Keltner, D., Capps, L., Kring, A. M., Young, R. C. and Heerey,E. A. (2001) Just Teasing: A Conceptual Analysis and Empirical Review. *Psychological bulletin*, 127, 229-48.

Kendon, A. (1967) Some function of gaze-direction in social interaction, *Acta Psychologica*, 26, 22-63.

Kendon, A. (2004) *Gesture: Visible action as utterance.* Cambridge University Press.

喜田壮太郎（2002）「人はなぜジェスチャーをするのか」斎藤洋典・喜田壮太郎（編）『ジェスチャー・行為・意味』1-23, 共立出版.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉（2017）「『日本語日常会話コーパス』の構築」『言語処理学会第 23 回年次大会発表論文集』775-778.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉（2019）「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版コーパスの設計と

特徴」国立国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書 3
串田秀也（1999）「助け船とお節介」好井裕明・山田富秋・西阪仰（編）『会話分析への招待』124-147，世界思想社.
串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析 ―「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化―』世界思想社.
Kushida, S. (2011) Confirming understanding and acknowledging assistance: Managing trouble responsibility in response to understanding check in Japanese talk-in-interaction. *Journal of Pragmatics,* 43, 2716-2739.
串田秀也・林 誠（2015）「WH 質問への抵抗 ―感動詞「いや」の相互行為上の働き―」友定賢治(編)『感動詞の言語学』169-211，ひつじ書房.
串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房.
Lee, S. H. and Tanaka, T. (2016) Affiliation and Alignment in Responding Actions. *Journal of Pragmatics*, Vol.100, 1-7, Elsevier.
Levinson, S. C. (1988) Putting linguistics on a proper footing: Explorations in Goffman's concepts of participation. In P. Drew and A. Wootton (Eds.), *Erving Goffman: Explorations the interaction in order*, 161-227. Oxford, England: Polity Press.
Machi, S. (2014) Repetition as a Device for Teaming and Teasing in Triadic Conversation in Japanese. *Studies in English and American Literature*, 49, 61-79.
MacWhinney, B. (2007) The TalkBank Project In J. C. Beal., K. P. Corrigan and H. L. Moisl. (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1, 163-180. Houndmills: Palgrave-Mecmillan.
牧亮太（2008）「からかい行動（teasing）に関する研究の動向と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』3 (57), 269-276.
牧亮太・湯澤正通（2011）「幼児の遊びにおけるからかいの機能」『保育学研究』49 (2), 30-40.
水川喜文 (1992)「笑いの社会的組織化 ―会話分析の知見から―」『Sociology Today』3, 28-42, お茶の水社会学研究会.
水川喜文（1993）「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロゴス』17, 79-91.
水島梨紗（2006）「日本語日常会話における「からかい表現」のフレーム分析」『Human Communication Studies』34, 53-72，日本コミュニケーション学会.
水島梨紗（2008）「談話のダイナミズムと方略プロセスの相互関連性に関する研究：からかい行為のコミュニケーション分析」北海道大学国際広報メディア研究科博士論文.
Mondada, Lorenza. (2007) Multimodal resources for turn-taking: pointing and the emergence of possible next speakers. *Discourse Studies*, 9(2), 194-225.

難波彩子（2017）「日本語会話における聞き手のフッティングと積極的な関与」片岡邦好・池田佳子・秦かおり（編）『コミュニケーションを枠づける―参与・関与の不均衡と多様性』109–129, くろしお出版

西阪仰（2001）『心と行為：エスノメソドロジーの視点』岩波書店.

西阪仰（2008a）「発言順番内において分散する文：相互行為の焦点としての反応機会場」『社会言語科学』10 (2), 83-95.

西阪仰（2008b）『分散する身体：エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』勁草書房.

西阪仰（2009）「活動の空間的および連鎖的な組織 ―話し手と聞き手の相互行為再考―」『認知科学』16 (1), 65-77.

Oloff. F. (2018) “Sorry? ”/“Como? ”/“Was? ” Open class embodied repair initiators in international workplace interactions. *Journal of Pragmatics*, 126, 29-51.

大津友美（2004）「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス ： 「遊び」としての対立行動に注目して」『社会言語科学』6 (2), 44-53.

大津友美（2007）「会話における冗談のコミュニケーション特徴 ―スタイルシフトによる冗談の場合―」『社会言語科学』10 (1), 45-55.

Pawluk, C. J. (1989) Social Construction of Teasing. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 19, 145-167.

Pomerantz, A. (1984a) Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/disprefreferred turn shapes. In J.M. Atkinson and J. Heritage. (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 57-101. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Pomerantz, A. (1984b) Pursuing a response. In J.M. Atkinson and J. Heritage. (Eds.), *Talk and social action: Studies in conversation analysis*, 152-163. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Radcliffe-Brown, A. R. (1952) *Structure and Function in Primitive Societies*. London: Cohen and West.

Robinson, J. D. (2006) Managing trouble responsibility and relationships during conversational repair. *Communication Monographs*, 73(2), 137-161.

Rossano, F. (2013) Gaze in Conversation. In J. Sidnell. and T. Stivers. (Eds.), *The Handbook of Conversation Analysis*, 308-329. Oxford: Blackwell.

Sacks, H. (1972) An initial investigation of the usability of conversational materials for doing sociology. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in social interaction,* 31-74. New York: Free Press.

Sacks, H. (1974) An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation. In J. Sherzer. and R. Bauman. (Eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking,* 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.

Sacks, H. (1984) Notes on methodology. In J.M. Atkinson and J. Heritage. (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 21-27. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Sacks, H., Schegloff, E.A. and Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language,* 50(4), 696-735.（ハーヴィー・サックス, エマニュエル・シェグロフ, ゲイル・ジェファーソン.［西阪仰訳］「会話分析のための順番交替組織―最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集―順番交替と修復の組織』7-153, 世界思想社, 2010.）

坂井田瑠衣・諏訪正樹（2015）「身体の観察可能性がもたらす協同調理場面の相互行為」『認知科学』22(1),110-125.

佐藤良・竹内勇剛（2013）「多人数対話におけるロボットの視線行動に基づく発話権と対話場のデザイン」Human-Agent Interaction Symposium http://hai-conference.net/proceedings/HAI2013/html/paper/paper-S-5.html ,2019/12/01 アクセス.

Schegloff, E. A. (1968) Sequencing in conversational openings, American Anthropologist, 70(6), 1075-1095.

Schegloff, E. A. (1996) Confirming Allusions: Toward an Empirical Account of Action, American Journal of Sociology, 102(1),161-216. （エマニュエル・A・シェグロフ.［西阪仰訳］「仄かしだったと認めること―行為の経験的説明に向けて」『会話分析の方法–行為と連鎖の組織』101-194, 世界思想社, 2018.）

Schegloff, E. A. (2007) *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis1*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schegloff, E. A., Jefferson, G. and Sacks, H. (1977). The Preference for self-correction in the organization of repair in conversation, *Language*, 53(2), 361-382.（エマニュエル・A・シェグロフ, ゲイル・G・ジェファーソン, ハーヴィー・サックス.［西阪仰訳］「会話における修復の組織―自己訂正の優先性」『会話分析基本論集―順番交替と修復の組織』155-246, 世界思想社, 2010.）

Schegloff, E. A. and Sacks, H. (1973) Opening up closing, *Semiotica*, 8, 289-327.

Shapiro, J. P., Baumeister, R. F., and Kessler, J. W. (1991) A three-component model of children's teasing: aggression, humor and ambiguity. *Journal of Social and Clinical*

Psychology, 10(4), 459-472.

Stivers, T. (2008) Stance, alignment, and affiliation during storytelling: when nodding is a token of affiliation. *Research on Lanuage and Social Interacion*, 41, 31-57.

Stivers, T., Mondada, L. and Steensig, J. (2011) Knowledge, morality, and affiliation in social interaction. In T. Stivers., L. Mondada. and J. Steensig. (Eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*, 3-24. Cambridge University Press, Cambridge.

Straehle, C. A. (1993) "Samuel? ""Yes, Dear? ": Teasing and conversation rapport. In D. Tannen. (Ed.), *Framing in discourse,* 210-230. New York: Oxford University Press.

鈴木佳奈・山本真理・鈴木亮子・伝康晴（2014）「遡及的に構成される発話連鎖の諸特徴」『第5回コーパス日本語ワークショップ予稿集』109-116.

Svennevig, J. (2008) Trying the easiest solution first in other-initiation of repair. *Journal of Pragmatics*, 40, 333-348.

千々岩宏晃（2013）「「からかい」の相互行為的達成：「あなたに関する知識」を用いた発話の一用法」『日本語・日本文化研究』23, 129–141.

高木智世・細田由利・森田笑（2016）『会話分析の基礎』ひつじ書房.

Takanashi, H. (2004) *The interactional con-construction of play in Japanese conversation*, Dorctoral Dissertaion, Linguistics Department, University of California, Santa Barbara.

高梨博子（2016）「遊びのフレームにおける間主観的個性の形成に関する考察 ―スタンステーキングの視点から―」『社会言語科学』19(1), 103-117.

高梨克也（2016）『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』京都：ナカニシヤ出版.

薄井明（2007）「「隣接ペア」再考」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』14, 75-82.

呉青青・松村瑞子（2018）「なぜ「からかい」として理解することが可能なのか―「じゃ」で始まる確認要求を用いた発話に着目して―」『言語文化論究』41,17-31.

安井永子（2017）「発話と行動の割り込みにおける参与―話し手の振る舞い「について」の描写が割り込む事例から―」片岡邦好・池田佳子・秦かおり（編）『コミュニケーションを枠づける―参与・関与の不均衡と多様性』155–175, くろしお出版.

安井永子（2019）「笑いの対象に向けられる指さし–からかいにおける志向の分散と参加のフレームの組織化―」安井永子・杉浦秀行・高梨克也（編）『指さしと相互行為』123-157, ひつじ書房.

安井永子・杉浦秀行（2019）「相互行為における指さし–ジェスチャー研究、会話分析研究による成果」安井永子・杉浦秀行・高梨克也（編）『指さしと相互行為』3-34, ひつじ書房.

山本真理（2014）「物語の受け手におけるセリフ発話：参与者間の共感関係の構築に関する会話分析的研究」北海道大学国際広報メディア研究科博士論文.

辞書

『広辞苑（第六版)』(2008）岩波書店.

謝辞

未熟な自分が、この博士論文を書き上げることができたのは、ひとえに数多くの方々のご指導ならびにご支援のおかげである。ここに記して感謝の意を表したい。

まず、指導教員であり本論文の主査をつとめていただいた松村瑞子先生に最大の感謝の意を表したい。九州大学に入学する前に、「呉さん、入試頑張ってください。」という返信メールをいただいて、当時進学するか帰国するか悩んでいた、心細かった私にとって温かい励ましであった。それで、進学することを決意した。談話分析に興味をもって入学した私を受け入れてくださり、常に励まし、導き、指摘し、見守ってくださった。私は修士課程 1 年生の後期に会話分析を学び始めたが、松村先生は私自身の学問的な興味関心を尊重し、私の努力を認めてくださった。さらに、何度も奨学金の推薦書を書いてくださった。松村先生がいなければ今の私はないと言っても過言ではない。

副指導教員かつ本論文の副査をご担当いただいた井上奈良彦先生、山村ひろみ先生は、日々の研究生活で丁寧なご指導、ご助言、温かい励ましの言葉をくださっていた。両先生からは、審査の過程を通じ、有益なアドバイスと示唆に富んだコメントをいただいた。また、社会学専門の杉山あかし先生に、副査を担当いただくことができた。本論文で言及している社会学の背景知識に的確なご指摘をいただいた。

本論文の研究方法についてご指導をいただいた横森大輔先生に感謝する。横森先生は、2014 年 12 月に九大会話分析自主ゼミを設けて、会話分析の基礎を学ぶための機会を与えくださった。2015 年 3 月にデータセッションで何をするかさえよくわかっていなかった私に、筑波大学におけるデータセッションでデータ提供の機会を与えてくださった。その時にディスカッションしている会話分析の研究者たちのキラキラした姿に憧れて、博士後期課程に進学することに決意した。横森先生には、修士課程から現在に至るまでの長きに渡って、言語研究と会話分析の研究の厳しさと楽しさ、論文の書き方や研究コミュニティの広げ方などを教えていただいている。加えて、リサーチアシスタントなどの機会を与えていただいて、会話データの書き起こしのスキルを磨くことができた。さらに、横森先生のご紹介のおかげで、会話分析の研究者たちとの交流ができた。

会話分析という、魅力的でありながらやや近づき難い学問分野について、私が一定の理解を得ることができたのは、会話分析の初級者セミナーと関西 EMCA 互助会に負うところが大きい。会話分析初級者セミナーで串田秀也先生、林誠先生、森本郁代先生、川島理恵先生、平本毅先生に、会話分析の基本理論である「連鎖組織」と「修復の組織」について講義をいただいた。本論文の最終バージョンを提出するにいたるまで、関西 EMCA 互助会で拙劣な草稿を何度も（7 回もあると思う）検討していただいた。互助会のコアメンバーである平本毅先生、中

川敦先生、横森大輔先生、城綾実さん、妹尾麻美さん、尹ジンヒ（Yoon JinHee）さん、大石真澄さんに感謝する。博士論文の執筆ならびに審査の一年半、素晴らしい研究者たちに鋭い助言と有益なコメントをいただけることは、私にとってたいへん幸甚であった。この恩は、一生忘れられない。初級者セミナーでの受講と互助会での検討がなければ、私は会話分析の奥深さに気づけなかった。まだ会話分析に入門したばかりで、理解できていないことだらけであるが、このセミナーと互助会をきっかけに自分はすこし変われたと思っている。本当に何度も感謝を申し上げても足りないくらいの感謝を伝えたい。

博士後期課程で研究に専念できたのは、2 年間ロータリー米山記念奨学金をいただいているおかげである。米山記念奨学金の委員会ならび福岡城東ロータリークラブのロータリアンには、大変お世話になった。そして、素晴らしい奨学生の先輩・同期・後輩たちにも多くのことを習わせてもらった。

本論文の日本語の校正とコメントをしていただいた良永朋実さん、占部由子さん、長谷川順子さんに感謝する。修士課程に入学してから現在に至るまで、日本語の校正だけではなく様々な面で良永さんにお世話になっている。家族団欒の年末年始に論文全体のチェックという無理矢理なお願いを受け入れてくれた占部さんのおかげで、年明けに無事に論文を提出できた。そして、新型コロナウイルス感染拡大により大変お忙しい中、本論文の最終バージョンの日本語の修正のために、長谷川さんに貴重な時間と労力を割いていただいた。

また、会話分析の研究仲間である陳力さんに感謝する。陳さんの誘いのおかげで、横森先生および会話分析に出会った。そして、九州大学に入学して出会った友人たち、松村ゼミ先輩・同期・後輩たちにも感謝する。なお、友人たちの中でも、張小英さん、楊ブンランさん、そして王嬌さん（同志社大学）は、博士論文の執筆に関する悩みを聞いて応援をしてくれた。

最後になったが、家族への感謝を示したい。父と母からの長き渡るサポートにはどれだけの感謝を捧げても十分ではないだろう。そして、私のことを理解して温かく応援してくれる義父母にも感謝したい。また、研究の道を選んだ私を支え続けている夫に、尽くせない感謝の意を込めて、本論文を捧げたい。毎日元気で成長してくれる娘のおかげで、楽しい日々を過ごしている。我爱你们！

付録

各章の会話資料

【事例 3-2: CEJC-T001_014 04:04】

01 奥村: エジプトのあれには行かないっすか? ((師匠に向けて))

02 (1.2)

03 師匠: あ:. (0.6) イっすね.

04 (1.2)

((42 行(約 1 分間の語り)省略:

奥村の質問に対し、師匠がツタンカーメンの奥に隠し部屋があるらしいというニュースを提示した後、隠し部屋についてのやりとり))

46 (6.9)

47 師匠: (……)ね, なんか, (0.2) オモ-おもろいじゃないですか.

48 (3.4)

49 師匠: ((咳払い))

50 (0.7)

51 新田: [な る ほ ど.]

52 師匠: [あれでしょ,]あの頃のピラミッド建てるのも, (0.8)ちゃんとなんか,

53 奥村: うん.

54 師匠: 出-(0.5) 勤表かなんかつけて,

55 奥村: あ:((頷き))=

56 師匠: =なんか, (0.7)今日は休みますとか[ゆ]う(0.3)シ-(0.2)あれが残って=

57 奥村: [うん.]

58 師匠: =るんでしょ. (.) なんか,

59 奥村: 記録が出たんす[よね.]

60 師匠: [なん]かそうゆうのは残ってるみたい[っすよ:?]

61 新田: [な: ん]年=

62 =かかったんすか, あれ.

63 (.)

64 師匠: えっ?

65 (1.2)

66 新田: ピラミッドって作るのに何年かかったんすかね.

67 (0.6)

68 師匠: 知らな〜い. =hh Heheh [(し(h)ら-)Heh hehe]he =

69　新田:　　[huh　　Hehe　]
70　師匠:　=heh .HHE Hehehe　.hhe [.hHe
71 (新田):　　[(.hhh)　((食べ物を噛む音に近い))
72　　(0.3)
→73　新田:　[¥知らな〜い.¥]　((師匠の口調を真似している))
74　師匠:　[.hh　heh　　][heh hh　.hh　](焼き鳥を食べながら))
75　奥村:　　[hh hehe　heh]
76　　(1.6)
77　師匠:　((咳払い))でもまあ自分もあんま詳しくないからあれでしょ?　=
78　　=なんか, (0.4)公共事業でやってたとかゆう[説があるんでしょ?]
79　奥村:　　[うん　ふんふ　]ん.
((師匠は公共事業でやっていた説について詳しく説明する))

【事例 3-3: CEJC-C001_001 00:00:39 】
01　可奈:　美沙ちゃんもうスケボーやんないの?
02　　(0.6)
03　可奈:　[やってる?]
04　美沙:　[あ, あの][ね-]
05　玲子:　　[>あ]で<怪我は良くなったの. ((自分の臀部を叩きなら))
06　美沙:　あ, うん, あの[ねえ:]と(0.9)今もあの走ると:え:とね:ちょっとお尻=
07　玲子:　　[うん.]
08　美沙:　=がむずむずするんだよね.

((103 行 (2 分間程度) 省略))
代々木病院から笹塚にある整形外科まで通った経緯に関する内容 (1 分程度) とその整形外科がテレビ番組で紹介されたという内容 (1 分程度)

111　美沙:　でなんであの:長くなりましたが, お尻は, =
112　　= .hhh[大丈 夫 [で　す : .
113　愛香:　　[hehe heh [((笑っている表情, 音が出ないようである))
→114　玲子:　　[長(H)く(H)_な(H)[りま(H)[した heh=
115　可奈:　　[Heheh　[hehe
116　夏樹:　　[° hu°

117　美沙:　=.hh Hehe hehe[he .hhh
118　愛香:　[.hhh
119　玲子:　[.hhuh　=
→120　=［前(H)［置(H)］き(H)］長く［な(h)り］ ま(h)］したが.］ =
121　愛香:　［無［事(h) に?　 ］　［無(h) 事　］ に?　］((笑っている表情))
122　美沙:　［大 ］ 丈　夫　［で す:.］
123　美沙:　=お尻は大［丈夫］な ん［だけ［ど:なんか: ］むずむずはする.
124　玲子:　[.HHH]((笑っている表情))
125　愛香:　［良［かったね.］
126　玲子:　［う:ん. ］
127　可奈:　［う:ん.　］

【事例 3-4: CEJC-C001_004 00:02:03　AI の話の途中、店員が来た。】

01　店員:　［(U お待たせし)ました:。
01　玲子:　［(hh)
03　(.)
04　店員:　［(　)］お薦め焼酎［です.］
05　玲子:　[.hh　 ］　［うん］
06　辰嶋:　あすいません,あとカンパチの握りいただ［きたいのと: ］
07　店員:　［カンパチで.］
08　玲子:　うん
09　(.)
10　店員:　はい.
11　辰嶋:　あとちょっと寒いんです
12　(0.3)
13　店員:　かしこまりまし［た.　 ］
14　辰嶋:　［ちょっ］とあれしてもらえません［:
15　店員:　［はい
16　辰嶋:　［はい　］
→17　玲子:　［ちょっ］と(h)あれ(h)して(h)もら［え(h)ま(せん). Ha
18　辰嶋:　［hehe　heh　heh
19　店員:　［ありがとうございます.］
20　玲子:　［Ha　haha haha　 ］ Hehe .hh hehe

21　辰嶋:　あ (0.3)°彼ね.°　(0.4)彼[ね. ((指で引き戸のほうをさしている))
22　玲子:　　[うんうんうん.

【事例 3-5: CEJC-T009_014a 00:01:52】

01　安藤:　わたしでも歯が一本少ないんだよね.
02　　(0.7)
03　秀太:　どこの?　下の?(.) (...)
04　　(.)
05　安藤:　うん.
06　　(0.3)
07　秀太:　へ::.まあでもそれゆとりあるから.そしたら.
→08　柚本:　[ゆ(h)と(h)り]
09　安藤:　[んだいじょぶ]かも.
10　　(0.3)
11　秀太:　だいじょぶかも.((グラスを口元に,声がもぐもぐと聞こえる))

【事例 3-6: T009_014a 00:00:50】

01　安藤:　抜いた? ((俊明に向いて))
02　　(0.4)
03　俊明:　抜いてない。
04　　(0.2)
05　安藤:　顎ちっちゃい[じゃん.]
06　俊明:　　[顎　]ちっちゃい.
07　　(.)
08　柚本:　ね抜かなきゃ[じゃん.]
09　秀太:　　[そ れ]たぶんだんだんだんだん前歯が(0.5) =
10　　= クラッシュしてくるよってゆわれ[て :. ((俊明に))
→11　柚本:　　[ク(h)ラ[: :ッ(h)シュ]
12　俊明:　　[あ : .　]
13　秀太:　　[そうそう.] ((俊明に))=
14　　=クラッシュ[ってゆわれたもん. 俺.] ((柚本に))
15　安藤:　　[うん,　わ た し でも:]
→16　柚本:　heh ク(h)ラッ(h)[シュ .　°hhh°]=

17　安藤:　　［あれなんだよね,　］
18　柚本:　　=°huhu°（(0.4秒)）
19　安藤:　　あの(0.4)矯正してたんだよね.
20　　(0.2)
21　俊明:　　［(あ:)
22　秀太:　　［あ:［：　：　：　　］
23　柚本:　　［うん, ま:じで? ］　(0.2)　あたしも:.

【事例 3-7: Sakura06 00:00:00】

01　F:　［何話すの? アル［バイトについて hh］　どう(h)やって話せばいいの?
02　D:　［°hhhhhh°
03　G:　［°hhhhhhh°
04　E:　　［アルバイトについて］
05　　(0.7)
06　G:　前なんだったの?　((E に向かって))

((30 行省略：E による前回の収録についての語り))

36　E:　じゃあ一番アルバイトに情熱を持ってる［スちゃんから.］((スちゃん：F))
　　((少しの笑いを含む口調))
37　F:　　［huhu huh　　］
38　F:　［な(h)ん［で, hh*持っ(h)　t-*. hh］
F_頭　　*頭を振る　*
39　E:　［°huhh　［　huhuhuh °　　］
40　G:　［huhh　　［°huh 語ろう°　　］
41　D:　　［°huhh°　　((咳))　］
42　F:　え?　(0.2) パン大好きだもん.
43　E:　hu［hhuh　］
44　F:　　［huhhuh］
45　　(0.3)
46　E:　.HH(　(h)　)?
47　　(0.4)
→48　E:　.HH ♪大好き［だも～ん.　(0.4) ♪パンが大好きだ(h)［も-. HH Hehe ］=

((F の口調を真似している))

49　F:　　[HUHUHu ((笑いすぎで声が出ていない)) [.hh ((E を叩く))

50　E:　=.hh[hehe hh

51　F:　　[だって楽しいもんバイト.(.)ね.

【事例 3-8: Sakura04 00:01:31】

01　C:　ね[こね:]

02　F:　　[引っか]かれ[た?] ((断片の直前「猫の爪に引っかかれた」との関連))

03　C:　　[お]れ猫アレルギーだもん.

04　　(0.3)

05　E:　うん.

06　B:　毛?

07　　(.)

08　E:　でも,俺[犬]アレルギー° だよ.°

09　C:　　[うん.] ((B に向け,06 行目への応答))

10　　(.)

11　F:　え?

12　　(.)

13　C:　え?

14　　(0.7)

15　E:　くしゃみ出る(から)(0.3)うちの犬はわり[となんか.　　]

16　C:　　[>そりゃ違う<.]=

17　　=おまえのへやが埃っぽいだ[け.]

18　E:　　[ち][:がうよ. =

19　B:　　[HEHe hehe he

20　F:　　[huh huh

21　E:　= [.HH ちゃう[毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん.

22　B:　　[huh huh　[hh

23　F:　　[huh huh　[hhh

24　C:　　[° huh huh huhuh °

25　　(0.5)

26　E:　まっ[くす -マス]ク要るよね.((B に向けて))

27　B:　　[° う:ん°]

28　　(0.6)
29　B:　(え-) あた[しアレル[ギ　ー　は　　ない.huh
30　E:　　[hu hu　[huh huh
→31　C:　　[まっ(h)くすhuh huh hu
32　F:　[hh まっ(H)く(h)[す(h)
33　E:　[(hh hh)　　[アレルギー[は　　[ない　の　?　]
34　B:　[(h h)　　[ま(h)っく[す　°hh°　].hhu
→35　C:　[(hh)　　[まっくす(h)　　]い(h)る?
36　B:　Hehe[he hehe hehe
36　C:　　[.hhehe　hehe
37　B:　.hh え飼ってるなんか, どっちか?

【事例 4-3 CEJC-T001_014 00:00:00】

01　　(0.7)
02　師匠:　((咳払い))
03　　(1.0)
04　師匠:　((咳払い)) (.)えっ休みの日とか何やってるん?
05　　(0.4)
06　奥村:　.hh 休みの日は:((:/あ)そこ)女(h)の子(h)と遊び hh 行っ(h)たり h .hh
07　　(0.3)
08　奥村:　He.h
09　　(.)
→10　師匠:　[ん↑:]
→11　新田:　[え↑:]
12　　(0.2)
13　奥村:　あ(h) ¥あ[:そっ]か¥　ごめん hh　あ: そう°だったね.°
14　新田:　　[He　]
15　新田:　あ [そ] び行っ[(0.2)　] たり[してんすか:_]
16　奥村:　　[.hh]　　[h(吐く息)]　　[す : :　　]ぐらい=
17　　=[かな::とか ha あ(h): あ[とは::　[.h
18　師匠:　[Hehehe hh　hh　　[.HHE .H[HE hh　[HE]HAHA # hh=
19　新田:　　[°hh° [HE HE　H[E]
20　師匠:　=.H[HH ざっ(H)くり(h)し(h)て =

21　新田:　　[.Hh　　He　　.hh
22　師匠:　=[.HH　　]
23　新田:　[だって笑]いすぎ[っす(h)[よ..hhh　　]
24　奥村:　　[huHu　((タバコ息を吐く))
25　師匠:　　[>いや:いやいややく] いやいやいや =
26　　=もっとこういろんな[人]がね(.)[しゃべんないと]° いけないからな.°
27　奥村:　　[gh]　　[kheh .hh　　]
28　　(2.3)
29　新田:　なもうあれですよね,冬とか(0.2)スノボ行ったりします[もんね.]
30　奥村:　　[う　:　]ん.
31　師匠:　う::あん ((食べながら))

【事例 4-4: Sakura04 00:01:31】

01　C:　ね[こね:]
02　F:　[引っか]かれ[た?] ((断片の直前「猫の爪に引っかかれた」との関連))
03　C:　　[お]れ猫アレルギーだもん.
04　　(0.3)
05　E:　うん.
06　B:　毛?
07　　(.)
08　E:　でも,俺[犬　]アレルギー° だよ.°
09　C:　　[うん.] ((B に向け ; 06 行目への応答))
10　　(.)
→11　F:　↑え
12　　(.)
→13　C:　え?
14　　(0.7)
15　E:　くしゃみ出る(から)(0.3)うちの犬はわり[となんか,　　]
16　C:　　[>そりゃ違うく.]=
17　　=おまえの部屋が埃っぽいだ[け.]
18　E:　　[ち][:がうよ. =
19　B:　　[HEHe hehe he
20　F:　　[huh huh

21　E:　= [.HH ちゃう[毛がわりと抜ける犬だとすごいやばいもん.
22　B:　　[huh huh　[hh
23　F:　　[huh huh　[hhh
24　C:　　[° huh huh huhuh °

【事例 5-2: CEJC-K001_003b 00:00:05】

01　玲奈:　そうかい,いざとなったらその手がある[ってことなのね ?　][そうだ]ね:。
02　萌　:　　[そう, そうなんです][よ : .]
03　佐久:　経[堂ってでも]あれじゃん.
04　玲奈:　　[う:ん.　]((01 行目の自分の発話の続き))
05　　(0.2)
06　佐久:　あのガオカ((千歳丘高校の略称))のす[ぐ隣じゃん,[ね:.]
07　萌　:　　[あそうそう [そう]そう.]
08　玲奈:　　[経堂]ってい] =
09　　=いとこでしょ? [あれな-目黒だっけ?][° メ[ロ°　]
10　萌　:　　[でも経堂いい:で:す][えっ[とね世田] 谷=
11　佐久:　　[世田谷:.]
12　萌　: =[で [す.　]
13　玲奈:　[>世[田谷,そう]そうそうそう.<
14　佐久:　　[うん.　]
15　玲奈:　あれはあの:そうだね, 結構おハイソな=
16　佐久:　うん.[なんかあたしたちが]いってた高校の: [とな]りの駅で:,
17　玲奈:　　[ところだよね? そう]　　[うん.]
18　　(.)
19　玲奈:　あ [そ う : ^ な　 ん　] だ.]
20　萌　:　　[そ　 う　 : .　　]
21　佐久:　　[よくいっ てたんですよ.]むか]し::=
22　佐久: =[とた　[ぶんだいぶ]違うと思　い　ま[す.　]
23　玲奈:　[へ　 [: _　]　　[° う] ん : °]
24　萌　:　　[.hh　] ¥あたしはいって[な　][かった]よ [:?] ¥
25　佐久:　　[あ]
26　　(.)
27　佐久:　[あっそう?]

→28　玲奈:　[お：　?　　]
29　萌　：　あたし真面目だったん[で:,
→30　玲奈:　　[お：↑：
31　萌　：　[huhhuh　　[huh　[.hh]　　[体操部:　(.)　　hehe]　[.hhu hh　　]=
32　佐久:　[えっ? あた　[　し:][そっ]ちの[カラオケ屋さんとか,]　　[.ha そう　　]
→33　玲奈:　　[お：?]　　[あお　↑：　]
34　萌　：　= [hh 体操][部][ちょっと不良だっ(h)] [たん(h) [で(h):.]　hhh]
35　佐久:　　[.HHu　　][体　][操　部　：.　　]　　[hhh　]　HAHA]
→36　玲奈:　　[意外に　]　　] [ちょっと[(ブレ)]　huh]=
→37　玲奈:　= [.hh ちょっと不良だったの[ね?　]
38　萌　：　　[hhh　huh　　.HH　　[そう.]　=
39　佐久:　　[HAh　　hhh　　hh　[hh　]
40　萌　：　=[不良グループだったん[で すよ:. huhuh　huh　　]heh]
41　佐久:　　[.HHHU　Huhu　　[違 う よ 不　良 じゃ な　　] く.]
→42　玲奈:　　[>不良グループだったの,実は <]
→43　玲奈:　　[な [:ん だ:.]
44　萌　：　　[hh [hhhh hh] [Hhh　[h h h]　HAhHh　[hh　Hh　hh] hh　]
45　佐久:　　[heHA HA] [h ち [がうよ.]
→46　玲奈:　　[あなた]こうさしてた[人　　?　　]
47　佐久:　　[違(h)うちゃう]ちゃあ]=
48　佐久:　=[さ(h)[して(h)ないちょっ違. hh ちが]ちが. [ちょっと: ブーちょっ]と:=
49　萌　：　　[hh　[hhhh　hhh　hhh　hh　　hh　]　hh　[hhh　　hhh　　hh]
→50　玲奈:　　[あ　：　の: パステルカラーの]　　[シャーペンを,うん.]
51　萌　：　=[うん.
52　玲奈:　　[うん.
53　　(0.2)
54　佐久　：　あの:ガストみたいなとこに[たまってた(h)[だ(h)け.]
55　萌:　　[hhh　　[huh　huh]
→56　玲奈:　　[あ　:,]
→57　　不良だ[な:.]
58　萌　：　　[hh][huhuh　huh　]
59　佐久:　　[塾][もい(h)か(h)ず.]
→60　玲奈:　[まあなんていかん[わね:?]　　[Hhhhh

61　萌　：［hhhh　hh　hh　　［hhhhh］hhh　　［hhhh

62　佐久：　　［hhhh］　hah　　［hhh

【事例 5-3: Sakura04 00:10:50】

01　E:　前回盛り上がったんでしょう(か). .hh ((B と C に向けて))

02　　(0.2)

03　B:　前回はオーバーして,*((視線を C に))*

04　　(0.3)

05　C:　う[ん.]

06　B:　　[は]なして[た.]

07　C:　　　　[ず]っとしゃべって[たよね.]

08　E:　　　　　　　　　　　[huh　] [° hhh°]*((B に向けて))*

09　B:　　　　　　　　　　　　　　[うん.]*((E に向けて頷く))*

10　　(0.4)

11　B:　あっもう[授業だ]:って

12　E:　　　　[° .hh]°

13　C:　そうそう. 授業ギリギリまでしゃべ[ってたもんね.]

14　B:　　　　　　　　　　　　　　[うん.めっちゃ]しゃべっとった.=

15　E:　=[huhhh]　((笑っている顔))

16　B:　　[(.hh)　] 面(h)白(h)か(h)った(h)

17　　(1.1) *((E 視線を下に ; 4 回くらい小さい頷き))*

18　F:　ふん[ふん.]

19　E:　　　[メイン]トーク?　((C に向けて))

20　　(0.8)

21　C:　うん.

22　　(0.3)

23　C:　後半は俺がずっと質問してた. .hh

24　B:　huhh ((29 行目が終わるまで笑顔))

25　E:　う:ん.((頷き))

26　　(0.5)

27　C:　女の子ってこうゆうとこあるよねみたいな.

28　　(1.1)

29　E:　うざかったね?　((B に向けて))

30　　(0.8)

→31　B:　°え-°ここは-ここはここで面白かったよ.

32　E:　>¥あっそう.¥< Huhhuh ここはここで面白かった[って.] huhu .hh

33　B:　[huhh]

→34　B:　なんか (0.3) ↑あ:↓あ[:　:　:って] 言ったり,=

35　E:　[どうしたの?　] ((C に向けて)

36　E:　=°hhh°

37　C:　そう [そうそう.]

38　B:　[ね : ¿　]